
DQN !

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DQN！

【Nコード】

N7473P

【作者名】

フリスタ

【あらすじ】

人の話をあまり聞かない柏木 凧は二ト生活をしていたのだが、ある日突然、神様の手違いで死んでしまい。テンプレ通りに転生だ！

その転生先はドラクエ?!?

これは『ドラクエ?』の二次創作になります。

プロローグ（前書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんわ。
初めての方は初めまして。

他の作品もまだ完結してないけど欲望を抑えきれずに投稿！

ドラゴンクエストナギ

略してDQN！ 始まります！

プロローグ

俺の名前は柏木^{カシワギ} 凧^{ナギ}。

子供の頃から俺は神童と謳われ育った。

何をしても右に並ぶ奴なんてそうそういない。
ライバルと考えられるのは自分自身のみ。

欠点？

金持ちだし、顔も良いし、性格も悪いと言われた事はない。
彼女も3人いるが平等に愛している。

今夜もあの子の事をメチャクチャにしてやるんだ。

「って、感じにしてください!」

「お主はアホな子か？」

「何でも叶えてくれるんじゃないのかよ!？」

「いや、それは流石に駄目じゃろ……何て言うかツマラン」

目の前にいるのは自称神様を名乗る小さい女の子だ。
さっきから人の話を聞いてくれない。

「お主が聞かんのではないか……全く、もう一度説明するぞ?」

説明しよう! 俺は死んだのだ!!

ほらあ良くあるじゃん？ 手違いで殺されたんだってさ。」

まあ？ 俺は二トやってただけだから未練とかは無いし問題ないんだけど、

この女の子の自分ルールで他の世界に転生させるとか言い始めたんだ。

「いや、自分ルールとかではなくて、

そうしないと世界が歪んでしまうからだと何度も……」

そして、俺に行きたい世界は無いか？ なんて聞いてきたんだ。

リア充になりたかったから、それらしいの言ってみただけど

「お兄ちゃん駄目だってあ／＼／」と言って泣くむのだ。

「お主、相当アレだな……」。

この際だ。チート能力をやるからドラクエ5の世界に行け」

「何故にドラクエ？ 何故ファイブ？」

「何度聞いてもまともな答えが返ってこぬから適当じゃ」

「神様が職務放棄とは、世も末だな」

「お主みたいな奴が言って良いセリフではないぞ？

さて、まず容姿はどうする？」

「あ、俺ドラクエ5やった事ないんだけど……？」

「安心しろ。どうせ赤ん坊から転生されて生まれ変わるんじゃ。ゲームを全て知った上でやって楽しいか？」

「ツマランな」

「そうであろう、まあ元々の主人公がお主に変わるだけじゃ。
さあ、まずは容姿からじゃ」

「……改めてそう言われると迷うな……ん……」

ドラクエってドラゴンクエストだろ？ 確か5の主人公はターバン
巻いてた人……駄目だ。俺的にはカッコいけない。真面目に考えよ
う。

「ピコーンッ！」

「声に出して電球マークを浮かべるな……ほうFFFのクラウドが、
服装もそのままが良いのか？」

「アドベントチルドレン仕様にしてください！！ 合体剣もくださ
い！！！」

「分かった分かった。チート能力はどうする？」

「俺、最強！！ お金にも困らない様にしてね？ あ、あとFat
eの能力とかも使えるようにして欲しいなあ、あ、あとあと……！
！」

「ええい！ 落ち着け！！……全く。これで良いじやろ。最後に説
明するぞ、本来の主人公が消えてお主が主人公に変わる事によつて
様々なバランスが崩れる。そこでバランスを取るために、様々な改
変が生まれる」

「おkおk。どうせ知らない世界だし気にしない」

「じゃあ行つて来い」

俺は幼女に足蹴にされいきなり開いたブラックホールのな場所に吸い込まれて行つた。

「あゝれゝ……」

プロローグ（後書き）

感想は随時受付中！

アイディアも良いのがあれば即採用！！
まあ作者の欲望のままに染めていく物語ですw

01 大丈夫だ問題ない（前書き）

そんな第一話で大丈夫か？
大丈夫だ問題ない。

ナギは話を聞かないからな

01 大丈夫だ問題ない

ここは険しい山々に囲まれた王国。
その名はグランバニア。

玉座に座り辛そうな顔をしている男がこの国の王である。パパス王だ。

「パパス様……診断結果が出たようです。やはりマーサ様は……」

「そう……か……」

パパスは何度も妻のマーサに検査を受けてもらった。

マーサは「もういいのよ？」と苦笑いしながら検査を受け続けている。

マーサは子供が作れない身体らしいのだ。

パパス王と妃のマーサは国民からの親愛も厚く、

その事実は国民全員が本当に残念に思った。

それからと言うものの、パパス王は笑わなくなつたと、国民は不安になっていた。

ある日のことである。

雷雨激しい中、グランバニアの城門を叩く者がある。

「何があつたのです？」

門番は城門を開き、ずぶ濡れのローブを着た女性を招き入れる。

「国王にお会いしたいのです」

一瞬、不審がられはした女性だが、

その女性の目を見ると、門番は躊躇いもなく城へと招き入れた。

それはとても美しく、

紫色のローブから覗くのは水色の長い髪と赤い瞳だった。

「旅の者と聞きましたが……我が国に何様ですか？」

「噂を耳にし急ぎ馳せ参じました。妃様はお子が出来ぬお身体とか？」

パパス王は辛そうな顔で頷いた。

「お気持ちお察します。」

実を言つと、とある地域で同じ様な病が流行つた事があるのです」

「病だと言つのか！？」

病ならば治る。

パパス王は藁をも掴む勢いで玉座を降りた。

ローブを脱いだ女性は「恐らくは」と頷き返す。

「如何でしょう？ 私めに診させて貰えないでしょうか？」

時間も時間なため明日と言う事になり、
女性は部屋を与えられ、パパスは眠れない夜を通した。

次の日の事である。

マーサは言われるがままに薬を飲み、魔法での治療に入った。

一応念のために毒薬ではないか、
魔法は人体への異常を来すモノか、などの確認は行われた。

「ふう……これで良いでしょう」

「あら、少し気分が良くなってきたわ……」

マーサは身体を起こし、問題がない事を伝える。

「これで、子供が出来るようになるというのだな？」

「ええ、元気なお子さんが生まれる事を願います。

もしお許しがいただけるのであれば、お子が生まれるまでの間、
この城に置いて頂けないでしょうか？ 責任を持って見守りたいの
です」

「それは願ってもない。
よろしく願いします旅の方……失礼、お名前は何と言いましたかな？」

「私は、ゲマと申します」

ゲマは妃の世話係としてその身を城に置いた。
そして、数年後。

「オギヤーオギヤー！」

「良くやったぞマーサ！
名前を考えないといけないな……そうだ！ トンヌ……！」

「私、決めていたの。ナギという名前にするわ」

名前を言い終わる前にパパスの呪文はかき消されたが、
マーサはとても健やかな笑みを浮かべていた。

「良かったです。では、ナギ様ご誕生のお祝いをしなければなりませんね」

ゲマはそう言って大臣に視線を送る。

「はっ、そうでしたな！ 私とした事が失念しておりました。
早速国民全員に伝え、お祝いの準備をしなければ！」

夜。パパスは一人目が覚めた。
全員が嬉しそうに寝静まっている。そう全員がだ。おかしい。
門番すらも寝てしまっている。誰も起きている者はいない。

パパスは何か不安なモノを感じ、玉座の間を目指した。

玉座の間も暗く静まり返る。

寝室へと向かう。不安が大きくなって行く。

妻は？ マーサは！？

子は？ ナギは！？

その姿が見ればいい！ この不安をどうか、その静かな寝姿で消し去ってくれ！

胸を叩きながら気を抑えつつ、パパスは寝室に入った。

やはりそこには誰もいない。

しかし、気配を感じた。ベッドの下だ。

バツ！

「ば、パパス様！」

「一体何があつた！？」

そこにいたのは侍女一人だ。その腕にはナギが泣かずに寝息を立てている。

「マーサ様が邪悪な気配を感じ取り、私にナギ様を任せて、そこから……！」

テラスへと出られるドアを指さす。

パパスは外に出る。しかし、既に時は遅かったのであろう誰もいない。

「魔物の仕業か!？」

「わ、私も信じられないのですが……ゲマさんでした。料理を作っていたのもゲマさんです。それと、これを見つけました」

睡眠薬を盛ったと言うのか……一体何故!？
パパスは侍女が持つ紙切れを受け取った。

『親愛なるグランバニアの国王へ。』

お目覚めですか？ 料理に少し睡眠薬を入れさせていただきました。

お子が出来ない所為でのマーサ様の魔力の不安定さ

これを解消するのに数年の時間がかかりましたが、

それも些細な時間です。これからは恒久的に時間があるのですから。
念願のお子さんが手に入ったのですから、それは置いていきましよう。

ですが、マーサ様は頂きました。この魔力、どうしても必要な存在なのです

あ、そうそう。お子さんが生まれおめでとございます。

そちらは失わないと良いですね』

「ゲマ……ゲマーツ!!!」

「オギヤーオギヤー!」

—— 物語りは幕を開ける。

S i d e ナギ

目が覚める。

ギィギィ、と木が軋む音が響いてくる。

ここは船の中の部屋だ。

「随分とうなされていたが大丈夫か？ 少し外の風に当たると良いだろう」

大丈夫だ問題ない。父さんが俺を気遣ってくれる。

ものごころ付いた頃には父さんと旅をしていた。

父さんは攫われたという母さんを探して旅をしているらしいのだが、俺は母さんの顔も声すらも覚えていない。

船の甲板に出る。暖かな陽気の良い日だ。

やがて、船は小さな港に着いた。
父さんと俺はここで降りる。

しかし、乗るお客さんがいるようだ。
この船の持ち主のオジサンらしい。凄く宝石類を身にまとっている。
成金かな？ 貴族かな？

後ろからもう一人女の子が乗り込もうとするが、
高さがありすぎて一人では乗れないようだ。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

俺は手を貸して女の子を引きいれた。……いい子だ。

「ありがとう坊や。フローラ、部屋で休んでいなさい。では旅のお
方、お気をつけて」

船から降りると、父さんは港の人と話し始めた。

「ナギ、私はこの人と話があるから近くにいなさい」

俺は港の樽の中などを見たりして暇を潰すが、飽きてしまう。
ここは思い切って外に出てみる事にしよう。

ドスッ

「あ痛っ……って！？ スライム！！？」

この尖がった頭のスライムは見た事がある。一步外に出たらエンカウントかよ!!

スライムは3匹。俺一人。

何か他に戦うもの戦うもの!

ドスツドスツ!

「……」

ドスツドスツ!

「さっきからポコポコ、ポコポコ体当たりしやがって……つぎ投影開始
!」

俺は気が付いたらひのきの棒を合体剣に変えていた。

「あ、こうすりゃいいのね……ニヤリ……って重っ!」

「ピキーツ!」

ちよっ! ヤバス!

ズバッシュ!

あ、俺の初の獲物が……父さんが加勢に現れた。

「大丈夫か? ホイミ。これで良いだろう。」

一人で外に出るのは危険だ。さあついてきなさい」

大丈夫だ、問題ない。

俺は父さんについて行くことにした。

目的地はもう少し先にある村らしい。

というか息子がいきなり大剣持つてる事に突っ込みはなしかい？
というか神たま？

チートのはずが剣が重いんですけど、

スライムのタツクルが地味に痛いんですけど？

S i d e o u t

01 大丈夫だ問題ない（後書き）

感想は随時受付中

02 ラスボス? (前書き)

D O R A G O N Q U E S T N A G I !

略して〜……さんハイ!

D Q N !

感想を参考に、レベルアップを設けて、

主人公は徐々に最強になる感じにしました。

うる覚えで書いていきます。やり直さないぞ〜……多分。

02 ラスボス？

ここはのどかな村のサンタローズ。
畑を耕し、洞窟内から流れ出る自然の水を引き、人々は生活している。

焚き火に当たるだけのニートもいるようだが気にしないで欲しい。

こんなのどかな村に事件など転がり込むはずもなく、
平和と言言葉が似合うまま変化を遂げずにいた。

しかし、ある日のこと、村の入り口に立つ門番が大声で大事件だと
叫ぶ、

「パパスさんが帰ってきたぞーっ！！」

「パパス！？」

「パパスさん！？」

「パパス様！？」

Side ナギ

父さんは人気者の様だ。

片乳出したおっさんじゃないと知って俺は内心ほっとした。
だって不安じゃない？ 自分の親父が片乳出してるんだぞ？
髭も伸ばして髪は伸ばしに伸ばして後ろで縛る。

え？ 何それ怖い。みたいなの？

それを……「パパスさんが帰ってきて嬉しいなーっわーい！わーい！」
なんて言ってシスターは飛び跳ねている。ネジが緩んでいるシスターだ。

まあいい。世界観だ世界観。

片乳出したって良いじゃないだって人間だもの。ただし女に限る。

b y み。を

家に入ると、俺より年上に見える女の子が挨拶してくる。

「オジサマおかえりなさい」

遂に少女にまで手を出したか父さん！

「???? サンチヨ、この女の子は？」

なんだ違うのか。

「アタシの娘だよ。パパス」

「隣町のダンカンの女将さんじゃないか」

ダンカンこの野郎！のダンカン？

すげーなタ。シ軍団。ドラクエ5に出てるとは。

え？違う？知ってるよ。そうだと思ったんだあ。

「この村にご主人の薬を取りに来たって言っんで、寄って貰ったんですよ」

「ねえ大人の話って長くなるから上に行きましょう?」

「ん?」

「行きましようよ」

強引な少女だ。ヤレヤレだぜ。

「私はビアンカ。私のこと覚えてる?」

「うつん。覚えてない」

って言うか知らない。

「そっかー。でも仕方ないわね。あの時はもっと小さかったから、私はナギより2歳も年上のお姉さんのよ」

うん。カワイイお姉さんだ。8歳か、美人になるだろうな。

「本を読んであげるわね。えーと、『……ツカサの歌は……うつくしく……汗がキラメキ……』これは駄目だわ。だって難しい字が多すぎるんですもの」

「ビアンカー、宿に戻りますよ?」

「はいママ。じゃあまたね」

うん忙しい子だな。

さて、父さんは毎日のように洞窟へ向かっているようだ。
探し物があるらしい。

……まさか洞窟に母さんが？　んなわけねえわな。
ウチの母さんは魔物か何かじゃねえよな。

そんな時に俺はと言うと召使いにサンチョとお留守番だ。
というかサンチョも買い物だとかで家にいない。
こんな村じゃあ何もすることがない。う〜ん暇だ。

「そう言えば……この袋の中には何が入っているんだろう？」

最初から持っている大きな袋を引っ張り出し、俺は中身を漁った。
中には1冊の本が入っていた。

この本の説明書きが最初のページにある。

「え〜となになに……？」

- 1．このノートに名前を書かれた人間は死ぬ。
- 2．書く人物の顔が頭に入っていないと効果はない。
ゆえに同姓同名の人物に一遍に効果は得られない。
- 3．名前の後に人間界単位で40秒以内に死因を書くと、その通りになる。

- 4．死因を書かなければ全てが心臓麻痺となる。
- 5．死因を書くとさらに6分40秒、詳しい死の状況を記載する時

間が与えられる。

6・このノートは人間界の地に着いた時点から人間界の物となる。

7・このノートを使った人間は天国にも地獄にも行けない。

……なるほど奥が深い」

「何を意味深に嘘八百言っておるのじゃ」

「ああ神様気取りのロリっ子じゃないか。頭撫でて欲しいのか？」

「本当に話を聞かないやつじゃな……。」

無理矢理にでも地獄に叩き落としておくべきじゃったか……」

「説明に来たんだろ？ 聞いてやるよ」

「何で上から目線か知らんが、まあ言うだけ無駄じゃな。

その本はな、魔導書じゃ。経験値が上がるとレベルアップし、徐々に読めるようになるのじゃ」

俺はロリっ子の頭に手を置き、力を込めた。

あいあんくろっ！！

「イダダダダッ！！ 何をする！」

「そりゃこっちのセリフだ！！ チート能力で俺が最強のはずだろうが！！ 何で最初から魔力全開の全呪文習得済みじゃないんだよ！！ あっ！ 更に思い出したぞ！ 合体剣も重くて満足に使えなかったぞ！ スライムのタックルも痛えし、どういうことだ！！」

「イダダダダッ！！ 最初っから強くてツマランじゃろうが！

！ 放せ〜！！」

「……ふむ、一理あるな」

「分かつたら放せ！ 痛いから撫でんか！！」

なでなで。

「悪かったな〜大丈夫か？」

「なっ！？ こういう時だけ素直に撫でるな！！」

「どうすりゃいいんだよ……あれ？ でも投影はできたよな？ 何でだ？」

「この世界の呪文やお主自身の力などはレベルアップで育って行く。だが、この世界のものじゃない能力。投影だとかは別枠なのじゃ」

「なるほど。ところで、神様って言うのが本当だったとして、なんで痛がるんだ？ 人間の攻撃なんて屁でもないんじゃないのか？」

「人間として顔を出すときなどは、本当にその姿の力量しか出せんのだ。無闇に力を放出して災害を起こしても大変じゃからな」

「ふ〜ん、それなりに大変なんだな。じゃあ今はただの幼女なわけか」

「……おい」

「ん？」

「何で抱きついておるのじゃ？」

「何か人肌恋しくなつてな、気にするな」

「神に欲情しても無駄じゃぞ？ 私に惚れても何も起きん」

「そりゃ残念。じゃあ、俺は腕立てとかすればいいのか？」

「この世界では筋トレなんぞしても無意味じゃ、敵と戦い経験値を稼いでレベルが上がるのじゃ」

「でもよ。外に出れないんだよ。門番が出してくれないし」

「お主は本当に残念な子じゃな。ドラクエと言ったらRPGじゃろうが、そしてお主は主人公。分かるじゃろ？」

「俺イケメン？」

「そこそこな。って、そうではなくてだな、主人公が冒険始まって早々に何日も動けないわけがなからう。自分で情報収集して、クリアしなければいけないイベントを探してクリアし、次に進めるのじゃ」

「えゝ面倒くさゝい」

「黙れ二ート」

というわけで、俺は村を歩き回ることにした。

こちら、村の入り口のすぐ近くに家を構えるお爺さんと、その息子夫婦の家。

息子さんは裏で畑を耕している。寒いから作物が育ちにくいらしい。これはきつと大魔王の仕業に違いない。

お爺ちゃんは「食べてない！」と怒っている。息子さんのお嫁さんは「食べたなら言ってくればいいのにお義父さんったら……」と言っている。どうやら本日のメニューのメインであるシチューが鍋から突如として空っぽになったらしい。お爺ちゃんがボケてないなら……。これも大魔王の仕業に違いない。

お隣にある宿屋さん。宿帳に落書きがされているらしい。子供の落書きにしては巧すぎる。だって宿屋の親父さんが4割増しでイケメンにされて書かれているのだ。何故かその後ろには上半身裸でマスクを被ったパンツ一丁のガチムチが書かれている。BL？
これはきつと大魔王の趣味に違いない。

宿屋の地下にある酒場。まだ準備中だが、カウンター内にいる人が頭を抱えて悩んでいる。聞けば「最近、高い酒ばかりが無くなっているんだ。このままじゃ店が潰れちゃうよ……あ、坊やに話す事じやなかったな」とのこと。どうやら大魔王は無類の酒好きのようだ。

教会の裏にある土手を掘って作られたお店がある。親方さんが洞窟から戻ってきてないらしく、お店は開店休業みたいだが、そうか親方さんが失踪中……か。

俺は一度家に帰り、ごっそり山積みしている本を消化しているロリっ子に相談した。

「今いいところなんだ。ツカサの弱点がカエルとは……アイダダダダッ！！止めんか！！」

「と言うわけでラスボスが分かりました」

「はあ？何を言っておるのじゃ？」

「教会の裏にいるはずの親方さんがいないらしい。そして、村では数々の事件が発生している。犯人は……いや、このゲームのラスボスは親方さんだ！！」

スパーンッ！

「バカモノ！！明らかに親方を助けに行くイベントじゃろっが！」

「な、何だつてーっ！？」

「最初の村にいる名も無い親方がラスボスなんてあるわけないじゃろっが！！」

斬新なエンディングだと思ったんだけどな……。

開始数分でエンディング……！

世界最速のRPG。ドラゴンクエスト5！……みたいな？

「全く、さつさと洞窟へ行ってレベル上げをしつつ、親方を助けに行かんか。

私はツカサの応援で忙しいのじゃ」

そう言うともたロリっ子は本の虫になった。

誰だよツカサって。

「あ、そうじゃロリっ子と呼ぶのは止める。私にも名前はある。

私の名前は【ハク】じゃ。名前で呼べ」

「（ハク・ドラ１）…… 3900点」

「何の話じゃ……！」

洞窟にて候。

俺は合体剣を投影し、分離させ片手剣のみを装備し進んでいく。

スライムを倒し、とげとげの緑色の何かを倒し、大きい木槌を持った毛むくじゃらを倒し歩いていた。

パッパッパッパッパッ♪

ん？ 何だ？

俺は後ろからトランペットとドラムの音がしたので振り向いた。

「あ、お前らは!!」

「ピキー。あん時はすまなかつたなアニキ」

「俺達、あんたについて行くよ!」

「ただレベルアップの時に祝うだけだけどな」

正に外道!

なんて言ってる場合じゃないな。そこにいたのはスライム3匹だ。傷が物語っている。一番初めに会ったやつらだ。

何度もタツクルしてきやがったやつらだ。

「えつと何? レベルが上がるとお前らが出てくるの?

つか、倒したのは俺じゃなくて父さんなんだから、

父さんについて行くのが普通じゃねえか?」

「まあ俺達も雇われただけだからな」

「とにかくレベルが上がったら祝ってやるよ」

「今のアニキはレベル4になつたぜ。」

これで魔導書に1つ呪文が浮かんではずだ読んでみな」

「おお、本当だ。ホイミ」

しかしMPが足りない。……おい。

そしてスライム達は去って行った。あんにやろっ共……。

「……先に進むか」

「あ、あれは……」

岩に潰されながらも寝ているオッサンがいる。
とりあえずスルーして、俺はもう少し奥に進む。
何か見落としがあっても面倒だからな。

すると行き止まりなのだが、スライムが一匹いた。

「ピキー！ 僕、悪いスライムじゃないよ」

さっきのスライム達への小さな怒りを俺はぶつけた。
さっきのオッサンの上に乗っかっていた岩を奥まで持って来て、
スライムが身動きとれない様に封じ込めた。

「ピキーー！！」

君が悪いわけじゃない。

タイミングが悪かったんだ。さらば。

「いや、助かった。これでダンカンの女将さんに薬を届けられる」

そういつて大魔王、改め親方さんは洞窟を後にした。俺も出よう。

次の日。ダンカンの奥さんを隣町まで送るという事になった。
なるほど、こうやって物語が進むのか。

S
i
d
e

o
u
t

02 ラスボス？（後書き）

感想は随時受付中デスデス

・うん、ナギが6歳とは思えないw まあ記憶ありの転生者だから仕方ない。

・ツカサが物語になつてる？ でも出て来ないから気にしないでねw

・不定期だけどレベルアップするとスライム3匹が祝いに来る。
スリーアミーゴスじゃないよ？

・ホイミを覚えた。

次回「アルカパ？ アルパカ？」

03 報酬は猫、その名は……（前書き）

あけましておめでとございます。
今年もよろしくおねがいします。

では、

ドラゴン・クエスト・ナギ！

略して【DQN！】始まるよー！！

今回はアルカパの街に行きます。で、帰ります。（早っ！！）

03 報酬は猫、その名は……

Side ナギ

隣のアルパカ。

「【アルカパ】だからね？」

何度もビアンカに言われ続けようやく俺はその街の名前が分かった。

「アルパカでしょ？ 分かってる」

大丈夫だ、問題ない。

「違っつて言ってるでしょうが……あ、見えてきたわ」

中々距離があつたな。見えてくるのはサンタローズよりもかなり大きな街、あ、サンタローズは村が。

「ふふふ、パパス。ナギ君にウチのビアンカはどうだい？」

「女将、二人はまだ子供だ」

大人は大人で会話を楽しんで進んでいくが、魔物が出て来ない。うん、平和だ。俺はビアンカとの会話も途切れ、何気なく口笛を吹いた。

モンスターの群れが現れた。

「『魔物を呼ぶな！』」

「……え？ 俺？」

ビアンカと女将さんは後ろに下がり、父さんは剣を構える。
俺もサントローズの武器屋で270Gで買ってきた銅の剣を抜き、
呪文を唱える。

鬼に逢うては鬼を斬る。

ビアンカに逢うてはビアンカに萌える。——剣冑の理、ここに…
…！！

ズンッ！

「ぐふっ」

まん丸のネズミが俺の腹部に体当たりをかましてくる。

「な、何やってるのよナギ！！」

だ、大丈夫だ問題ない。

「大丈夫かナギ、ホイミ。これで良し。では行くでしょう」

いつの間にか父さんが魔物の群れを倒し終わっている。

……泣いてないやい。

パララパッパッパッ♪

すると、軽快なドラムとトランペットなどの音が俺の元に現れる。

「出やがったなスライム共……ってあれ？ 3匹だったよな？」

「ああ、コイツこの前洞窟で封じられててよ」

「助けるだけのつもりが、一緒にやってみたらこれがハマってな」

「コイツの出す音が妙にマッチするんだ」

「あん時は『悪いスライムじゃない』って言ったのに、よくも岩で封じてくれたな、だがまあ、おかげでコイツ等と一緒に旅する事になったんだ。感謝してるよ」

ああ、あん時の悪いスライムじゃないスライムが、俺が悪人みたいじゃないか。

「で？　俺はどれぐらいになってるんだ？」

「おう、そうだったなアニキ」

「今のアニキはレベル8だぜ」

「また新しい呪文を読めるようになってるはずだ」

「読んでみな？」

おお、読めるようになってる。今回は2つか、キアリーとバギか、キアリーは毒消しの効果らしいから今は良いとして、

<　バギ　>

「ちよっ！」「おまつ！」「ひでっ！」「ぐはっ！」

スライム4匹は空高く舞い上がって行った。

「ナギ〜！　何してるのよ〜！！」

「ああ、ごめんごめん！」

俺は少し先へ行く3人に合流した。

「へへへ……大物になるぜアニキ」

「ああ、俺らも惚れこむ男の中の男よ」

「レベルアップもすげー早い……」

「アニキならこの世界を……」

とりあえず、生きているようだ。

S i d e o u t

ここはアルカパの街。

サンタローズより離れた西に位置し、賑やかな活気を見せている。
一番大きいのは何と言っても宿屋だろう。

そこにやってきたのは旅の4人組。旅の者と言っても3人は女子供で、

屈強そうな男性1人しか戦力になりそうにない。

4人組は真っ直ぐに宿屋を目指し中に入る。

泊まりに来た？ 違う、宿屋の主人に薬を持ってきたのだ。

「苦いゝ飲めないゝ」

「うっせ！ 飲め!!」

良薬口に苦しとはよく言ったもので、ダンカンが飲み終わるとすぐに効いたのか眠りについたようだ……。もしかしたらボディープロ
ーをくらい、悶絶してるところに無理矢理飲ませたからなのかし

れないが、他人の家庭の事には突っ込まない事にする。

男の子は飽きたのか、街を見に行こうと思ったようで、その場を離れた。

「買い物に行くの？ 私も行く」

そう言って、女の子もついて行く。

S i d e ナギ

「いや、女将さんは良いパンチ持ってたな、魔物とも戦えるだろうに」

「お母さんは昔、武道家だったらしいの」

なるほど、世界狙えるよ。まだ行けるよ。

買い物をした。武器と防具を一式揃えて、ピアンカも欲しいと言うから買ってあげた。お金？ 何か知らんけど金だけは困らないんだ。お金だけチートとか。その後ブラブラ歩いていると、橋を渡ったところで、猫と遊んでいる男の子二人がいる。

「可哀そう……酷いわ」

あ、本当だ。良く見ると虐められてるようだ。

「コイツ面白い声で鳴くんだぜ？ おらゝもつと鳴けよ」

木の棒などで突っついたりして、男の子2人は虐めを続ける。

「止めなさいよ!!」

「何だよ！ お前らには関係ないだろ!？」

「でもコイツで遊ぶのも飽きてきたぜ？」

「ならコツチに寄せよ」

「何だお前、生意気だな……」

「どうせ、懐かないぜ、すぐ噛みつくんだコイツ」

俺は猫(?)に歩み寄り、手を差し伸べる。

「あ、危ないわよナギ。噛むって言うてるじゃない」

「大丈夫大丈夫」

その手は引つ搔かれる事もなく、噛まれる事も無く猫の頭を撫でられた。俺は動物は大好きで、寄ってこられる事はあっても、噛まれたりとか嫌われる事は無いのだ。

「か、カワイイ。私にも撫でさせて」

「な、マジかよ……あ、そうだ。じゃあレヌール城のお化け退治したらお前らにソイツやるよ」

「そいつは良いや！ レヌール城のお化け退治と交換取引だな」

えゝ何それ。お前らが次の遊び対象として行けば良いじゃん。

あ、これが次のイベントか。

でも、また門番が邪魔で外に出れないぞ？

俺はピアノカを連れまわし、酒場とか教会とかぐるぐる回るが、外に出れそうな感じにならない。

「そ、そろそろ帰らない？」

なるほど、一理ある。

ピアノカにしたがい、俺は宿屋に戻った。いい子だ。

「どうやらダンカンはただの風邪らしい。では帰るとしよう」

ちよっ！ 帰るんかい！

「待って下さいよ！ 1日だけでも泊まって行って下さいよ！」

女将さんがそう声をかけてくれる。

そう、それで良い。危ない危ない、全く父さんはKYなんだから……。

まあとりあえずこれで、明日以降にでも何かが起こるのだろう。

……カチャ、キイイ……パタン。
ユサユサ……ユサユサ……。

「起きてナギ。ナギ」

……夜這い？

俺は頭をフル回転させるが、その答えしか出て来ない。

隣には父さんがいる。ばれずにイけるか？ それとも部屋を変えて！？

何て大胆なんだこの世界の女の子は……！！ ……ゴクリッ

「まだ寝ぼけてる？ さあレヌール城行くわよ」

うん。知ってた。大丈夫だ問題……ないよ。うん。

門番も眠りにつくアルパカの街。

モンスター入ってきたらどうするんだよ？

さて、昼間かき集めた情報をまとめると、レヌール城は誰も住んでいないようになっていて、お化けが出るようになった。その城は西側の方にあるらしく、そこのお化けを倒すと猫が貰える。とのことだ。

「猫ちゃんのためにも絶対お化けを倒すわよ！」

そう言ってる傍からビアンカはレヌール城の中で迷子になった。

おいおい、怖くて逃げ出したのか？

というか、この城の中に入った瞬間に雷が凄いんだけど……何？ オバケ？

城の屋上に出る。そこには墓がある。何故に墓が屋上にあるのか……。

調べてみるとそこには【ナギの墓】と【ビアンカの墓】と書かれて

いた。

「……これはあれか？ 小学校とかで少し異性と仲良くしたら、黒板とかに相合傘で名前を書かれるアレなのか？」

「何を言つておる。さつさと助けてやらんか」

「……3900点」

「名前はハクじゃ。何の点数だそれは……」。

そこにビアンカの墓と書かれておるじゃろうが」

突然現れたハク・ドラ1は墓を指さしてそう言う。

なるほど、かくれんぼで墓に隠れるとは、誰も見つけられないだろう。

「いや、かくれんぼはしておらんじゃろうに……お主は本気でボケるから困る。そろそろ私も出てこなくともよいか？」

ハクがいなくなると、俺は墓を開いた。そこにはビアンカがいた。

「あゝ苦しかった！ さつさと助けに来なさいよね！

でも……見つけてくれてありがとうナギ」

この歳で既に男の心を掴む術を持つとは、女とは恐ろしいモノだ。

更に進んでいくと、台所に出た。つばを調べると【たいまつ】を見つけた。

「いやいやいや、ワシを飛ばしてソレを見つけないでくれる？」

そこには王様っぽい格好の透けたお爺さんがいた。

うん幽霊なんだ。ってことは……。

「貴様がこの城のお化けかぁ……（チャキツ） 鬼に逢うては……」
「ちやうちやう！ この城のお化けが住み着いてから成仏できん元城主じゃよ」

お爺さんの話だと、お化けの親分がいて、それを倒すと成仏できるらしい。

「可哀そう……絶対お化けを倒してお爺さんと奥さんを成仏させてあげましよう！！」

おい、何か目的が変わってないか？ まあその流れで助けられるなら別に良いか。

更に進んでいくと廊下のだ真ん中に石像がある。気持ち悪い石像だ。と言うか、道のど真ん中に設置しなくてもよくないか？ 俺はビアンカとその脇を通り、奥に進もうとするが、

ズズズズズ……。

後ろを振り向くと、石像がある。近くにある。……めっさ近くに。俺達歩いたよな？ 何て考えながらまた歩き、また振り返る。同じ距離間で石像がある。

「な、ナギ……コレって」

「うん。間違いない！ 最新鋭のセキュリティー装置に違いない！」

「……え？ いや、違って……」

「とりあえず、俺達に関係ないから先を急ごう」

「ちょ、ちよつと待って！ 敵！ 敵だから俺！！」

「ちよつ！ 段差が！！ 待って！！！！」

目が光るセキリティーの石像を無視して更に進んでいく。なるほど、石像は喋る事も出来るようだ。素晴らしい。アレなら怖くて盗人とかも逃げ出すわな。

そして、落ちたり、塩かけられたり、食べられそうになりながらも俺達は、

この城の玉座の間の前に辿り着いた。

そこには外に出ようとしているローブを着たお化けがいる。

「遂に見つけたぞ」

「絶対許さないんだから」

外に出るとテラスになっているようで、そこでお化けの親分はウロウロとしている。

俺は銅の剣で後ろから襲いかかった。

「ギャー！！」

「……何か悪いことしてるんじゃないかしら？」

とか言いつつ、ビアンカも鞭でビシバシ叩いている。

「目覚める！ 目覚めてしまっ！！！！」

親分ゴーストは目覚めそうになっていたのとどめを刺した。そして、

「も、もう悪いことしませんから見逃してくれませんか？」

「悪いことしないなら良いんじゃないか？」

「あ、ありがとうございます。へへへ、アンタ立派な大人になりますぜ」

元二トですがマジですか？

パララパツパツパッ

「ん？ また上がったのか……おい、減ってるじゃねーか」

「アイツはいい奴だったんだけどな」

「こつちも仕事だからな、感情論じゃあどつにもならないんだ」

「ま、音楽性の違いってやつだな」

スライムが音楽性を語るな。

減っているのはスライムの数だった。

「アニキのレベルは10になったぜ」

「呪文もまた新たに読めるようになったぜ」

「試しに読んでみてくれ」

読めるようになったのは【ライデイン】と【メラ】と【バイキルト】だった。

おおっ3つも。

「じゃあ試しに……」

< ライデイン!! >

ピシャーン!! コロコロコロ……。

うん、自然の雷なのか魔法での攻撃なのか判別がつかない。じゃあ

……

< メラ! >

遠くにあった1本の大樹が燃えさかる。

「流石アニキ! メラなのにメラミ並み、いやメラゾーマ並みだぜ
!」

「アニキについていける俺達は幸せもんだ!!」

「本当について行くだけで、戦いに参加はしないけどな」

正に外道!!

後はバイキルトをビアンカにかけたりしてみた。

うん、戦闘中じゃないと効果が分からないな。

「スライムと遊んで何やってるのよ? あら? 何かしらコレ」

金色の宝玉をビアンカは見つけていた。

「きんた……」

言い終わる前にビアンカは俺に全力投球してきた。

俺は腹で2倍の威力になっているソレを受け止めるにいたった。

「し、失礼しました…… (パタッ)」

少年と少女がレヌール城のお化けを退治した事は瞬く間に広がった。

「約束は約束だからな。ほら連れて行けよ」
「お前達、根性あるんだな」

そして、報酬とも呼べる猫をナギとビアンカは受け取っていた。

「そうだ！ 名前付けてあげないとね！ どんなのが良いかな？」
「ムツクル！！」

「……ムツクル？ ほらプツクルとかボロンゴとか……」
「ムツクル！！」
「キョフーン……」

ナギは異論は認めないと言う面持ちで押し通した。

「さて、では世話になったなダンカン」

「ナギ！ また一緒に冒険しようね！ 絶対よ？ あ、そうだコレ！ 忘れない様に持ってて、そうだムツクルちゃんに付けてあげるわね」

サントローズの村に戻る道中、パパスは息子の成長を誇らしくも、寂しくも、心配そうに声をかけた。

「レヌール城のお化けを退治した事には驚いたぞ、しかし、あまり無理をするな？」

「うん（出来れば俺も家でゴロゴロしていたい、外に出たくない）」

「うむ、では戻るとしよう」

そのニートの考えが籠っている答えに、パパスは知らず知らずに満足していた。

03 報酬は猫、その名は……（後書き）

感想は随時受付中なのじゃ

・城主は親分ゴーストではなかったようだ。少し残念。

・最新鋭のセキュリティシステム【動く石像！】一家に一台ど
うぞ！！

・ムツクルGETだぜ！！「キョフン……」

次回！「妖精の村にはエルフ娘が沢山いる」
あなたのハートにライデイン！！

04 氷の女王（前書き）

ドラクエENGINEじゃねえ！ ドラクエNAGIだ！！

略してDONだ！！

じゃあ始めます。本番より……スタート！！

04 氷の女王

Side ナギ

サンタローズの村に帰ってきた。父さんは洞窟には行かずに家にいるようになったんだけど、調べものしてて一向に動かない。俺もそれに倣ってゴロゴロしている。

「ナギ……何をしておる？」

「ハク嬢ちゃんじゃないか。どうしたんだ？」

ベッドでゴロゴロしながらムツクルを抱きかかえていた俺は、目の前にやってきた神様気取りを撫でる。

「このニートが……さっさとイベントを進めんか！」

「えゝ何言ってんだよ。何も進まないよ。お手上げだ。前回同様に寒さによって育たない作物、毎日のように消える民家のシチュー、宿屋の落書き、酒場から消える酒、最近じゃあウチからもまな板が消えるらしいな。他には特に何も起きない」

「十分起きているではないか！！話してない奴はおらんのか？」

「教会は行っていないな……何か気分悪くなるんだあの場所」

「お主は魔物か悪魔の類か……？ さっさと行つて来い！」

そう言つてハクは俺をベッドから蹴り落とし、本棚から読み進めている本を本棚から取り出し、読み始める。何て神様だ。そこは俺のベッドだぞ……。いや、やっぱり神様じゃなくて本当はただの幼女なのではないだろうか？

「んなわけ無かるう、さつさと行け。ふむ、アリの水攻めか……」

とりあえず考えは見透かされているらしい。何の本だ全く。

「あらナギ君。教会に何か用？ あ、聞いて聞いて！ お姉さんね、運命の出会いをしたのよ！！ さつきすれ違ったんだけど、かなりのイケメンがいたのよ？ 名前も聞けなかったけど、まだ近くにいますかしら……」

ふむ、イベントが進み始めたようだ。恋する頭のネジが少し緩んでいるシスターが言うには、今回の犯人はイケメンらしい。最近の魔王とかはイケメンだったりするから十中八九そいつが大魔王だろう。くそ、こんな小さな村を姑息な手で襲うとは……シチュー好き、B好き、酒好き、まな板プレイ……まな板プレイ！？ 聞いた事がないが、何て変態なんだ！！

教会を後にして、俺はもう少し聞き込みをした。

「ああ、間違いなく俺の方がイケメンだが、確かによそ者が村に来ているな。まあパパスさんがいる内は大丈夫だろうが、何かあったらとっちめてやらあ」

そう話すのは武器屋の親父さんだ。

うん、アンタは良く言ってもイケメンじゃなく、ダンディー寄りだろう。その出っ張った腹に、もっさりの髭がなければな。

「買った武器や防具はちゃんと装備しないと意味がないぞ」

当たり前じゃね？ 何？ バカなの？ 死ぬの？ それしか情報持っていないの？

「うゝ寒い寒い。こゝろ寒いと働けないよねゝもう夏だって言っている」

このニートが、焚き火に当たるニートは働く気がないらしい。

「ここはサンタローズの村よ？」

うん知ってる。しかし何故に媚を売った？

俺は情報をまとめて一度家に戻った。

「と言うわけで、今回こそは大魔王様が御降臨なされたいらしい」
スパーンッ

「何を敬っておる！ それに、そのイケメンの旅人は見たのか？」

「それらしいのが教会の前にいたね。まあ寒いし明日にするよ」

「さっさと行つて来んかーっ!!」

ふむ、怒りん坊さんめ。

俺はとりあえず教会前に来た。うん、いるね。ターバンを巻いている旅人風な感じ。確かにイケメンだ。俺が大人になつたら俺の方がイケメンになるだろう。それに変態らしいしな。

大魔王のくせに角とかは生えてないのか。

俺はとりあえず警戒して、ムツクルに金の宝玉。ゴールドオーブを与えて、玉遊びさせて、何かしてくるようなら反撃しようと思った。さりげなく「あ、ボール取ってください」と言えば良いだろう。

「僕、綺麗な石を持っているね。少し見せてくれないか？」

何と、アツチから話をかけてきやがった。まあ別に構わんか。

「うん、良いよ」

と、見せかけて！ ムツクル噛みつけ！！

「キョフーン」

「あはは、カワイイ猫だね」

何と！ ムツクルが懷いてしまうとは……。大魔王、侮りがたし。

「はい、ありがとう。じゃあ僕は旅を続けようかな」

そう言って、大魔王は村を出て行った。

あれ？ 終わり？ 村は？ 焼き払うとかしないのか？
あるえ〜？

もしかすると聞き込みが足りないのか？

そう思っただけでまた村をぐるぐると徘徊する。

すると、俺の家の地下倉庫でソレを見つけた。

「本当のボスはお前か！！ （チャキツ） 鬼に逢うては鬼を……」

「私の姿が見えるのね！？」

俺は姿が薄い女の子に抱きつかれた。

幽霊なのに触れるのか！

「ようやく見える人に会えたわ！ お願い助けて欲しいの！！」

幽霊の手伝い？

これが次のイベントか。

「私の名前はベラ。——ナギって言うのねよろしく。それでね。
今、私達の住んでいる妖精の村が大変なことになっているの！」

妖精とな？

よくファンタジーものとかで妖精っていうと、凄く小さくて羽が生えてて裸の女の子のイメージだけど……。

「うん、違うから。さあ行きましょう！」

違うなら行く気も失せると言うものだ。しかし、俺はベラに首根っこを掴まれるように引き摺られ、作り上げられた光の階段を上らせられ、ワープした。

連れて来られたのは妖精の村だとのこと。ベラはエルフラしく、村にもエルフが沢山いる。

「うん、飛びぬけてベラがカワイイな」

「がうがう」

「そ、そう？ お世辞でも嬉しいわ」

大樹を掘り抜いて造られた建物に入って行き、この村の代表ともいえる、ポワンと言うエルフに会った。

「ポワン様。力になってくれる戦士をお連れしました。ナギです」

「ふふふ、可愛い戦士なこと」

「そういうポワンさんの方が可愛いですよ？」

「え、えつとポワン様。彼はこう見えても……」

「大丈夫ですベラ、全て見ておりました。しかし、ナギ様？ 私は人間で言うと18歳です。歳の差もありますから、諦めて下さい。

ああ、そんな。美しいだなんて……」

それは言っていない。綺麗だけどこの人は少しズレているようだ。

栄養が表面だけに行つて、脳に行かなかったようだな。うん。

「何か失礼なこと考えてませんかナギ様？」

……勘は良いようだ。

「こほんっ。ポワン様」

「え、ええ。しかし、ナギ様は本来、寧猛なキラーパンサーを従えてるのでから不思議な力があるのかもしれませんが」

「キラーパンサー？ ムツクルって魔物だったの！？」

「がうがう……」

「ナギ様。あなたに頼みたい事があるのですが、聞いて頂けますか？」

「良いだろう、報酬はスイス銀行に振り込んでくれ」

「ふふふふ……お願いしたいのは春風のフルートを取り戻して頂きたいのです。アレがないと冬のまま春を迎える事が出来ないのです」

やんわり笑って流された。ボケ殺しかよ。

「春風のフルートがないとナギの住んでるサンタローズもずっと寒いままなのよ」

「どつりで夏なのに寒いわけだ。で？ その春風のフルートってどこにあるんだ？」

「北の氷の洞窟にその身を潜ませているザイルと言う者が盗んだようです」

「エグ……」

「何か危ない気がするから言わないで」

「キョフーン……」

俺は妖精の村で装備を整えて北へ向かった。

「ここが氷の洞窟か」

「ガルルルル」

「あ、開かないわ！ あ！ 忘れてた！ 確か鍵の技法がないこの扉は開かないのよ！ 鍵の技法は村から西に行った……」

< メラ >

メラと言う名のメラゾーマが氷で出来た扉を溶かして行く。

「……鍵なんてあつてないようなモノよね。うん」

「がうがう」

「さて、進もう。寒いからガンガン行くぞうって滑る！！ くっ！！」

足場が悪い！ ヤバイ！ 目の前にある落とし穴に落ちる！！

「何の！！ トリプルアクセル！！」

ザシャーッ！！

「おおー！！」

「がうー！！」

なるほど、これなら進めるか。俺はフィギュアスケートの要領で進んで行く。俺のチートなストレートラインステップシークエンスを見やがれ！！

「わぁっ！ お、お前ら何でここでスケートしてんだよ！ むっ！
お前は妖精だな！？ ポワンの手先め！！ 春風のフルートは氷
の女王様のモノだぞ！！」

パチパチパチパチパチ！！
テチテチテチテチテチ！！

拍手とムツクルの氷の床を叩く音が会場に響き渡る。

「凄かったわよナギ！」

「がうがう！」

「いやゝ疲れたぜ。腹減ったな、飯食いに行こうか」

「話を聞け！！」

「誰？」

「がう？」

「アンタはザイル！！」

何！？ いつの間にか俺は敵をも味方に出来る様な演技が出来るようになったていたのか！？ この後のフリースケーティングも頑張らなくては！！

「聞いてなかったみたいだし、大事なことからもう一度言っぞ！
春風のフルートは氷の女王様のモノだ！！」

「がう？」

「違うわよ！ 春風のフルートは妖精の国の宝よ！」

氷の女王様って何？ どSな鞭使いのボンテージ姿のお姉さまでもいるのか？

ザイルってあの若さにしてどMの変態か……。

「絶対にお前が考えてるのと違うから！！ 喰らえっ！！」

そう言っただけザイルは斧を振り上げてかかって来た。

「ムツクルGOー！！」

「グルルルウーガウーッ！！！！」

「ギャーッ！！」

ザイルは頭をかじられ血をだらだら流している。

「ホホホホ、オーホッホッホッホッホ！！」

「ああ！ 女王様！！」

「やはり子供をたぶらかせて使っただけ言う私の考えは甘かったようです」

「じよ、女王様！？」

突然現れた氷の女王。なるほど、どSのようだ。

「くっ！ フルートを返さない！！ < ギラ！ >」

「ホッホッホッホッホ！！ その程度の火など効きません！

冬は一番美しい季節。氷は一番美しいもの！！ 美しいのはポワンではなくてこの私よ！！ 氷の女王と呼ばれる私のトリプルアクセルに平伏しなさい！！」

何の対抗意識だ。

まあその程度の火じゃなければいいんだろ？

< メラ >

「ちよっ！ メラじゃないでしょうソレ！？ キャーッ！！」

S i d e o u t

S i d e 氷の女王

負けた。私がこんな子供に……。

ああ、少しずつ歩み寄ってくる。

こんな子供に私はこれからメチャクチャにされるのね……。

服を全て剥ぎ取られ、破り捨てられ、この白い美しい肌が全て曝され、

「氷の女王って言うからSだと思ってたんだけどな、

おい、何で濡れてるんだ？ この変態が！」

「や、止めて……！」

「へえ、ここは温かいんだな」

「あ、そんな強くしないで……！」

S i d e o u t

Side ナギ

「な、なあ、あの女王様ってどこか打ったのか？」

「さ、さあ……？」

「キョフン……」

「ああ！ 駄目よ！ そんなの入らない……？？」

目の前の変態に、俺はとりあえず銅の剣の腹で頭を叩き、気絶させた。

奥の宝箱には【春風のフルート】が入っていた。

パララパツパツぱふふふ♪

ん？ 今回は最後の音ハズしたな。

「よう、どうしたんだよ。メンバーは変わってないみたいけど……」

……」

「俺達は常に新しい事に挑戦してるんだぜ」

「アニキがレベルアップして成長するように俺達も成長してるのさ」

「まあ今回はただの体調不良によるミスなんだけどな」

「そうか、まあ体調には気をつけろよ？」

「ありがてえお言葉だぜ！ さて、アニキのレベルは12になったぜ」

「新しい呪文も読めるようになってるがそれだけじゃねえ！」
「最初は重くて使えなかった大きい剣があるだろう？」

使えるようになったのか！ 俺の力がそこまで上がったか！！

「アレの小型verが使えるようになったぜ？」

「アニキにちょうどいいサイズだな」

「詳しく知らないけど『投影』ってやつで自分サイズのが作れるらしいぜ」

なるほど、子供サイズの合体剣か……。 まああると楽かな？

「ナギってスライムとも仲が良いのね」

「まあコイツ等は少し特殊だな」

「がう」

さてさて、呪文は……。 【ヒヤド】 【スクルト】 か。

一通り試して、俺達は妖精の村へと帰った。

「と言うわけで、これが黒幕の氷の女王で……」

「ゆ、ユキと呼んでください御主人様？」

どうやら、幻術で女王をやっていたらしく、その姿はベラと大差ないくらいの女の子だった。 名前はユキと言っらしい。

「そ、そうですか……」

「で、こっちが春風のフルート」

「まあ！ これは正しく春風のフルート！ ありがとうございます ナギ様。これで世界に春を告げる事が出来ます。あなたが大人になり、もし何か困った事があれば、再びこの村を訪ねなさい。きっと力になりますよ」

そう言ってポワンさんはフルートを吹き始めた。
銀世界だった景色が春色に染まって行く。

「あ、これは持ち帰ってください」

最後に何か聞こえた気がしたが、光に包まれた俺には聞き取れなかった。

「あいだっ……っ、帰ってこれたか」

尻もちをつく形で目を開くと、そこは俺の家の地下だった。

「がうがう」

ムックルが何かに反応している。俺はそちらに身体を起こそうと手を地面につこうとするが、奇妙な感触が手に当たった。

ふよん。

「やん？」

「何……だと……？」

「御主人様、まだ明るいですよ？」

へへへへへへへへへへ変態だあーっ！！
氷の女王こと、ユキが目の前にいた。

パラッ

一枚の紙切れが落ちてくる。

『ガンバッ』 byポワン』

バカじゃねーの！？ 本当にネジが緩んで……ネジが無いんじゃないの！？

S i d e o u t

04 氷の女王（後書き）

【感想は随時受付中】がうがう♪

フリ「はいどうも～作者のフリスタです～」

ナギ「ゲストの主人公です～」

フリ「唐突に楽屋感覚で始まったノリをお楽しみください」

ナギ「質問質問～。何でドラクエなの？」

フリ「好きだから。中でも5が一番好きだから」

ナギ「俺って5知らない設定で良かったの？」

フリ「ドラクエ5自体をうる覚えの人もあるしね、私もそうだが…

…」

ナギ「まあいいけど。俺の設定も最初考えてたのと真逆になったよな？」

フリ「最初は根暗で泣き虫キャラだったな～」

ナギ「しかも銃使いwww 無いわ～」

フリ「そのキャラはFateで書いて行きたいのがあるんですよ。変更点は多いけどね」

ナギ「Fateは難しいぞ～？ まあ他で見た事がないパターンだから面白いと思うけど」

フリ「さてさて、雪女のユキちゃんどうですか？」

ナギ「いや～妄想癖のある女の子だね。まあ敵が味方になるのは良

いよな」

フリ「そんな感じで増えて行くから。皇太后の偽物とか」
ナギ「No t h a n k y o u」

フリ「冗談です。活かすところは活かせばって感じだね」
ナギ「ところで？　俺が全然投影魔術とか使ってないんだけど？」

フリ「……さて、次回は」
ナギ「完全に忘れてやがるな……」

フリ「違う！　使いどころがないだけだー!!」
ナギ「沢山あるだろうが!!」

フリ「大人になったら使わせてあげるから」
ナギ「大人になるまで無しかよ……」

フリ「では次回。【初めての敗北】」
ナギ「完全に俺が負けるパターン!？」

フリ「または、【王子よ子分になれ】」
ナギ「あ、逆パターンね」

フリ「または、【ゲマの初恋】」
ナギ「惚れられてまうやろーっ!!　って多いー!!」

もちろんいずれも採用されない事がありますw

次回もあなたのハートにライデイン♪

05 初めての敗北（前書き）

ドラクエ・ナギ。

いよいよ始まります。ナギ……始まったな。って感じですよ。

では今回は幼少期のラインハット編です！ どぞ。

05 初めての敗北

Side ナギ

サンタローズにさよならバイバイ、俺はコイツと旅に出る。

「キョフーン」

鍛えた技で勝ちまくり、仲間を増やして次の街へ」

「御主人様。これはどこへ向かっているのですか？」

む、邪魔が入ったようだが、……説明しよう！

この俺を御主人様と呼んでくれるのは、雪女的な存在だったユキ。倒したら付いてきたオマケみたいな奴だ。今は長い黒髪をポニーテールにしてメイドの格好をしてついて来ている。見た目は中タイケてるが中身は【どS】と【どM】が同居する変態だ。そして俺はというと父さんについて行っている。

「父さんが【ラインハット】って城に呼ばれてるらしいんだ」

「ラインハット……軍事大国の一角ですね」

「あれ？ ユキは何でそんな事知ってんだ？」

「勉強しましたから」。御主人様のメイドとなった今、恥は曝せません。何でも出来るようになりますので、よろしく願いしますね」

親父に全く悟られずに行動を共にしているのも凄いと思うけどな。

忍者みたいだ。凄腕のメイドは気配も自在に出来るのか。ただの変態ではないらしい。

「ナギ、これから行くラインハットでの事が済んだら私は少し落ち着くつもりだ。ナギにはほとんど構ってやれなかったからな、これからは一緒にいられるぞ」

「本当？　じゃあ父さん、その時は剣の稽古をつけてよ」

「ああ、約束だ」

こつこつのも良いな。お父さんとキャッチボールみたいな感じ。さつさとラインハットのイベントを終わらせよう。

父さんは国王と二人きりで話し始めた。俺は城の中を見学してきなさいと言われ、縦横無尽に歩き回った。

「うわっ！！……ビックリした〜ヘンリー王子かと思ったよ。ヘンリー王子は人の背中からカエルを入れてくるんだ」

「アンタ大変だな……」

確かハクが読んでいた本の主人公はカエルが弱点だとか言ってたな、もしそれをやられたとしたら卒倒してしまうだろう。

「ヘンリー王子は本当は悪い子じゃないのよ。みんなの気を引きたいのよ。でもやりすぎちゃって引かれるだけなんだよね〜。お母さんがいないから捻くれちゃってるのよ」

「なるほど」

ヘンリー王子というのは、ヤンチャ坊主という事らしい。好きな子には意地悪しちゃうって感じか。つまり……ツンデレだな。

「御主人様。恐らく違つかと……」

「次の国王はヘンリー様がデール様か？ まっ よほどの事がない限り、後継ぎは長男のヘンリー様だろうな！」

と、話すのは兵士の休憩室にいた傭兵のおっちゃんだ。

ふむ、後継ぎ問題があるようだ。俺の出番はないんじゃないかね？

「みんなどうかしてるぞ。王様がまだ元気なのに次の国王の話なんて……」

そう冷静に考えているのはこの城の正規の軍人のようだ。確かに国王は、さっきチラッと見たけど元気そうだったな。じゃあ、何で後継者問題が今起こるんだ？

俺は歩き回っている内に迷ってしまい、第二王子の部屋へと辿り着いた。

この第二王子の噂は何も聞かなかったな。

「ホホホ。我が子、デールに挨拶に来たのですか？

幼いながらに中々目先が利くに見える。兄のヘンリーより、このデ

ールの方がよほど王に相応しいと思ったのか。ホホホホ」

「ぼ、僕、王様になんかなりたくないよ……」

ふむ、前の王妃は何かしらの要因で死んでいて、この高笑いする女が転がり込んできてデールを産んだ。それで、このバカ親がデールを押していて、実の母親のいない第一王子のヘンリーは目の上のたんこぶになっていると言ったところだろう。

「素晴らしいご推察です御主人様」

「がう……」

ムツクルだけ「普通じゃね？」みたいな顔をしている。

「なあデール王子？」

俺、この城で迷ってるんだけど、ヘンリー王子はどこにいるんだ？」

「お兄ちゃん？ お兄ちゃんなら、その階段を上がって……」

やってきたのはヘンリーの部屋の前の廊下。

王様と話が終わったらしい父さんがいる。

「おお、来たかナギ。どうやら父さんはヘンリー王子に嫌われてしまったようだ。同い年のお前なら心も開いてくれるだろう。後ろのお嬢さんもこの城の方かな？ ナギは友達を作るのが上手いようだし、頼めるか？」

「うん、任せてよ！（ニヤリ）」

父さんはユキに目をやり、ヘンリーの子守りを俺に依頼した。俺は部屋の前まで行き、腰の鞘に手をかけた。

俺には分かっている。ヘンリー、お前は寂しいから周囲の人間を虐めたりからかったりしてるんじゃない。お前に大魔王が乗りうつってるんだろう？ お前を倒してエンディングだ！ そこから俺のバラ色の二ートライフが再始動するんだ！！ さあ俺のために華々しく散るのだ！！

俺は銅の剣を抜き構えて突撃した。

「動くな！！ Non stop!!」

「わあっ!?!」

「というわけで、お前が今回の黒幕だな？ 面倒な国王なんて職は弟に任せるつもりで自分は愚かな道化を演じているんだろう？ そして、自分が目指すのは二ート生活とは羨ま……！ 心は痛まないのか！」

「自分の事は棚に上げて、他人の事はボロボロに言うなんて、流石は御主人様です！」

「がうがう……」

「お前、さてはあのパパスとか言う奴の子供だな。どうせ俺の面倒を見るとか言われて来たんだろう。相手にしないぞ、さあどっか行け」

人の話を全く聞かない二ートめ。

チクチク

「イテ！ イテテ！ お前！！ 王子である俺を刺したな!?!」

「うるせえ、早く正体を現せよ。その姿のままじゃ斬りにくいだろ

うが魔王。あ、そくだ魔王が子分って言うのも面白いな。子分になれ魔王」

チクチク

「イテ！ やめろ！ 刺すな！ 分かったよ！ 子分になるよ！！……何て言うと思ったか？ 誰が魔王だ！ アホに付き合ってられないぜ、あばよ！」

そう言うとヘンリーは椅子の下から隠し階段を使い逃げた。柳沢し。ごかお前は。

俺はそれを追おうと……と、先客がいるな。魔王の手先か。

「な、何だお前らは！？ 放せよ！ 放せーっ！！」
「うるさいガキだな。おいっ！」
「へいっ！」

ドスッ

「ぐっ……」
「さあ、さつさとスラかるぞ」
「へいっ！！」

「……なあユキ」
「はい、御主人様？」

「魔王が連れ去られたぞ？」

「御主人様？」

まず始めにヘンリー王子は魔王でも魔王に乗っ取られているわけでもありませんが……」

……マジで？

「父さーん！！ 父さーん！！」

父さんにヘンリーが攫われた事を伝えたと父さんは疾風の如き早さで城を後にした。

「……うん。とりあえず俺は買い物でもして暇を潰すか」

スパーンツ！！

「お主も行かんか！！」

「ハクか、読書は良いのかよ？」

俺は叩かれた頭を擦りながら向き直る。

「お主が良からぬ事などを考えておると、伝わってくるのじゃ。さっさとパパスを追えニートが！」

「御主人様、こちらの方はどなたでしょうか？」

「ああ、自分の事を神様だって信じてる少し痛い子だ。

まあベクトルは違うけどユキと同類だな」

「そうなんですか。でも私はこのポジションを譲りませんよ？
これからはライバルですねハク様！」

「お主等は……さつさと行けー!!」

ドカドカツ!!

俺とユキは蹴り飛ばされ城を後にした。

「ふむ、仕方ない行くか。ムツクル、父さんの匂いを追うんだ!」
「がうー!!」

道中、サボテンの魔物やスライムナイト、ドラゴンキッズ等を得意のメラ等で倒して行き、はい、やってきましたよ。怪しい遺跡。

「これはラインハットの古代遺跡ですね」

「がうがう」

「そうか、ここで間違いないか……何か嫌な予感がするのは俺だけか？」

そこは魔物の気配はするし、違う何かも感じさせていた。
とりあえず中を進んで行く俺達。

途中、小部屋があり中に入ると、ヘンリーを攫った男たちがいた。
何か酔っぱらってるし……。

「んん？　どっから入ってきたこのガキ？」

「アニキ、キラーパンサーの子供連れてますよコイツ」

「って事は、お前も魔物か、ホレ、お前も飲め」

「いや、酒はいらないよ」

「そうか、まあ仕事が上手く行ったからな。しかし、俺達魔物以上に酷い皇后だったぜ」

「自分の子供を王様にするために、第一王子を攫ってくれなんて、悪魔みたいな女でしたね」

「人間ってやつあ、いがみ合って何が楽しいのかね？」

まあ奴隷として売り飛ばして2重に儲けてやるぜ、ゲハハハハ」

デールの母親か。確かに酷いな。

まあ実の子供を王様にしたかったってのは分からんでもないが、酷いな。

しかし、ヘンリーは奴隷になっちまうのか……面倒臭えな、助けてやるか。

更に進み、ちょっとした広間に出る。そこには父さんが魔物を相手に戦っていた。

ズバッシュ！

「おお！ ナギか、置いて来てしまったようだ、ちゃんと追いついて来れたんだな。お前の成長ぶりには父さんも驚くばかりだ。では、父さんは後ろを警戒しよう。さあヘンリー王子を助け出し、城に戻るとしよう」

父さんはそう言って後ろに回る。あ、ユキがいる事が変に思われるんじゃない……。そう思って後ろを振り向くと、そこにはユキはいなかった。どこ行っただんだアイツ。まあオマケみたいなものだ。飽きてメイドを辞めたのかもしれない。

更に進むと小船がある。

「お、宝箱。（パカッ）【魔物の餌】か」
「がうーがうー？」

食べるか？ 良し食え食え。

「むっ！ ナギ！ 囲まれているぞー！！」
「匂いに釣られてきたか………トレス・オン投影開始」

俺は、ボロボロになってきた銅の剣をダークアイの目玉に投げ刺し、小型の合体剣を投影した。

「オリジナル必殺技だ。くらえ！ 【セブンソード！】ブローケン・ファンタズム【壊れた幻想】タズム」

俺は合体剣を分離させ、全てを投擲し、ブローケン・ファンタズム壊れた幻想で爆発させた。魔物はほとんどが倒れ、逃げ去って行った。

「おお、いつの間にそこまでの魔力を、しかし、魔力は残っているのかナギ？」

「もうスッカラカン間近だよ父さん」

「そうか、これからは無理をせずに戦うようにするんだぞ？ 最後まで何が起こるか分からないのだからな」

「了解です父さん」

これからは父さんの言うとおりに、先を見て戦って行くぞ。

パラパラパッパッパッ」

「おめでとうアニキ！」

「これでアニキはレベル15になったぜ」

「さあ一緒に祝おう！！」

「いや、俺が祝われる側だろうよ。お、今回は2つか」

魔導書に浮かび上がったのは2つの呪文【マホカント】と【ルカナ
ン】だった。

まあ、今は魔力が少ししか残ってないから今度にしよう。

「ん？ 何だよ？ やけにソワソワして」

「いや、何か変な感じがするんだ」

「今回は少し早めに引き揚げさせて貰うぜ」

「またなアニキ」

ふむ、コレってかなりヤバ目のイベントがあるんじゃないだろうな？

小舟で更に狭い水路を進むと牢屋らしき場所に辿り着いた。

牢屋の中にはヘンリーが一人横になっていた。

あんのニートが……助けに来てやったのに寝てるってどういう神経
してんだよ。

「ヘンリー王子！ むっ鍵が……ぬううううおおりやああッ！！」

父さんすげー……あ、鍵が壁にかけてあった。

「ふん、遅かったな。まあ俺が戻らなくても次の王様にデールで決まっているけどな。」

親父も俺がいなくて清々しているだろうさ」

パシーンッ

「な、ぶったな！？ 王子である俺を！ 親父にも……」

「ヘンリー王子！ あなたのお父様が、国王がどんな気持ちでいられるか……」

最後まで言わせてやれよ父さんのKY。

「叩いてしまった事は帰ってから謝ります。今はこの場から……さあ！」

しかし、そこには魔物が現れ、俺達の小舟に取りつこうとしていた。

「くっ！ ナギー！ コイツ等は父さんが食い止める！！ お前は王子を連れて早く逃げろ！」

えー、別に良いけど、何？ 父さんはこのドブっぽい汚い川を泳いで帰ってくる気か？

「早くっ！ー！」

「わ、分かった。行くぞヘンリー！」

「……」

俺は放心しているヘンリーを無理矢理に引っ張り、小舟へと突き飛

ばした。

船を降り。足早に出口へと向かう俺達。

しかし、あと1フロアで出口というところで、声が聞こえた。

『ふふふふ、どこへ行こうと言うのです？ いけない子供たちです
ね』

「誰だ!？」

「グルルルウゝ!!」

「な、何だ？ 誰が一体……？」

目の前に現れたのは、紫の怪しく光るロープを目深に被った魔導士だ。

ロープの下には仮面を付けている様だった。

「いらっしゃい子供たち。私が素晴らしいところへ連れて行ってあげましょう」

「ガウーッ!!」

ムツクルが飛びかかる。しかし、素早くかわされ、叩き落とされてしまう。

「ガウ……（パタッ）」

「ムツクル!？ てんめゝ！ トレス・オン 投影開始!」

「っ!？ ほう……あなたナギですね？ あの時の赤ん坊が面白い成長をしたものです」

俺を知ってる？ 俺が赤ん坊の頃？

「あ、あああ……」

ヘンリーは後ずさることしか出来無いようだ。

俺は合体剣を分離させ双剣で斬りかかる。しかし、その全てがかわされる。

双剣の一本が弾き飛ばされる、俺はまた投影し、斬りかかる。

「コイツ……強い……っ！！　＜　メラ！！　＞」

「素晴らしい！　流石はマーサ様の息子……いえ、それ以上の素質が……？」

初めてだった。物凄い速さでレベルアップしてるから、誰にも負けないと思ってた。それなのに、目の前の魔導士は俺の攻撃を全てかわして笑ってやがる。今のメラで、魔力も底を尽きた。

畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　畜生！
畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　畜生！
畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　畜生！　畜生！

俺が今まで真面目にやってりゃ勝てたのか？

ゴロゴロしてたのがいけないのか？

母さんの事を知ってる！　俺の攻撃を目の前の笑ってかわしている魔導士は、俺の母さんの事を知ってる。父さんが探し続けている母さんを！！　俺だつて父さんに育てられて生きてきたんだ。母さんが気になる！　前の世界の事なんてどうでもいい！　今のこの世界が好きなんだ！　それなのに、俺はこんなところで……！！　これが終わったら俺は父さんに剣の稽古を付けてもらうはずだったんだ！　他にも教わる事がまだ沢山……！！

「や、やめろー!!」

突然、ヘンリーが弾き飛ばされていた俺の剣を拾ってゲマのロープを切り裂いた。ジャンプ斬りをしたその剣は魔導士の仮面にも触れられなく、仮面にヒビを入れた。

「へ、ヘンリー？」

「こ、怖くはないぞ！ お前みたいな奴でも戦ってるんだからな！」

「ふふふふ、いけませんね。 お遊びが過ぎましたか。 < イオラ！ >」

その爆発は、俺とヘンリーを気絶させるのに十分な爆発だった。

仮面も割れる音が遠くに聞こえた気がするが、敵の顔も見れないまま俺は

Side out

Side ユキ

小部屋にて、勧められたお酒を飲み干すと、

「子供のくせに良い飲みっぷりだ！」と更に勧められ……。

「アハハハハ、ってありえ〜？ もう酔い潰れたんでしか〜？」

あれ？ そう言えば、御主人様はどこへ行ったんでしょっか？

……あれ？ 不味くないですかこの状況？

御主人様が万が一、私を置いて行ってしまうとしたら……！？

「一大事です！！」

つとまっすぐ走れない……酔い過ぎたか！

待って下さい御主人様……！！

何とか出口まで辿り着くと、酔いが覚めるには十分すぎる出来事が起こっていた。

（御主人様！？ ムツクルも、ヘンリー王子も……ぱ、パパス様が！！）

パパス様が気絶している御主人様を人質に取られ、殴られ続けている。

「ぐっ……！！ ゲマ……貴様ア……！！ ぐあっ！！」

「しぶとい野郎だぜ」

「人間のくせに頑丈じゃねえか、オラッ！！」

魔物2体の激しい攻撃に倒れても倒れてもパパス様は立ち上がる。私では時間稼ぎにしかない相手だ。救援も来ないのに時間稼ぎをしても意味のない事。私は自分の無力さを噛みしめながら、チャンスが来ないか隙を窺い続けた。

「ふふふふ、パパス。このナギも大事でしょうね？
さあ死ぬまで踊り続けなさい。」

ちなみにナギは我が光の教団で奴隷として育てますから安心して死んでください」

「ナギ……！ ナギ聞こえているか。

お前の母親のマーサは間違いなく生きている。私はもう駄目かもしれない。

……だからナギ！ お前が母さんを見つけ出し、助けてやってくれ！！」

「泣かせる話ですね……ですが、もう良いでしょう < メラゾーマ！ >」

アレはイケない！！

私はメラゾーマが放たれた瞬間、その影を利用し、パパス様の前へと躍り出た。

< 凍える吹雪！！ > & < 絶対零度の彫像！！ >

吹雪でバリヤーを貼り、パパス様を回収。すぐさま石柱の影に隠れて、パパス様を模した彫像は粉々に砕け散った。

「う……うう……」

「もう少しだけ、我慢してくださいパパス様」

「さて、では行きましょうか。ん？ この宝玉は……まさか。いえ、どちらにせよこうしておくとしましょう」

御主人様の金た……じゅるり。おっといけないいけない。

ゴールドオーブが砕かれてしまった。あれは、何か重要なものだったのだろうか？

「ゲマ様、このキラーパンサーの子供はどうします？」

「放っておきなさい。やがて魔物としての野生の本能を取り戻すでしょう」

そして、ゲマと呼ばれた魔導士、魔物2体は転移魔法で消えて行った。

「お待ちせしましたパパス様！ < ベホイミー！！ >」

「ぐ、ぐう……お嬢さん。すまない。しかしナギが……ゲマ、貴様は私から何度大事なものを奪って行くのだ……ゲマ……ゲマ……！！」

パパス様はその拳を血が滲むほどに地面に落とし続けている。

「……御主人様」

S i d e o u t

05 初めての敗北（後書き）

感想は随時受付中みたいですよ御主人様？

フリ「はいどうも〴〵作者のフリスタです。そして〴〵」

ユキ「今回のゲストのユキです。ナギ様のメイド長をさせていただいております」

フリ「メイド長って、何？ メイドさん増えるの？」

ユキ「ノリでございますフリスタ様」

フリ「左様ですか、さて、ユキさんにお便りが来ています」

ユキ「私めにですか？ 光栄の極みにございます」

フリ「『変態と名高いユキさんは、変態なんですか？』」

東京都のエコガンダーさんからです」

ユキ「ええ、ナギ様のメイドとなってから、まだ日は浅いのですが、以前は攻め派だったんです。ですが、メイドとなっからは受け派になりました。あ、ですが勘違いしないでいただきたいのは他の方からでは嫌でございます。ナギ様に限る。わけでございます」

フリ「ぶたれたりとか？」

ユキ「良いですね！ 頬を叩いて頂き、四つん這いになるかのように倒れたところに、更にお尻にも頂けるともうつ！ たまりませんね！！」

フリ「それは凄まじいMっぷりですね。あ、涎出てますよ〴〵はいこれ使ってください。ん〴〵では、これだけはナギにされるのも無理っ

て言うのはあります?」

ユキ「そうですね……優しくされたら、ただの恋するメイドになっ
てしまいますから、やっぱり攻めていただければ嬉しいですね」

フリ「って言うか、攻められる事も無いんじゃないですか?」

ユキ「……(ニコ)」

フリ「す、すみません! 攻められる日を祈っております!」

ユキ「はい、期待してます!」

フリ「では、次回のタイトルコールをお願いできますか?」

ユキ「構いませんが、フリスタ様の次回タイトルは、
そのまま使われる事が無いのでは……?」

フリ「と、とりあえずお願いします。善処しますので」

ユキ「かしこまりました。では次回DQN! 第6話【雲の上の生
活と地上の暮らし】

御主人様のお帰りをお待ちしております」

フリ「では、次回も」

ユキ「あなたのハートにライデイン?」

06 10年後（前書き）

ナギとヘンリーは奴隷生活
ユキとパパスは搜索生活

そして、10年が過ぎて行く。

ドラクエ・ナギ始まり始まり～。

06 10年後

Side ユキ

パパス様とラインハットに戻り、国王様に謁見しました。

ヘンリー王子が拉致され攫われた事。パパス様の息子のナギ様、つまり私の御主人様も攫われた事。パパス様はそのほとんどを話しました。

「むう……パパスよ。ヘンリーとそなたの息子はどこに連れ去られたか分かるか？」

「はっ、【光の教団】と言っておりました」

光の教団。世界地図で言うと、ど真ん中にある険しい山を総本山にしようとする新しい宗教団体だ。その険しい山の頂上は見えず、雲よりも遥か高くに存在している。代表者は「イブール」という者で、悪い噂を聞いた事がない。そんな団体が人攫いをするのか？ 答えは出ないが、『しないだろう』という線が強い。

しかし、悪い噂を聞かないだけで、イブールという人物を見たと言う事も、聞いた事もないという、掴みどころのない団体ではあった。ただ『信じる者は救われる』という教えだけが信者を集めていた。

「ふむ、攪乱するために嘘を言っている可能性はあるのう……」

「その可能性もございます」

「わ、妾は……」

「どうしたのだ？」

皇后さまの顔色は悪い。恐らく、ヘンリー王子がまさか攫われる以

上の事をされるとは思っても見なかったのだろう。パパス様が話さなかったのはこの点だ。

「では、国王様。私は個人で動くことにいたします」

「何か掴めれば教えてくれ。我が国も総力を挙げて探すことにしよう」

「ムツクル。御主人様がなくなってアナタも寂しいわよね？」

「キョフーン……」

「【御主人様】……？ お嬢さんはナギの……」

「メイドの【ユキ】でございますパパス様」

「メイド……いつの間に。しかし、攫われた王子とナギはどこへ連れて行かれたのだろうか……？」

「情報収集が必要でございますね」

「手伝ってくれるかユキ？」

「もちろんでございます。御主人様のいないメイドなど、鞭むちを持っていない女王様。はたまた、アイマスキに猿轡さるくつわのないM奴隷の様なものです。必ずお二人を見つけ出し、取り戻してみせます」

「例えば良く分かんが、頼もしい。遺跡内でも助けられたし、頼りにさせてもらおう」

ああ、御主人様のお父上に認めてもらえるなんて！！

この日から、私達は御主人様の搜索、情報収集を始めたのです。

S i d e o u t

S i d e ナギ

あれからどれ位経ったのだろうか？

確か父さんはあの時、「母さんを探せ」と言っていた。

それなのに俺ときたらヘンリーと一緒に奴隷生活だ。

過酷な奴隷の日々。鞭で打たれ、重い岩を運ばされ、いつの間にか死んで行く者も、いつの間にか作業の人数が増えている事もある。

ああ、二トだった頃が恋しい。

俺は何で奴隷なんてやっているのか疑問に思い続けて、遂に聞くことにした。

すると帰ってきた答えはこうだった。

『光の教団の総本山を作るんだとよ、まあ宗教団体の総本部だな』

宗教団体【光の教団】。俺はそれを聞いた時何かが目覚めた。

岩を運んでいる場合じゃない！！

たった今から俺の仕事は石像作りだ。運ばれて来た岩を削りまくり、石像を作るのだ。今はとにかく教団側に属する体で働くんだ。気に入られて、それなりの地位を手に入れるんだ！

「これは……うむ、素晴らしい石像だ。イブール様もお喜びになるだろう」

「それは、私めが作った物にございます」

「そうか、名前は？」

「ナギと言います」

「ナギか、良しお前は今日から石像作りを命ずる」

「ありがたき幸せ！！」

そして、数年経ったある日の事。

「みんな静まれー！！ 作業をいったん止めて仮説ステージに注目しろー！！」

鞭打ちの男のガラガラな耳触りの声に対して、奴隷たちは騒ごうとする力も無い。ただ鞭で打たれるのはゴメンだと素直に従い集まってくる奴隷たち。しかし、壇上にかかる人の姿を見て、奴隷たちは安堵し、また羨望のまなざしを送る。

ナ・ギ！ ナ・ギ！ ナ・ギ！ ナ・ギ！ ナ・ギ！

『おはよう諸君！　よく眠れたかな？　今日の仕事を振り分けるぞ。A班、すまないが地下にもぐって資材を運んでくれ。まだまだあまりあるぞ。B班はこの広場を頼む、ここが入り口にもなるからな。C班は教祖様の像を作るんだ！！良いか！　勘違いするな、俺達は奴隷じゃない！！　職人だ！！　その血を燃やし、技術を磨き、最高の仕事をするんだ！！』

おおおおおーっ！！

ナ・ギ！　ナ・ギ！　ナ・ギ！　ナ・ギ！

『最高ですかー！！』

「「「「最高でーすっ！！」」」」

ふはははは！！　このまま俺が教祖となりこの世界を掌握してやるわ！！

がははははははっ！！

『……ろっ！　おい、起きろよナギ！』

ヘンリーが俺の足元で騒いでいる。ええゝい！　サインなら後でやるから少し黙れ！　教祖となった暁には、司祭クラスの席をくれてやる！

「なに寝ぼけてるんだよ！　起きろってばー！！」

ガバツ！

「え？ アレ？ ステージは！？ 俺の奴隷たちは！？」

「ず、随分うなされてたと思ったら、変な夢を見てただけかよ」

「む？ まだその様な奴隷の格好をしていたのか、見苦しいぞ司祭よ」

「話を聞け！ 全く、お前はいつまで経っても反抗的で、奴隷になりきれない奴だよなあ。その点、俺なんかは素直になったと自分でも思うよ。ははははは。……もっとも俺が素直になったのはお前の親父さんにあの日ぶたれた事がこたえたのもあるけどな。あれから10年かあ、月日が経つのは早いもんだなナギ」

「……え！？ もうそんなに経ってるの！？」

「……お前は無駄に凄い石像を作ったりして充実してたからな。時が過ぎるのも忘れてたんだろう」

石像作りは夢じゃなかったらしい。そうか、そんなに経ってるのか。あの後、俺達はここに連れて来られたけど、父さんは俺を探してくれているのだろうか？ 鍵の付いた牢屋も筆り取る父さんの事だ。この山も素手で登ってくれるかもしれない……落ちたら死ぬな。

俺はあの頃のように情報収集を始めた。

「光の教団を信じる者は天の国へ行けるそうですよ」

「んなわけねーだろ！ そんな事を信じてるお前は幸せな奴だよ！

」

俺が教祖になれば、その夢も叶えてやれるんだけどな。
……む、ツツコミ役がないと寂しい。

「聞いておくれよ、このマリアちゃんはね。この間まで信者の一人だったんだ。でも教祖様の大事な壺を割ってしまつて……」
「私がいけないんです……」

アレはいいモノだ。じゃなくて、それだけのことで信者を奴隷にするとは……それにマリアちゃんは凄く可愛いぞ？ イブールって教祖は見る目が無いのか、ブス専なのかもしれない。

ビシッ！！

「おらあー！！　いつまで寝てやがる！！　さつさと働かねーか！！」

鞭男が叫び奴隷を威嚇する。

さて、今日も石像作りに励みますか。

「出来た！　ムツクル23号！　うん、良い出来だあ」
「相変わらずナギのアニキの石像は凄い出来ですね。今にも動き出しそうな躍動感に、毛一本一本にまでこだわった繊細さがある」

そう褒めるな照れる。

「むう……何と言う事じゃ……」

「お、おい大丈夫か？」

「大丈夫じゃなくても、誰にも止められないだろう……」

「ああ、俺達がやられちまうよ……」

ん？ 何だ？

聞こえてきたのは奴隷の中では長老と呼ばれている老人を中心としたメンバーからだった。

「何かあつたんですか？」

「おお、ナギ君か」

「この前入ってきた奴隷のマリアちゃんが鞭で打たれてるんだ」

「何でも運んでいた石を監視員の足に落としたとかで」

「可哀そうだがどうする事も……」

気が付いたら駆けだしていた。俺の足は騒ぎのある作業場へと向かったいた。

「酷い……」

「何もあそこまでしなくても……」

「兵士はどこにいるんだ？ 止めもしてくれないのか……？」

俺はそんな声も耳に入れず、突撃して行つた。

そこには倒れているマリアに鞭を打つ二人の監視員がいた。

トレス・オン
「投影開始!!」

「あ、おい、ナギ俺も……!!」

ヘンリーの声が聞こえた気がするがそれどころじゃないからな。

久しぶりに投影した合体剣は今の俺のサイズにピッタリのサイズになっていた。つまり、子供・verではなく、本来の合体剣になっていたのである。俺も成長したもんだ。まあ、鏡が無いから確認も取れないんだが……。

鞭を切刻み、鞭男を蹴り飛ばす。

「ぐあっ!!」

「……な、ナギさん?」

「もう大丈夫だマリア。 < ホイミ >」

「何の騒ぎだ!!」

やってきたのは兵士が3人。遅いよ。

「はっ! コイツが突然襲い掛かってきまして……」

「この娘は(……マリア) 大事な労働力だ。手当をしてやれ。それと、この男は牢屋にぶち込んでおけ!」
「はっ!!」

牢屋? 一人で? 寂しいな……あ!

「兵士長殿! アイツです! アイツの指示でやりました!! やりましたよボス!! 指示通りです!!」

「何！？ ではあの男も牢屋にぶち込んでおけ！！」

「な、ナギ！ てめーっ！！」

ヘンリーを道連れにしてやった。ケケケ、傍観者を決め込んでるからだ。

「うおーっ！！ 出せーっ！！」

「うるせーな、少し黙れよヘンリー」

「お前が黙れ！！ 明らかに俺はここにいるべき人間じゃないだろ
う！」

「うん、今のお前は王子でもない人間以下の奴隷だ安心しろ」

「……相変わらず人の話を聞かない奴だな。くそーっ！ 出せーっ
！！」

ガチャッ

「あ、開いた？」

「開いたな。行ってみようぜ」

牢屋のカギが開いた。出てみるとそこには兵士長とマリアがいた。

「よう、綺麗な顔や体に傷は残ってないか？」

「は、はい。ナギさんのおかげで大丈夫です／＼」

「そいつぁ良かった」

「ヘンリーさんは自分の手は汚さずに人を使う人だったんですね……」

「……ナギーツー！」

「うるせーな。王子なんだから間違ってはいないだろう？」

「話を進めさせてもらって良いかな？ 私はマリアの兄のヨシュアだ。マリアを助けてくれてありがとうナギ君。それと……自分の手を汚さずだが、指示を出してくれたヘンリー君」

「兵士長さん。アンタまで俺を……」

「兄妹だったんだな。」

で？ 俺達は牢屋から出されてどこに連れて行かれるんだ？」

「このままこの場所においてはマリアは殺されてしまう。そこで君にお願いしたいんだ。マリアを連れて逃げてくれ、君は他の奴隷とは違う、何と言うか『活きた眼』をしているから信頼が置ける。そのドブが濁った様な汚い目を持つ者もいるが」

「……泣くぞ、おい」

ヘンリーの株価指数は底を打ったようだ。

可哀そうに、ヘンリーに一体何があったと言うんだ。

「これは本来、死体を入れる樽なのだが、これに入って水路を使って逃げてくれ」

「ヨシュアさんは大丈夫なのか？」

「俺の事はどうなっても構わない。妹のマリアさえ無事なら……」
「……兄さん」

「最後にもう一つだけ、俺の願いを聞いてくれナギ君。『お義兄^{にい}さん』と呼んでくれ」

「に、兄さんったら／＼」

「俺は先に樽に入ってるぞ……くそっ」

「頑張ってくれよ義兄さん。マリアは預かっておく。いつか、無事に引き取りに来てくれ」

「ありがとうナギ君！ では行ってくれ！」

樽の中では身動きはほとんど取れない。取れないのだが。高い所から落ちる感覚。つまり『たまひゆん』が起こる。

「ひゃっほー！！ ひゅんひゅん来るー！！」

「落ちてますよね！？ コレ落ちてますよね！？」

「……いいんだ。俺なんて……いいんだ」

ドッパ〜ンッ！！

無事着水し、俺達の海放浪の旅が始まるうとしていた。……と思った矢先に、樽は外部から開かれたのだった。

「うおっまぶしっ！」

Side out

Side ヌキ

あれから10年が過ぎた頃の事。

依然、目撃情報もなく、手がかりも【光の教団】以外になく、手詰まりの状況だった。船で行こうとするも、船乗りたちは口を揃えて言う、「あの付近はクラーケンが出るんだ」と。総本山を建設中のことだが、そこまで行くには、強力な魔物が沢山いて、船は出せないのだという。

パパス様は軍事大国のトップであろうグランバニアの王様だったらしく、自国に戻り調査を始めた。って事は御主人様も王子様だったのですね。

私は立派なキラーパンサーに育ったムツクルの背中に乗りながら調査を続け、やはりあの雲すらも突き抜ける山。あそこが怪しいと私は睨んでいた。

そして、遂に私はマヒヤドで海を凍らせながら進むことにしたのである。山が目の前にまで来た頃。空から樽が降ってきて、どんぶらこつこどんぶらここと、海を漂い始めた。

「ガウガウ！」

「御主人様の匂いがするの？」

「ガウ！」

私は樽の周りを凍らせ、それ以上流れないようにして、数年前に手

に入れた伝説の武器、日本刀の【雪風】に手をかけて歩み寄った。

「……腐臭がしますね。ですが、間違いなく微かに御主人様の香りがしますね。では失礼して……【秘伝マシン01!】」

スパッ

と、切れたのは樽の蓋の部分のみ、これぞメイド奥義、【居合切り】でございます。

「うおっまぶしっ!」

「落ちたと思っただけでしたね……? もう落ちないですよね?」

「俺はどうせ汚い人間さ……」

「御主人様!!」

「ん? ……あ、ユキか!? 綺麗になったな。ムックルもでかくなったな?」

「がうがう!! ゴロゴロゴロ?」

「よくぞご無事で! 一先ず近くの町へ……オラクルベリーが近いですね。行きますよ? < ルーラ! >」

「うおっ!」

「ま、また飛ぶんですか!」

「ああ、もうどこまでも飛ばしてくれ……」

「いっその事、誰も俺を知らない世界へ飛ばしてくれ」

ヘンリー様も随分とお変わりになったようですね。

さて、パパス様に御主人様が無事だったことを手紙で伝えますかね。

ラインハットは……折を見て伺うとしましょうか。

10年という時は、見るもの全てを成長させていた。

ナギと同じぐらいの身長だったユキは、

また同じぐらいの身長に成長していた。女性になっていたのだ。

ムツクルもナギより小さかったのが、

ナギを乗せて走れるぐらいに大きくなっていた。

ナギは奴隷生活が終わった事よりも、

久しぶりに出会えた喜びや懐かしさを噛みしめるように、

オラクルベリーの宿屋で疲れを洗い流して行った。

そして、オラクルベリーは夜の街へとその姿を変えて行った。

06 10年後（後書き）

感想は随時受付中です。もう、飛びませんよ？

フリ 「どもども、フリスタです」

マリア 「マリアです。あ、ゲストです！ ……あれ？ ああ！ す、すみません！ ゲストのマリアです！」

フリ 「……天然ですか？」

マリア 「あ、どうでしょう天然水ですかね？ ……え？ この水じやなくて？」

フリ 「はい、この子は天然みたいです」

マリア 「天才みたいな感じですか？」

フリ 「……まあそう言う人もいますかねえ」

マリア 「やったあ」

フリ 「……さて、マリアさんにお便りが来てますよ」

マリア 「ゴクゴク……ふう、おかわりください」

フリ 「『マリアさんはヘンリーのお嫁さんじゃないんですか？』

ペンネーム：ワーキングプアさん」

マリア 「あ、ありがとうございます。ゴクゴク……ふう」

フリ 「聞け！」

マリア 「ふあっ！ ふあい！！ な、何ですか！？ あ、ああ手紙ですか……えっと、お嫁さん？ 人でなしの？ あはははは、無

いですよ。私の理想は王子様なんですから」

フリ「アイツも王子だよ？」

マリア「……い、今時、王子様って夢見過ぎですよ。現実見ようかな」

フリ「ちなみに一応ナギも王子様ですが……？」

マリア「……ううう、もうっ！！ ナギさんが良いに決まってるじゃないですか！！」

フリ「逆切れかよ！」

マリア「もう怒りました！！ 次回！！ DQN！ 第7話【オラクルベリーの夜は長い】絶対この夜で決めてやるんだから！！」

フリ「無理矢理終わらせやがった……で、では次回も……」

マリア「あなたのハートにライデイン？」

07 オラクルベリーの夜は長い（前書き）

今回はね……凄いの？ ビックリしちゃうから。
知らない人いたらごめんね。

とにかく別の意味で凄いのが仲間になるから。

更に【ライデイン】の公式ポーズ（なんぞそれ？）も決定！？
詳しくはあとがきでどうぞ！ 詳

ではでは本編スタート！

07 オラクルベリーの夜は長い

朝と夜でその表情を変える街「オラクルベリー」

朝だからこそやっている店、夜だからやっている店があり、また会える人も違ってくる。

そんなオラクルベリーの名物は3つあると言って良いだろう。

一つはカジノだ。貴族から貧民までお金をコインに換えての賭博をする場。貴族は稀に貧民に落ちる事もある。貧民はその身分を変えない者もいるし、夢を掴み取る者もいる。

もう一つは、モンスター爺さんで有名な魔物の預り所だ。魔物をペットとして飼う貴族も珍しいのだが、お金次第で爺さんが調教して攻撃しない様にしてくれる。預かられているほとんどの魔物はカジノの闘技場用の魔物だ。一般市民からは少し距離を置かれている地下にある店である。

最後にオラクル屋だ。主人は明るい内に商品を集めに出かけ、夜しか開店しない一風変わった店だ。だからこそ珍しいものの以外は取り扱わない。そんじょそこらにある様なものでは客は寄って来ないと言うのが、店の主人の考え方らしい。

そんな街に夕方頃に来たのはメイド服の綺麗な女性。長い黒髪はポニーテールにされている。しかし、目が行くのはその綺麗な顔でも黒髪でもない。腰にある日本刀と呼ばれる噂にしか聞いた事のない武器だった。メイド服に刀と言ったミスマッチな姿に、見た者は息

を呑んで見ていた。

しかし、それだけではない。その後ろにも注目してしまうだろう。後に続くのは奴隷の服を着た女一人と男二人だ。キラーパンサーがチラツと見えたが、外でお座りをしている。良く躑けられているようだ。街の入り口にいる門番が横に立つも、姿勢は崩さない。ビクっている門番より門番らしい。

そして、メイドが先頭を切って、真っ直ぐに宿屋に入っていった。

S i d e ナギ

「いやゝ良い湯だったゝ」

「お風呂最高だな!」

「まあそれでもヘンリーさんの目は薄汚れたままでしょうけどね」

マリアが一言余計に突っ込む。

可哀そうなヘンリー。王子のまま平和に暮していればよかったものを……。

「ユキ、助かったよ」

「いえ、御無事で何よりです」

俺はというと、やっとFF7AC仕様の服が着れてホッとしていた。奴隷のまま奴隷の服でエンディングかと思っただけ。ヘンリーとマリアには旅人の服を用意してくれていたようで、二人とも満足している様だった。

「こりゃあ、動きやすくて良いや」

「私にまでありがとうございます」

「いえいえ。さて、御主人様。パパス様ですが、この場にはおりません。グランバニア王国にいらっしゃいます」

「グランバニア？ どこそれ？」

「グランバニアを知らないのか？ ラインハットよりも軍事力は上、というか世界最強の王国じゃないか？」

そんな場所に父さんはいるのか。軍人にもなるのかな。

「すでに、御主人様の無事は文にて報告済みですので、御安心ください。ですが、パパス様はお身体が良くないのです。もう旅は出来ないでしょう」

「え！？ 父さんが？」

剣の稽古つけてもらう約束だったのに……。

「パパス様から手紙を預かっております——」。

『この手紙を読んでいると言う事は、

ナギよ、お前は無事だと言う事だと思う。本当に良かった。

ユキから聞いていると思うが、私の体はそう長くないだろう。

剣の稽古をつけてやると約束したのだが、果たせそうにない。

もし、どうしてもというなら。強くなれナギ。

強くなってグランバニアまで来るのだ。

その時は、この身体に鞭を打つてでも約束を果たそう。

まずはサンタローズに行くと良い。

パパス』

——以上です」

「ナギさんのお父様が……」

「あんなに強かった親父さんが……あの時のビンタが今でも響いてくるようだが、あんなに熱く痛いビンタをくれた人だったのにな……」

……」

「とりあえず、私のルーラなどの移動呪文は使用してはいけません。自力でグランバニアまで向かって来いと事です」

「……そうか」

「とりあえず、今日は楽しんでください。ご案内いたします」

そう言われ、俺達はオラクルベリーの街を歩き回った。

まるで、奴隷だった事が悪い夢だったかのよう。いや、もしかすると今が夢なのかもしれないと疑心暗鬼になりながら歩いた。

「ここはモンスター爺さんの預り所です」

「モンスター爺さん？」

「左様、ワシがモンスター爺さんじゃ。む？ ほほう……お主なかなか良い目をしておるのう？ お主なら魔物を仲間に来るかもしれぬな……」

「ナギが魔物を仲間？ そんな事……あ、でもムツクルって言うのはキラーパーンサーだったか……」

「それは素晴らしい事です。もしそうなれば魔物との共存も出来るかも知れません」

「ジジイ、お客さん？」

奥から現れたのはバニー姿の口の悪い感じのナイスバディさんだった。

茶髪のショートヘアが似合っている。

「この子はイナッツという名で、ワシの助手じゃ」

「よろしく」

「よろしくお願いします。イナッツさんはスリーサイズいくつですか？」

わおっ。マリアさんが暴走しだしたぞ？

「は……」

「（８０センチ台！？）」

「測った事が無いわ」

「じゃあ測らせて下さい！」

暴走は止まらない。何故に測りたがる？

「別に良いわよ」

「ういよっしやー!!」

マリアがガッツポーズを取ってる。自分と比べているようだ……？
イナッツさんは恥ずかしげも無く測られている。

「ではとりあえず馬車を手に入れるのじゃ。
そして、憎しみの心で戦うのではなく……」

爺さんの話を聞いて俺達は地下から出た。

「ううう……あんなに大きいなんて、勝てない。牛乳嫌いだし……
どうしたら？ やっぱ大きい方が好きだもんね？ はあ……」

何かに打ちひしがれているマリアだった。

「ナギ、慰めてやれ」

「（何故俺が？）とりあえずオラクル屋で馬車が売っているらしいから行くぞ」

「ふふふ、オラクル屋はこちらでございます」

「いらつしゃい、世にも珍しいモノを扱う店、オラクル屋によっこそ。本日の目玉はコレだ。【ラインハットの兵士服】こちらを200Gでどうだ！」

「馬車があるって聞いたんですけど？」

「つか兵士服を売ってるなんてラインハットに知れたら、ヤバいんじゃない？」

「死刑だな」

「どこで手に入れたんですか？」

「ラインハットの兵士からさ、もうあの国ではやってられないって言うてな。俺っちが買い取ったのさ。今なら槍と盾も付けるぞ？」

「どうだ？ あ、馬車が欲しかったのか？ なら馬車とセットで500ゴールドで良いぞ！」

「安いな。馬車が3000ゴールドかよ」

「街の裏に用意してあるから、買ってくれるなら鍵の番号を教える

ぜ」

「よし買った」

「毎度あり」

「兵士服はいらないから300ゴールドに負けてくれ」

「それは呪われていて返品が出来ない」

「この野郎……その髭全部引っこ抜くぞコラ」

「嘘だ。呪われてないから安心しろ。」

まあ必要になるかも知れないだろう？　なあアンタもそう思うだろう？？」

意味深に店の親父はヘンリーに笑みを送る。王子だと気づいているようだ。

「分かった貰っておこう」

「毎度あり」

毎度じゃねーよ、初めてだよ。

「いや、儲けた儲けた！　見て下さい！　一夜にして50ゴールドが宝の山に……　コレだからカジノは止められない……」

カジノ前でオッサンがホクホクとにこやかにしている。襲われても知らんぞ？

「カジノか……」

「カジノには色々ありますよ、ポーカーに魔物の闘技場、スライムナイトレースにスロットマシン、踊り子によるダンスホールもありましたね」

やけに詳しいな……遊び歩いたなコイツ。

カジノのネオンが俺達を照らす。俺達は顔を見合わせて頷き合い、巨大な建物へと入って行った。

「全額スツた」

早えよっ！！　ヘンリーは速攻で旅人の服を脱ぐ羽目になっていた。お前やつぱり王子やってた方が良かったって。

「最低ですね。ナギさん見て下さい。スロットで少し増えました！」

マリアは少しずつ増やしているようだ。

俺はブラブラとして、何もまだやってない。

「御主人様は何をなさいますか？」

「ん。スライムナイトレースかな」

俺は入り口から右奥の方にあるレース場へと足を運んだ。

「さあさあ、今日のメインレースの開始まで残りわずか！　今日のアイツは良い調子！　賭けた賭けたあー！！　おう、そのイケメンさん。賭けるかい？　メインレースだぜ！」

「ああ、賭けるとしよう……倍率は」

そこに俺は凄い名前を見つけた。人気は最下位だ。

そして、過去のレース記録を見ると何も無い空欄だ。

「ああ、ソイツかい？ ソイツは今日がデビュー戦だ。見た目はもう珍獣だぜ？ パドック見ただけで誰も買いやしねえ。悪い事は言わねえ止めておきな」

「コイツにしよう。このコイン全部賭けさせてくれ」

「人の話聞かない兄ちゃんだな。まあ痛い目を見て勉強するのも博打だな」

パ〜パパパ〜パパパ〜
パパパパ〜パパパ〜

『さあ今日のメインレース。梅花賞スライムナイトレースが始まります。1枠1番、前回のデビューレースでは惜しくも2着、今日は1着を取れるか？ 東の鉄腕【ムサシノテイオー】……』

ワアーワアーッ！！

歓声が鳴り響く。

「どのスライムナイトも凄い人気だな」

「今紹介されている1〜4番のスライムナイトはデビュー戦は済んでいて、どのスライムも良い足を持ってますからね。激戦です。ですが……御主人様を買った5番のスライムはデビュー戦で、しかも……」

ドッ！！！！

『おっと！　ここで会場大爆笑！！　5番のスライムナイト【ミドリマキバオー】だ。その白い色は正に今世紀最大の珍事件、白い珍獣です！　オッズは89、2倍と、人気は最下位。レースではどのような走りを見せるのか！？』

「白いスライムなんて聞いた事ありません。
本当にアレに全額つぎ込んだんですか？」

「おう」

『今、各スライムゲートに着きました……（ガッコンツッ）スタートした！　一番人気のバクチキングが良いスタートだ！　逃げる逃げる！　コレは速いぞ！！』

「……マキバオーは最後尾ですよ？」

「だ、駄目だったか？　名前で選んだんだけど。やっぱり名前だけか……」

『さあ残り100メートル、トップは変わらずバクチキング！！　おおっと！！　凄いスピードで追い上げてくるスライムがいる！！　白い珍獣だ！！　マキバオーだ！　ミドリマキバオーが追いついてくる。並ぶか！？　並んだ！　抜けるか！？　抜いた！！　更に差もつけて今1着でゴールイン！！　勝ったのはミドリマキバオー！！　堂々のデビュー戦初勝利！！』

「や、やりましたね御主人様！！」

「お、おう！！　やったぜ！！」

俺の賭けた500枚のコインは89・2倍で、44600枚になった。

マジでスゲえな!!

「あゝナギさんも勝ったんですね」

「ああ、マリアか。ん？ マリアは負けたのか？ 手ぶらだけど」

「いえ、持ち切れないので預けました。いやゝ1コインスロットから渡り歩いて、100コインスロットに挑戦したら出ちゃいましてゝえへへへゝ」

マリアはマリアで100万コインほど稼いだようだ。すげえよ天然娘。

俺達は景品と交換しまくった。

「こ、これが噂のグリーンガムの鞭ですか……何とシツクリくるグリップに調度いい重さ！ 私、これで叩きます!!」

何をだ。

マリアは鞭をカジノで振り回さんとする勢いでいる。

俺は特に欲しいのが無かったので、とりあえず、メタルキングの剣を数本と、エルフの飲み薬という物を大量に手に入れていた。魔力が回復するんだってさ。十年前のあの時に、魔力切れの危険性は味わったからな。もうあんな思いはごめんだ。

「あれ？ そう言えばヘンリーは？」

「ああ、何か事務所に連れていかれましたよ？」

俺達はヘンリーを迎えに行つてその夜を終えた。

ヘンリー、お前は早く国に帰してやらないといけないな。

S i d e o u t

S i d e ヘンリー

オラクル屋で言われた言葉が気になって眠れないでいた。

『ラインハットの兵士からさ、もうあの国ではやってられないって言うてな。俺っちが買い取ったのさ』

ただやる気がなかったただけなのか？ いや、それなら元から兵士になんてならないだろう。ラインハットは俺が知る限りそんな兵士がいる国ではなかったハズだ。胸騒ぎがする。ラインハットでは何が起こっているんだろうか？

ヒュンツ！ ビシンツッ！

鞭の音が頭に響いてくる。俺は、奴隷生活もトラウマになっちまってるらしい。

ヒュンツ！ ビシンツッ！！

「グハッ！」

違った。マリアが寝ぼけて鞭を振り回していたのか……。俺はその流れ鞭に当たって気絶した。（ガクッ）

S i d e o u t

S i d e ナギ

ヘンリーが寝ていながら気絶していた。

何？ コイツどうしたの？ マリア知ってる？

あ、そう知らないか……寝相が悪いと意識も飛ぶとか？

「まあいい。馬車も手に入っし、行き先もグランバニアで決まった。とりあえず強くなるために旅をしながら向かうぞー！！」

「どこまでもお供します。御主人様」

俺達の冒険はまだ始まったばかりだ！！

完！！

「……がうがうー！！」

「あ、駄目？ そっか……じゃあ続けるとしよう」

もう少しで自然にスタッフロール的な感じになるとこだったんだけど。

というわけで、俺達はサンタローズを目指す。
道中、ユキにルーラの魔法を教わるなどして進んでいると……。

「んあゝ!!」

「あ、カジノにいたマキバオー!?」

そう、白い珍獣マキバオーだった。

何か、スライムナイトの集団に追われてるぞ。

「御主人様どうしますか?」

「魔物も仲間に来るらしいし。試してみるか」

俺達はマキバオーの間に入り、スライムナイトの集団を押し戻すように。ガンガン行こうぜ! って感じで倒した。マリアの鞭が唸る! ヘンリーの覚えたてのイオが炸裂する! ユキの日本刀が一閃する! ムツクルの噛み付きが深く敵に突き刺さる! 俺の寝息がこだまする!

「起きろ!!」「起きて下さい!」

「ガウガウ!」「もうすぐ終わりますからね?」

パラララパッパッパ♪

「あ、久しぶりの音が」

「こんなに大きくなって……」

「苦労しただろう? でももう大丈夫だ! アニキは強くなってるさ!」

「アニキのレベルは17になったぜ！」

「お前らは変わらないんだな。歳とか老いとかは無いのか？」

「あるっちゃあるぜ？ でも俺達は戦闘しない平和主義なスライムだからな」

「いきなり襲われて、殺されない限りは無事なんだぜ！」

「まあT-1000みたいに飛び散っても、復活するんだけどな！」

俺がガキの頃にいきなり襲ってきたのはお前らだろうが。つーかT-1000って古いな！ さて、今回覚えたのは、【バギマ】と【バギクロス】か、強い竜巻と、より強いタイフーンだな。強い方を試すか。

< バギクロス！ >

ゴウツ！！

強い風が巻き起こる。しかし、この場ではない。遠くに竜巻が発生したのだ。サンタローズの南の方に……あれ？ 俺のガキの頃の記憶が正しければアッチって港が無かったっけ？ まあいいか。

「んあゝ！ んあゝ！！！」

「お？ おおやっぱりマキバオーだったか！ カワイイなゝ！」

「危ない所を助けてもらって感謝する。私はこのマキバオーの騎手で騎士のピエールと言う者だ。実は魔物が人間と仲良くしているのが仲間の反感を買い、追われていたのだ。アレほどの敵を一度に相手するのは骨だからな難儀していたところだったのだ」

「なるほど、じゃあ一緒に来るか？」

「ほう、それは豪胆な、ありがたく誘いを受けさせて貰おう。
……っと、この姿では失礼だったか」

そう言つて、ピエールはその兜を脱いだ。
緑色のセミロングの髪に、良く見ると華奢な身体。これは間違いなく……。

「お、女の子!？」

「む？ そうだが？ 他のスライムナイトは騎士も魔物だが、私は人間だ。なので、スライムナイトの仲間というのも違う気がするな……。私はこの子の……マキバオーの母親を探す旅をしていたのだが、マキバオーの母親はどうやら魔界にいるらしく、途方に暮れ、とりあえず誰にも負けない様に修行をしていたのだ」

「そつか。まあ良く分らんけどよろしく頼む。俺の名前はナギだ」
「ナギか……うん。良い名前だ」

「そ、そつか？ あ、ありがとう」
「これまた素直クールなキャラが来ましたね」
私は御主人様のメイドのユキでございます」

「（胸は勝ってる……良しっ！） マリアです」

「がうがう」
「んあんあ」

スライムナイトもどきのピエールが仲間になった。
男らしい口調に騙されたぜ。クール系だな。
さて、サンタローズに行きますか。

S i d e o u t

その頃、サントローズ南に位置する港では……。

「親分！ 危ないから下がってください！！」

「うるせー！！ 俺の船が！ 俺の全てが詰まってる船が竜巻なんかに！！」

ベキベキベキッ！！

「ああ！ メインマストが！！ 俺達の……親分の船が！！」

「駄目だあゝ！！ 塞がらねえよ！！ 水が入ってきちまう！！」

「ああ、今まで強奪してきた宝までもが……」

その時たまたま停泊していた海賊船が沖まで流され沈んで行った。

その後、海賊達は「悪い事はするもんじゃないな」と、近くの街のアルカパで仕事探しを始めることとなった。

07 オラクルベリーの夜は長い（後書き）

感想とレビューは随時受付中のような。　んあ！

フリ「毎度毎度〱作者のフリスタです。今回のゲストは〱素直クルな〱」

ピエ「ピエールだ」　「んあ〱！」

フリ「いや〱斬新なスライムですよねマキバオー。鼻がついてるし、その鼻の穴は大きいし、何より白いしで……本当にスライムですか？」

ピエ「スライムだ。突然変異の白い奇跡だ。なあ？」　「んあ！」

フリ「カワイイな〱。あ、早速質問のお便り来てます」

ピエ「今回初登場でか？　ありがたい」

フリ「『マキバオー』との出会いはどんな感じだったんですか？」　P・N・ネズミ親分さん」

ピエ「あれはまだ雪の残る寒い時期だった。その時はまだ名も無いマキバオーが追われていたんだ。同じ魔物である山賊ウルフからだった。私はその頃ただの武者修行中の身で、魔物同士でも争いがあるのかと思いつながら、関わらないようにやり過ごそうとしていたのだが、マキバオーが私の後ろに隠れた。必然的に私は山賊ウルフ達の相手をして勝った。しかし、魔物が人間に懐くとは思っても見なかった。そして、マキバオーの顔を見たら、何だか色々伝わってきたな……身体も割と大きいスライムで、私ぐらいなら乗せられるって眼だったんだ」

フリ「良い話だな……。ところで、主人公のナギの事はどう思いますか？」

ピエ「初レースだったにも関わらず、一目見ただけでマキバオーの勝ちだと見分ける素晴らしい観察眼。魔物とも仲良くできる包容力。ユキや、マリアにも慕われるのが分かる人物だな」

フリ「（マキバオーの件は違うだろうけど……）ではピエールさんもナギの事を……？」

ピエ「……私では相手してもらえないだろう。不器用だからな。私は好きだがね」

フリ「『負けないくらい大好き』と……一目惚れだなこりゃ」
ピエ「……何を書いている？」

フリ「はい。じゃあコレ読んでください。時間押してますよ」
ピエ「む？ 分かった。次回【DQN！】第8話【父が託すモノ】……これも言うのか？」

フリ「（コクリッ）では次回も〜！」
ピエ「あなたのハートにライデイン？」

ちゃんと指示通りのポーズまでつけて、このピエール、ノリノリである。

ん？ 公式ポーズかい？

左手は腰に当てて、右手はピストル状態で横に倒す、で、2カメに向かって『ビシッ』と指さして【ライデイン】腰を少しくねらせたり、首を傾げたりウインクしたりで効果倍増だ！！ みんなも一緒にやってみよう！ ユキもマリアもやっていたという後付け設定だ！

08 父が託すモノ（前書き）

パパスがサンタローズの洞窟に残っていたモノ。

それは自分が成し遂げられなかったモノ。

受け継がなければならないモノだった。

DQN！ 第8話 始まります。

08 父が託すモノ

Side ナギ

サンタローズの村にやってきた。

ほのぼのとした感じは変わらず、村だなくって感じのままだった。

昔住んでいた家は既に取り壊され、立派な畑になっていた。
うん立派な大根だ。

「御主人様。今日はこの大根で美味しい料理を作りますね！」

「コラー！！ オラの畑を荒らすでねえ！！！」

ユキが怒られている。もう父さんの所有地では無くなったらしい。

「へー、ここがナギの育った村か」

「素敵なところですね」

さて、父さんが手紙で最後に言っていたのは、サンタローズに行け
という事だった。

「家が無い以上、調べるとしたら……あの洞窟だな」

俺が子供の頃、父さんは洞窟に何度も行っていた。強い魔物がいる
わけでもないのに、何故だろうか？

「む？ お主は……もしや、パパス殿の息子のナギか？」
「あ、爺ちゃん久しぶり！」

小舟を持っている爺さんだ。父さんはこの人から船を借りて、洞窟の奥へと行ってたっけ。

「父さんはこの洞窟で何をしていたんだろう？」
「パパス殿は何かを調べておったようじゃ。しかし、あの子供がここまで大きくなるのはのう……。行くのじゃろ？」

爺さんは小舟を貸してくれた。

洞窟を奥に進むと、銀色の素早いヤツが見えた。

「んあゝ！ んあゝ！！！」

「どうしたのだマキバオー、今の早いヤツが気になったのか？」

「んあ！」

「それは、拙者の事でござるか？」

いつの間にか後ろに回っていた。それは銀色のスライムだった。先ほど一瞬見えたヤツで間違いなさそうだ。

「拙者はこの洞窟の忍びのメタルスライム。名は疾風と申す」
「んあ！ んあゝ！」

「ほう、拙者と勝負と申すか……よかるう、ではこの先は一本道で行き止まりでござる。壁にタッチして、ここまで戻ってくる。どちらが早く戻って来れるかな？ その御婦人、合図を頼むでござる」
「わ、私？……じゃあ行くよ。位置に着いて……ヨイ……スタート！」

ピシンー！！

マリアの鞭がスタートの合図となり、洞窟に乾いた音が響き渡る。メタルスライムの疾風はその名に恥じぬスピードで駆けて行く、マキバオーは少し遅れているが、それでも食いついている。

しかし……。

「……ふんっ、その程度で勝負とは片腹痛い、出直してくるがよい！」

疾風はそのスピードを更に上げた。

「な、なんという早さだ！！ マキバオー……」

ピエールはマキバオーに鞭を入れるのを止め、遅れて帰って来た。

「その程度の足なら世界中にうようよしておる。勝負が出来るくらいになったらまた会おう。では、御免！！」

悪いメタルスライムではないようだ。疾風はすぐに見えなくなってしまった。

「残念だったな。一緒に強くなっていこうぜマキバオー」

「……んあ！」

「ナギ……そうだな。強くなろう」

更に進み、やがて部屋を見つけた。

「ここは……」

「おいナギ、凄い剣があるぜ！！」

そこには鞘に収まっている剣があった。

すぐ近くに手紙が落ちていた。

『ナギよ、我が息子のナギよ。

お前がこの手紙を読んでいると言う事は、私はお前の傍にはいないだろう

私はずっと旅をしてきた。お前の母、マーサを探すためだ。

しかし、マーサは魔界に連れ去られたようだ。

私は魔界の事を調べるうちに、伝説の勇者の文献を見つけた。

天空の武器と防具、これを装備できるのは勇者のみ。

そして、私が見つけられたのは、ここにある剣、【天空の剣】のみだ。

しかし、未だに勇者は見つからない。ナギよ、伝説の勇者を探すのだ。

魔界に行けるのは天空の武具を纏いし勇者のみと聞く。

母さんを、マ―サを見つけ出してくれ!』

「父さん……」

「伝説の勇者……何だか凄い壮大な話になってきたな……。あ、そうだ! ナギ。その天空の剣、抜いてみるよ」

「おう」

しかし、鞘から剣は抜けない。というか力が抜けて行く。

……俺って主人公だよな? って事はこれ抜けないとヤバイよな? 俺が勇者じゃないのかよ? 主人公〓勇者だる普通。

「でも、父さんも抜けなかったんだよな……。悔しかっただろうな……」

俺達は洞窟から戻り、酒場のあるアルパカに情報を仕入れに行く事にした。

「あれ? 隣町ってアルカパだよな?

ナギ、今アルパカって言わなかったか?」

「……言っていない」

「ウチの大根はすげえんだけども、盗むのは良くねえ!」

「は、はい。ごめんなさい」

まだ怒られてたかユキ。

あ、そうだ！ アルパカと言えばビアンカがいるじゃないか！！
綺麗になつてゐるだろうな。 あ、彼氏いるだろうな、いたら凹む
な。

S i d e o u t

「ちげえよ！ 何度言わせりゃ分かるんだよ？ 酒の注ぎ方は…」

…」

「す、スイヤセン！」

俺は昨日まで海賊だった。

いきなり天候が晴天から竜巻へと変わり、俺達の船は沈んだ。
酒を注ぐぐらいなら出来るだろうと思っていたが、これが中々難し
い。

これからは酒のマイスターとして一から出直そうと思う。

そして、胸を張って帰れるようになったら、

妻と子に夢のマイホームをプレゼントするんだ。

カランコロンカラン♪

「いらっしやいませーい！！」

「変な訛り入れるんじゃないよ！ こうだ！ いらっしやいませー

！！ 何名様でしょうか！？ はい、ありがとうございます。御新
規4名様ですー！！」

「「「いらっしやいませー！！」「」」

まだまだ勉強する事は多いようだ。

S i d e ナギ

「御新規4名様ですー!!」

「「「いらっしやませー!!」」「」」

「居酒屋みたいだな」

「居酒屋？」

何でもない気にするな。

やって来たのはアルパカの酒場。

着いた頃には暗くなり、酒場としても活気づいているようだ。

「へー伝説の勇者ね。そんな事よりオラクルベリーに行きたいんだよ俺は、まさかあのスライムもどきの白い珍獣が来るとは……次は絶対に負けられないからな……」

ただのギャンブルジャンキーの様だ。

「あらーどこのお店で働いてるの？ 今度指名するからお店と名前教えて？」

ホストじゃねーよ。

「伝説の勇者の伝説ってどういう意味だろうな？」

知るか！

駄目だ情報という情報が無い。

「ナギさん、こっちも駄目でした」

「アッチの爺さんたちも知らないらしいぜ」

外れか……まあ良い、宿屋でビアンカと再会して、あわよくば恋人に……なれるわけないか。

「いらつしやいまし。長旅御苦労さまです」

「チェンジ」

「は？」

「……あ、間違えた。ビアンカはいますか？」

「ええっと、ウチには生憎ビアンカという子はおりませんが……」

いない！？ どこに行つたんだ！？

ダンカンって人がやつてる宿だよな？

「ああ、ウチは7、8年前にダンカンって人から譲ってもらつてやつてるんですよ。何でも実家に戻るとかで……大きい声じゃあ言えませんが、身内の方に不幸があつたらしいですよ」

ビアンカにじゃないだろうな？

「まあいいさ、泊まって行こうぜナギ」

Side out

Side 女の子組

「へえ、ユキさんって小さい頃からナギさんのメイドさんなんですか」

「ええ、御主人様が私の目を覚ましてくれてね」

「しかし、妖精の村というのは聞いた事が無い。いつか行ってみたものだな」

大浴場で、ユキ・マリア・ピエールの3人は湯船に浸かっていた。

ユキの昔話に始まり、それぞれの過去を語っていく。

ユキは元々孤児で、ある時、人間の世界に迷い込んだ妖精と遊んでいる内に、逆に妖精の村に迷い込んでしまった。そこでポワンと出会ったのだが、ポワンと自分、どちらが綺麗かという事でケンカになり、怒ったユキは村を飛び出した。そして、ユキの特異な能力とも言えるモノが目覚め、幻術や魔法を覚え始めた。氷の女王としてドワーフの子供、ザイルを使い春風のフルートを奪ったまでは良いが、その先は特に考えておらず、「このフルートを返して仲直りしよう」と密かに考えていた。そこへやって来たのがナギだ。ユキはテンパってしまい。ナギに襲いかかろうとするが、ナギの圧倒的な火力に倒れ……また別の性癖と言える門が開かれ今に至る。

マリアは光の教団の信者で、誤ってイブールという教祖の壺を割ってしまい、信者から奴隷へと身分を落とされ、光の教団の真の姿が見え始める。「何故こんな団体の信者だったのだろう?」そう思うマリアは見張りの足に誤って石を落としてしまい、鞭打ちをされてしまう。そこへさっそうと現れたのがナギだ。ナギの強さ、優しさ、兄からの信頼も得た点でマリアは惚れて、脱走し、今に至る。

ピエールは旅人だった。白いスライムを半ば強制的に助けることになり共に行動する事になり、旅をしていた。マキバオーの名前はマキバオーの目を見ていたら思いついたと言うか、伝わってきたようだ。ある日、路銀も尽きかけて、スライムナイトレースに出る事にした。初出場で人気は最下位、それでもその初レースで優勝した。まさかの事態、まさかの圧倒的な強さに主催者側は今後の出場を禁止にした。次の日の早朝、ナギという人物が500コイン賭けていてくれた事を噂で知り、マキバオーの実力を一目で見抜いた観察眼の持ち主に会いたいと思い、オラクルベリーを飛び出した。しかし、飛び出した瞬間にスライムナイトの群れに襲われた。レースの疲れがまだ残るマキバオーには全力で逃げ切る力はなく、もう捕まると思われた瞬間、現れたのがナギだった。

「共通して御主人様ってヒーローですね」

「私もそう思います。ナギ様に会っていなかったら私は……」

「うむ、私も同意見だな。婿にしたいぞ私は」

「だ、駄目！ ナギさんは私の……！」

「決めるのはナギだ。選ばなければ私はそれで構わん」

「ふふふ、モテモテですね御主人様は」

「え？ ユキさんは……その、良いんですか？」

「私はお傍にいらればそれで構いません。もし結婚してしまったら、ただの夫婦になってしまいますからね」

「……よく分からのだが、それではいけないのか？」

「いけません！ 御褒美を頂く方が気持ち良いに決まっています！
！」

「ご、御褒美？」

「どういう事だ？」

そして、のぼせる様にユキ以外は大浴場から出た。

「そういう愛され方もあるのか」と、考えてしまう風呂場での一件だった。

Side out

Side ナギ

「何だよ話って？」

風呂から出て部屋に戻るとヘンリーは真剣な顔で俺に話があると言ってきた。酒場で情報が無いとか言っていたが、何か情報を手に入

れていたようだ。

「実はな、今日酒場で聞いた話なんだけど、ラインハットが……俺の国が大変なことになってるらしいんだ」

「大変な事？ お前が攫われていた時点で十分大変だったと思うけどな」

「茶化さずに聞けよ。俺の親父は何年か前に死んでるらしいんだが、毒殺されたらしいんだ。そして、ラインハットは他国を攻めようとしてるらしいんだ」

「穏やかじゃねーな。今の国王が悪者ってことか」

「いや、今の王は聞いたところによると、デールだ。俺の弟だ」

「ああ、あの王様になりたくないって言ってた奴か……随分ねじ曲がった育ち方したんだな？」

「だから聞けよ！……俺はデールを信じてる。それにこのままじゃ駄目だと思うんだ。誰も俺の事なんて待ってないかもしれないけど、俺はラインハットに戻らないといけないと思うんだ。だから、俺、ラインハットに戻りたい！ 勝手な事を言ってるのは分かっている！ ずっとナギと旅したいと思うけど、でもやっぱり俺はラインハットに……！！」

「ヘンリー」

俺はヘンリーの肩に手を置いた。

「な、ナギ……」

「元からお前はラインハットに送り届けるつもりだったから安心しろ」

「……え？　ちょ、ちょっと待ってくれ……別れを惜しむとか以前に、俺を初めから置いていくつもりだったのかよ？」

「仕方ないだろう？　お前はラインハットの王子なんだから。いつまでも攫われたままってわけにもいかないだろう？　それに周りの目もあるだろう。かなりヘンリーの評価も落ちてるしな。良い機会だと思うんだ」

「誰の所為で落ちた評価だコラ」

「……？」

「そこでお前が首を傾げるのは何でだー！！」

まるで悪いのが俺だとしても言いたい様な勢いだ。
困った奴だな。

ガチャ

「御主人様。お風呂上がりの牛乳です。ヘンリー様もどうぞ」

「ああ、ありがとな。ほれ、ヘンリー」

「……ふんっ！」

「ヘンリーさんってお礼も言えない人だったんですか……」

「礼儀は大事だぞヘンリー殿」

「やっぱり自業自得で評価落としてるんじゃないか？」

「今のはタイミングの問題だろうが！！」

「賑やかになってきましたね。それで、次の行き先は決まったんですか？」

「ああ、東にあるラインハットに行くぞ」

「ラインハットか、あまりいい噂は聞かないな。確か国王が毒殺さ

れたとか」

「な、何しに行くんですか？」

「ああ、言ってますでしたか。ヘンリー様はその国の王位継承権を持つ第一王子様です」

「ヘンリーさんって王子様だったの！？」

「ほう、見掛けによらないものだな」

「元だ。元王子。今の俺はただのヘンリーさ」

「今の王様の弟が心配なんだってさ」

「なんだ良い所もあるんじゃないですか」

「ヘンリー殿も人の子であつたか」

少しだけ株価が戻ったかな。

「今日はもう寝ようぜ。明日またな」

「ナギ、一緒に寝ても良いのだが？」

「ちょ！ピエール抜け駆け！？」

何かの罰ゲームか何かか？俺は裏があると見て断った。

はあゝ勇者だったらウハウハだっただろうになゝ。勇者ってどこに
いるんだろう。

S i d e o u t

S i d e 女の子組

女子部屋として取っている部屋に戻り、それぞれのベッドについた。

部屋は暗くなるが、会話の火はまだ消えていなかった。

「ピール、さっきの冗談だったのよね？」

「本気だったさ。【兵は神速を尊ぶ】というだろう？ 先手必勝だ」
「一緒に寝るだけでヘンリー様もいらっしやいましたか……」

「む、眼中になかったな……まあそれでも構わんか」

「な、何言ってるのよ!!」

「はいはい。そろそろ寝ておいて下さいね。明日も早いですよ。まあとりあえず、御主人様は……」

「」「鈍感ですね（だな）」「」

初めて女子たちの意見が一致した瞬間だった。

S i d e o u t

08 父が託すモノ（後書き）

感想・レビューは随時受付中だ。

フリ「ども〜お疲れ様です〜。フリスタでございます〜どもども〜。今回のゲストは、最近姿を見せないあのお方！ どうぞ！」

ハク「神様をやっているハクじゃ」

フリ「神様をお招きするとは思っても見なかったわけですけども…

…」

ハク「敬う必要はないぞ？ ゲストとして扱うがよい」

フリ「かしこまり〜。ではお手紙来てますので読みますね」

ハク「私にか、神に手紙を送ってくる奴がいるとはな……」

フリ「『10年も見てませんが、もう出て来ないんですか？ ハク様がないと僕はもうっ！』 P・N・ロリババア友の会名誉会長さんからです」

ハク「誰がロリババアじゃ、全く。出なければならぬな。ナギのアホも少しは成長しとるようじゃからな……本当に少しじゃが。しかし、恐らくこの会長とやらが考えてるような形では出て来ぬじやろうな」

フリ「と、言いますと？」

ハク「これ以上は言えんな。とりあえず、まだしばらくは出て来れぬさ、ナギが見てられんようなら出てくるかな」

フリ「お楽しみってやつですね。よろしく願います」

ハク「うむ、ナギと違って話が通じて助かるのう」

フリ「ありがとうございます。では最後に、こちらの方よろしいでしょうか？」

ハク「ああ、何度か見ておるから大丈夫じゃ、任せよ。

次回！ DQN！ 第9話【種を割ると強くなる】ワシは出て来ぬぞ？」

フリ「では次回も！」

ハク「お主のハートにギガデイン！！」

フリ「ちょ！ 強すぎ！！」

09 城を破壊する者（前書き）

今回はラインハット編なのさ！

アイツと、サヨナラしなくちやな。でも、ずっと友達だぞ？

09 城を破壊する者

Side ナギ

ラインハットに着いた。

馬車にムツクルを残し、城下町で見たものはいずれも酷いものだった。

ケンカ、窃盗、ホームレスで溢れている。アウトローの街並みだった。

「この国はもうお終え〜だよ〜」

酔っ払いは喚きちらしている。

「まともに話せそうな人がいませんね……」

「そうだね〜」

「む、あそこの子供はどうだろうか？」

そこには裸足でボロボロの服を着ている女の子と男の子がいる。

「た、旅の方ですか？ 失礼ですが、何日も何も食べてないんです。何か恵んで頂けないでしょうか？」

「お姉ちゃんお腹すいたよ〜……」

「ユキ」

「かしこまりました。とりあえずコチヲをどうぞ」

「ありがとうございます、ありがとうございます！」

「では、一緒に行きましょう。宿に着いたらすぐに温かい物を作り

ますから」

「い、いいのですか？」

「少し話を聞きたい。この国、ラインハットについて」
「……」

ヘンリーは気持ち重そうだ。

宿に着き、乞食になっていた子供を風呂に入れてあげて、ユキがご飯を作る。

「どうぞ、召し上げれ」

「い、頂きます！」

「この国は、どうしたんだ？ って言っても知らないかな？」

「……少し前は、私と弟はお父さんと暮らしていたんです。でもお父さんは城に連れていかれて、処刑されちゃったんです」

「酷い……」

「ふむ、何故だ？ 悪い事でもしたのか？」

「いえ、これは、お父さんと一緒に仕事をしていた人から聞いた話です。お父さんの仕事は城のお掃除で、城を出入りしていたそうなんです。ある日、お父さんが掃除をしていると話し声が聞こえてきたそうなんです。もうこの国は駄目だって、国王は皇后に毒殺されただって」

「それで？」

「お父さんは聞かなかったふりをしようとしたらしいんですけど、たまたまそこに皇后様がやって来たらしくて、皇后様はお父さんが

言っただと思つて首を刎ねるように言つたそうです」

「そんな……！」

どうやら普通の考えを持った奴じゃなさそうだ。皇后ってデールの母親のやつだよな？ あ化粧の濃いオバハンか。そこまでする必要があるのか？

「ユキ、調べてくれるか？」

「かしこまりました」

夜、静けさに包まれた宿屋。

ユキが戻つて来た。

「ただいま戻りました」

「どうだった？」

「皇后様は数年前から人が変わったように、やることなす事に変化が現れたようです。もちろん全て悪い方向にです。夜は城門が閉まり、橋も上がってしまうのですが、城の下に地下道があるのを確認しました」

「どうだヘンリー」

「地下道……ああ、確かあった。昔は隠れ家の一つとして使ってたよ。確か城の脇に用意されてる船でも入れるんだ」

「じゃあそこから明日、乗り込むぞ」

「乗り込むって……どうするの？」

「皇后を倒す」

「皇后を殺しても、ただの犯罪者になるだけだぞ？」

「そしたら恩赦でも貰えば良いだろう？　ここには王子様がいるんだからな」

「……分かったよ。それ以外に方法はなさそうだからな。これ以上荒廃していくこの城を見ていたくない」

「ああ、もう一つお耳に入れておきたい事が」

「ん？」

「集めた情報をまとめた私の推論の域を出ませんが、今の皇后様って偽物かもしれませんよ？」

好都合じゃないか。あんな小さい子供を餓死させる直前まで追い詰め、城下町もボロボロだ。あんな皇后が生きていていいわけがない。それに偽物ならなおの事問題なしだ。

「ところでナギ」

「……何だ？」

ヘンリーが俺に声をかけてくる。

「何か悪い物でも食ったのか？　いつものお前じゃないみたいだぞ？　口数は少ないし、口を開けば声を低くして少ししか喋らないし、何て言うかシリアスな空気出してるけどよ……」

「ばかやろう、折角良い“ふいんき”のキャラで来てるのに」

「“雰囲気”ですよ御主人様」

「……もうヤダ！　こんな城なんて全て消し飛ばしてやる！！　＜バギク……！！＞」

「だあああ！！　いきなり何っ！　魔力溜めてるんだ！！　止めてく

れ！ 何しに来たんだお前は！！」

「いつもの御主人様に戻りましたね」

「いや、それだといつも破壊神みたいじゃない？」

「それぐらい強いと言っ事だろう？」

そうじゃねーだろ。

翌朝。

霧がかかる街並みを歩いて行く。橋はかかっていて、城門は閉ざされていた。

「こつちだ…… あった。あの船で行けるはずだ」

船に乗り込み、俺達は城の地下道へと入って行った。

すると、すぐ目の前に扉があるのだが鍵が掛っていて開かない。

「ヘンリー殿の記憶が正しければ、この扉の奥がもう出口らしいのだがな……」

「こつちから行くしかないわね」

「いえ、開けましょう <アバカム>」

カチャッ

「ロスト・マジック！？ 扉を開ける魔法なんてどこで！？」

「好きな小説を読んでいたら【俺に出来ない事は無い】って書いてあって、自分ももしかしたらって思って、適当にやったら出来たんです。あ、ですから教えるのは無理ですよ？」

コイツもチートなメイドになったもんだ。

「……ウツ……ウツ」

「呻き声？」

すぐ近くの階段を上がろうとした俺達は立ち止まった。

奥から女性の呻き声というか、泣き声が響いて来たのだ。
そこにいたのは……

Side out

【ラインハット謁見の間・玉座】

この国はもう駄目だ。

そう言っているかのように国王であるデールは頂垂れていた。
父である先代の王が死に、兄は行方不明のまま。なし崩し的に国王
になった男だ。今の国を見て分かる通り、器じゃない。

しかし、器じゃないだけなら、こつも酷くはないだろう。では
何が原因なのか？ それは……

「デール！ 何をしておる！ さっさと軍議を始めぬか！！」

デールの母である。デールは自分の意見など言えず、この母親の言
うままの操り人形になっていた。

「分かりました……」

「おっと、お待ち願えますかな国王陛下？　そのまま動かないでいただきたい」

現れたのは男2人、女3人、スライム（白い？）1匹の冒険者風のメンバーだった。

「何じゃ貴様らは！？　衛兵！　何をしておるのか！！　つまみだせ！！」

「それは貴様だ」

先頭に立つ黒い服装の大剣を持つ男は歌うように語る。

「ひとつ、人の世の生き血を啜り」

その後ろに控えるメイド服の女は続ける。

「ふたつ、不埒な悪行三昧」

そして、金髪の女が自信満々に言い放つ。

「みつつ！　淫らな未亡人！！」

「（マリア違う、そこは未亡人ではなく人妻だ）」

「（あ、そっか！　ありがとピエール！）　淫らな人妻！！」

「どっちも違うし、やらんでいい」

「邪魔すんなよヘンリー、空気読めよ」

「お前らが読め！」

「ヘン……リー？　に、兄さんなのか？　兄さん！？」

「ああ、帰って来たぜデール。随分と酷い国になったもんだな？
ええ？」

「そ、それは……」

「衛兵はどうした！！ 貴様等ただでは済まさぬぞ！！ 死刑じゃ
！！」

「後は親分に任せておけ。少しの間バトンタッチだ。……偽皇后！
！ 貴様を倒す！！」

「偽……？ どういう事なの！？」

「デール……おおデール！」

更に後ろからデールの母が現れる。しかし、デールの横にも母がいる。

デールは横と前とを見比べて叫んだ。

「母上！？ 母上が二人！？」

「偽物はそっちであろう！ デール何をしておる！ 衛兵を呼ばぬ
か！！」

「さつきから衛兵衛兵うるせーな。自分の方が強いだろう？ 魔物
なんだから。マキバオーの鼻は誤魔化せないぞ？」

「んあ！」

「くっ！ このままで行けばこの国は世界を手に入れられたものを
……キシヤーツー……！！」

皇后だと思われていた女は醜い魔物の姿に変身した。

「うるせーよ！」

ズバッシュ！

「ギエエエエー！！ おのれーおのれー！！ 動くな！！ この男
が死んでも良いのか！！？」

「ああ！ 国王が！」

「くっ！ どうするのだナギ！？」

トレース・オン

「＜投影開始＞ こうするのさ、ホレ、ヘンリー」

「メタルキングの剣！？」

「お前の弟が死んでも、お前がいるんだ。お前が王になればこの国
も大丈夫だろ？」

「な、ナギさん！？」

「（マリアさん、御主人様を信じて下さい。御主人様が信じるヘン
リー様を信じて下さい）」

「……デール、俺は国が酷い有り様だって聞いたから来たんだ。国
は俺が何とかする。だから……」

「兄さん！ 気にしないで！ 僕がいけなかったんだ！ 母上が入
れ替わっていた事も気付かなかった！ 崩れていく国を止める事も
出来ず！ ただ見ているしか出来なかった僕が！！ だから！ 僕
ごと斬って！！」

「おらあああ！！！」

「ほ、本気か！？ 肉親を！？ 貴様ア！！！」

魔物はデールを突き飛ばし、ヘンリーに鋭い爪を振り下ろした。
しかし、その腕は空を切る。ヘンリーは剣を魔物の腹に突き刺し、
デールへと飛び付いた。

「き、貴様らあ……ゴフッ」

「に、兄さん!？」

「親分は子分を守るものだぜ? ナギ!！」

「へっ、今までで一番力ツコ良かったぜ! <壊れた幻想!!-->」
ブローケン・ファンタズム

ドッゴンッ!!

「キャアー!！」

「ぬうつ! 何と言う爆発だ!」

「あゝヘンリー様巻き添えですかね?」

「……やりすぎたか? ちよつくらごめんよ? <ホイミ>」

「危つく死ぬとこだったぞ……ケホケホッ!」

「最後の仕事が残ってるぞ? お前もだ。ほら立てよ駄目国王」

「だ、駄目国王!? ……酷い」

【城下町】

「し、城で何があつたんだ?」

「しらねーよ。いきなり爆発しやがつたんだ」

「あ、誰かでてきたぞ? 国王と……誰だありや?」

「嘘だろ? いや、でも似てる? ヘンリー様じゃないか!？」

「生きてたのか!？」

国民が城の爆心地に視線を向ける。そこには現国王のデール。
そして、その隣には10年も前に消えた第一王子のヘンリーと思わ

れる人物がいた。

『聞け国民よ！　今まで苦勞したであろう。私は元・第一王子のヘンリーだ！』

「やはり！　ヘンリー様じゃったか！」

「お爺ちゃん、あのカッコいい人誰？」

『これまであなた達国民を苦しめていたのは皇后の姿に化けた魔物の仕業！！　今しがたの爆発は決着の爆発だ！　これからは、このデールが国王としてこの国を導いていく！！』

「に、兄さん！？　どうして！？」

【爆散している謁見の間】

「に、兄さん！？　どうして！？」

「最後まで言つてなかったな。もう一度はじめから言うぞデール。俺は国が酷い有り様だって聞いたから来たんだ。国は俺が何とかする。だから……だから、お前は国王のままでいろ。俺が全力でサポートする」

「で、でも！　僕は……！」

「子分は親分の言う事を聞くものですぞ？」

「……兄さん」

「『『『『デ・エ・ル！！　　デ・エ・ル！！　　デ・エ・ル！！』』』」

「ほら、みんなも認めてくれてる。答えてやれ」

こうして、ラインハットは国として再起する事になった。

――数日後。

「あの、ありがとうございます！ 私、この宿屋に住み込みで弟と一緒に働かせてもらえる事になりました！」

「そいつは良かった。今度泊まりにくるよ」

「良かったですね」

「この国は世界一ハッピーだよ〜ん」

「あのオジサンって前も酔っぱらってなかった？」

「酔い方が違うから良いだろう」

「そうですね」

【謁見の間・ツヴァイ（建築中）】

「もう行ってしまうのですか。助けて頂いてお礼も出来ずに……」

「そなたたちには何と感謝してよいか……」

「ナギ、俺は……」

「残るんだろ？　これ以上は定員オーバーだ。逆に連れて行けねよ」

「（馬車ってかなり余裕あるよね？）」

「（余計な事を言うなマリア）」

「ふふふ」

「ナギさん。僕にはこんなことしか出来ませんが、これ、サンタロースの南にある港にある船のチケットです。明日の正午に出港予定らしいのでどうぞ」

「助かるよ。じゃあなヘンリー」

「……ナギ！　俺達は……！」

「友達だろ？　確認するまでもない。じゃあな。暇が出来たら寄らせてもらうぞ。それまでにこの国を立て直しておけよ？　辛気臭い国の友達になんて会いたくないからな」

1台の馬車がラインハットの関所を通過した。

メイド服の黒髪の女性が手綱を握っている。

メイド服の女性は前を向いたまま、馬車の中の会話に参加している。

「がうがう……」

「いや忘れてないって、本当だよ！　俺がムツクルのこと忘れるわけ無いだろう！？　ほら、アレだ。ムツクルさんの手を煩わせるほどの相手じゃありませんぞってやつだよ。おいおい機嫌直してくれよ」

「そう言えはなかったな」

「どこにいたの？」

「ずっと馬車の中でして……」

「がっ……きよふん……」

「ああ！ ムツクル！ お前らムツクルの心を踏みじめる様な事を言うな！ ほらムツクル？ 魔物の餌だよ？」

「がっっ！」

「うおっ！？ ……ムツクルさん！？ 今、俺の頭に噛みつきつとしました！？ マジですか！？ そこまでお怒りですか！？」

賑やかな旅は続く。

09 城を破壊する者（後書き）

感想は随時受付中なのか……ん？ ああ、カメラはこっちか

フリスタ「ども〜読んでくれてありがとうございます〜。フリスタでございます〜。今回のゲスト〜」

ヘンリー「ヘンリーだ。国王の補佐役になったぜ」

フリスタ「主人公以外では初の男性ゲストですね〜。お便り来てますよ？」

ヘンリー「ナギに嫁を連れていかれたからな……ファンの子かな？」

フリスタ「『ツンデレが欲しいです』世界ツンデレ機構名誉副会長さんから〜」

ヘンリー「何故俺に言う？」

フリスタ「でっっていう？」

ヘンリー「どこに行っても俺の居場所は無いのか……」

フリスタ「まあいいじゃん。最後カッコ良かったよ？ あんな親分なら付いてくる子分も増えるって、男だけだけど」

ヘンリー「嫁募集！！ 婚活します！！」

フリスタ「ツンデレか〜新人さん呼ばないといけないかな〜？ あ、でもそろそろ会えるか。ナギの嫁候補に」

ヘンリー「聞いてないし、アンタもナギと同じで人の話聞かないよな……って今何て言った！？ 嫁候補に会える！？ ユキは！？ マリアは！？ ピエールは！？」

フリスタ「それも嫁候補」

ヘンリー「そ、そんな……で、でも一人だよな！？ 結婚できるのは一人だけだよな！？ かわいそうじゃね？ なら俺に一人ぐらい回してくれても……」

フリスタ「うわっ最低……上がった株を自分で下げてどうするんだアンタは……それに何か勘違いしてますよ？ この作品の『キーワード』見てないんですか？」

ヘンリー「キーワード？ ……あ、コレか。……重婚にハーレム！？ ふざけんなー！！」

フリスタ「スタッフさ〜ん。このゲストうるさいから摘まみ出して〜」

ヘンリー「ちょ！ 待て！ 待てって！ 俺にも嫁を〜！！」

フリスタ「……全く、黙っていればその内お嫁さんが来るって言うのに。ねえ？ あ。イケない。ゲスト追い払っちゃった所為でタイトルコール要員がいなくなっちゃっ……え？ 出来るの？ マジ？ じゃあお願いします」

ムツクル「次回 DQN！ 第10話 【船の上で】拗ねてなんかないんだからね！ ただ、アタシがいた方が楽に進めるんだからね！？」

フリスタ「喋ったよ……っ！ つか獣耳と尻尾以外は人間みたいに……ええ〜……」

ムツクル「次回も！ アタシを見てくれないとライデイン？」

本編で擬人化するかどうかは分かりませんw

ついでにアンケート!!

ドラクエ?って、正式な嫁さんって【ビアンカ】【フローラ】【デボラ】っているんですが、デボラって出した方が良い? 知らない人はDS版をやった人だと思うけど、どうよ?

というわけで、デボラを選ぶようにするかどうか、アンケート! お願いします! 次回投稿ぐらいまでに感想欄で書いてください。

まあ次がいつになるか分からないんですけどねw

10 大富豪と家宝の盾の噂（前書き）

気付いたら総合評価700pt

ありがとうございます。

目標1000ptだったので意外であり、嬉しくもあるw

今回はサラボナに着くぐらいまでをおおくりするよ？

10 大富豪と家宝の盾の噂

「いっざ進めや〜キツチ〜ン♪ みじん切りだ包丁〜♪」
「がっ〜♪」

「仲直りして良かったですね」

「って言うかさ〜。船で行く先はどこなのよ？」

「うむ、デール王の渡されたこの船のチケット。これと一緒に入っていた手紙によるとだな。大富豪の家に凄い盾があるらしい」

そう！ それこそが次なる獲物だ〜♪

天空の剣とくれば、盾に兜に鎧だろ？ 凄い盾、持ち主は大富豪とくれば大正解だと思うわけだよ。

「揚げれば〜コロツケだ〜よ。キテレツ外人〜♪」
「がっ〜♪」

「ふふふ、変わった歌ですね」

「あ、島が見えてきたよ〜！ 降りる準備しなくちゃ」

「ああ、ん？ マキバオーはどこへ行つた？」

「んあ、んあ〜」

マキバオーの声が奥から聞こえてくる。

みんなの視線の先にはタンスの横にいるマキバオー。

背を向けていて、何かをポリポリと食べているような……。

「全く、さっき食べたばかりだろうに……ん？ コレは種？」
「んあ！」

「コレは、素早さの種ですね。こっちはスタミナの種に、かしこさの種……他にも」

「それってどういう種なの？」

「食えると体力増強したり、足が速くなったりと、その種の名前通りの力が少し手に入るんですよ。コレは多分、前にこの部屋を使っていた人の忘れものでしょうね」

「よし、貰おう！」

「がう？」

良いの良いの。確かRPGって拾得物とか、人の家の物とか勝手に自分の物にして良いんだろ？

「では、私が育てましょう」

「「育てる？」」

「がう？」「んあ？」

「ええ、種ですから。鉢に植えて育てると多くの実をつけて、更に大きな力を得られるようになるんですよ。それでも私、【SEEDマイスター準1級】持ってますからね。お任せ下さい。あ、この前は【特級麵点師】の資格も取りまして……」

ユキって本当に何者だよ……？

【港町：ポートセルミ】

「着いた〜！」

「がう〜！」

「では食事をしてから情報を集めましょう」

「酒場は……、あ、アレね」

「飲むなよマリア？」

「の、飲まないわよ！」

「飲まれるからなマリアは」

そう、この天然のマリアさん。飲むと絡んでくるんです。

この前のラインハットの祝杯も飲まれて、デールを脱がしました。

凄いな。元奴隷娘が一国の国王を脱がしちゃうんですもの。脱がした後？ そりゃあ放置ですよ。酷いもんだ。

「ナギさん？ アレは、その……違うんですよ!？」

「……さあ行くぞ〜」

「聞いてってば〜！」

酒場。そこは荒くれどもがいる西部劇の世界。

何て事は無く、みんな軽く飯を食ってるだけだ。昼間だからな。

「マスターあのテーブルに追加の飲み物を頼む。酒は無しでね。それと情報を貰えるかな？」

奥のテーブルでは、とりあえずの軽食を摘まんでいるユキ達の姿があった。

「んゝ このお肉美味しい」

「香草が効いてて良いですね」

「ふむ、丁寧な下ごしらえが窺えるな」

とりあえずマスターに事情を説明すると渋り始めた。

「へえゝ母親を探すために伝説の勇者を探して旅をしてる……その若さで大変だねゝ。でも若い娘さん3人も連れてるし、イケメンだしねゝ。情報あげたくないなゝ」

「じゃあこれでどうだ？」

ドンッ

カウンターに置いたのはメタルキングの剣だ。

酒場のマスターは目の色を嫉妬から切り替えて、剣をカウンターにしまい、それ相応の対応で話をしてくれた。

「か、家宝にさせてもらいます！ 伝説の勇者ってのは知らないんですがね？ 何だっけかなゝ、ええゝと！ あ、そうそう！ 南西にあるサラボナって街に大富豪ルドマン様が住んでるんだ」

「大富豪？」

「そう、この街って船が凄いだろう？ アレは全てルドマン様の船なんだよ。それぐらいの大商人なのさ。最近じゃあカジノ船も好調らしくてねゝ。いやゝ人生の勝ち組ってああ言う人なんでしょうね。それで、その家宝がとんでもなく綺麗な盾らしいんですよ」

大富豪って言えば、確かデールの手紙にもあった。

しかも家宝が盾。うん天空の盾の持ち主かもしれない。

「マスター。そのサラボナって言う街までの地図書いてくれ」

「はい、よろこんでー！ いや、凄い剣が手に入ったもんだ」

「地図によると、西のルラフェンって町から、ひたすら南に行く。すると洞窟があるらしいんだけど、それを抜けたらサラボナは間近だそうだ」

「あれ？ この南にある印は何ですか？」

「ああ、カボチ村とか言う農村らしい。伝説の立派な大根があるらしい」

「行きましようー！！」

「行かねーよ」

「では、このルラフェンにも用は無いんですかね？」

「いや、寄った方が良さそうぞ」

「ピエール？ 何か知ってるのか？」

「ふむ、私は興味ないのだが、このルラフェンには古代魔法を研究している老人がいてな。ナギには必要かもしれない。確か名前は…ベネット、ベネット爺さんだったかな」

「古代魔法ね」

「私もルーラはベネットって言うお爺さんに学びましたよ。ルラムーイン草を採ってきてと言われて、そしたらすぐに覚えられました」

ルーラか、確かに便利そうだ。ユキから教わっても全然できなかったからな。ヘンリーのいるラインハットまで戻ったりするのに便利そうだ。

「あゝ覚えた覚えた」

「がうがう」

「いやいやいや！ もうちょっと描写あるでしょう！？」

「描写？ マリア、何の話をしているんだ？」

「天然だからな、何か電波でも受信したんじゃないか？」

「お疲れなのではないでしょうか？ 馬車でお休みになれますか？」

「人を「可哀そうな子」みたいな目で見ないでよ！」

まあそんなこんなで、見えてきたよサラボナの街。
すぐ隣に高い塔がそびえ立っている。
その時、魔物の群れが現れた。

「俺に任せろ！！」

「ストレス発散ですね」

「マキバオー、今の内に回復しておくか」

「んあゝ」

俺に任せろ。つまり、ストレス発散させてちょうだいね？ って作戦だ。手を出さずにお願いますと言うわけだ。

俺は合体剣を分離させ投げまくり、壊れた幻想で爆散させて行く。
ブローケン・ファンタズム

「へっ、きたねえ花火だぜ」

パララパッパッパ♪

ああ、久々のファンファーレ。これが聞こえてきたという事は。

「久しぶりだなアニキ！」

「もう呼ばれないかと思ったぜ！」

「まあ作者次第なんだけどなー！」

「何の話だ。危ない話なら止めておけ」

「危ない橋を渡らずして何がスライムだ。俺達はそう言ったスリルも味わうのさ。さて、アニキのレベルは20になったぜ」

「イケメン18歳。レベルは20。向かうところ敵なしだな！」

「魔法も増えてるぜ」。読んでみな」

今回増えたのは……【イオ】【スカラ】【ベホイミ】【キアリク】だった。

「増えたな。ベホイミが使えると今後が楽だな。まあ敵なしだけどな。と言うわけで」 < イオ！ >」

チュドーン！！

……遠くの山が崩れていく。幸い、周りには町などはないが……。ヤバいのか？

「流石だぜアニキ！！ あんな威力のイオなんて見たことねー！」

「じゃあ俺達はこれで引き揚げるぜ！」

「こりゃあイオナズンを覚えた時が楽しみだぜ！！　じゃーなアニキ！」

「ナギさーん、見て下さい。あつちの山が突然崩れて……」

「爆発していたように見えたが、発掘作業の人達が発破したのかも知らないな」

「うん、そう言う事にしておいてくれ」

【サラボナ】

「こつからでも豪邸が見えるな」

「凄い大きいですね」

「待ってー！　リリアン！！　誰かー！　お願いです。その犬をつかまえて下さい！」

「わんわんわんー！！」

「犬だ！！　可愛いなー！！」

「くーんくーん♪」

白い大きめの犬は俺の足元に来ると飛びついて来た。フサフサの毛を撫でて、俺は衝動を抑えきれなくなり……モフった！！

「いいなー……あんな風に私も……」

「うむ」

何だお前らも抱きたいのか？ もう少しモフらせてくれ。

「まあ、リリアンが私以外の人に懐くなんて……」

やって来たのは飼い主であろう女性。俺と同じ年ぐらいだろうか？
まあ、そんなことよりも……モフモフ、モフモフこれは……うん。
モフモフ……モフ……モフモフモフモフモフモフモフモフっ！！

「くーん」

「ねえ、ピエール。この飼い主さん美人だよね？」

「そうだな」

「気立てもよさそうよね？」

「気品もあり、器量もよさそうだな」

「何だかその人がナギさんに見とれてない？」

「……ああ、見惚れているな」

「ふふふ、うかうかしていると取られちゃいますよ？」

「そ、そんな……」

「……うかうかしてられないか」

「——あ、私ったら。すみません。この子が突然走り出して、お怪我はありませんか？」

「大丈夫大丈夫」 動物は大好きでして」

「そうですか、良かった。またお会いできましたらきつとお礼をいたしますわ。さぁリリアン行きましょう」

「わんっ！」

「可愛かったな〜……」

「な、ナギさん！？　そ、そんな……」

「“犬が”だろう？　……そうだろう？　そうだと言ってくれ」

何がだ？

ピエールが不安そうな顔を浮かべている。

クールなピエールがこんな顔するなんてな、何かあったのか？

【ルドマン邸】

「盾が本物だったらどうするんです？」

「メタルキングの剣を全て差し出しても手に入れようと思う」

「物々交換か……相手は大商人だ。足元を見られなければ良いが……」

……

む、確かにその通りだ。その時はその時で考えよう。

そう考えて家に入ると……。

「いらっしやいませ」

「メイド喫茶！？」

「御主人様？　メイド喫茶ならば“おかえりなさいませ”です」

ああ、そうか。ビックリした。って何で知ってるんだ？

「こちらでお待ち下さいませ。お連れの方は、申し訳ありませんが外でお待ち下さいませ」

一人廊下で待たされる俺。そして、俺の前には3人ぐらい並んでいる。

……アレ？ 面接会場にでも招かれたか？ 俺は盾が欲しいだけで……。

「あなたもフローラと結婚したくてここに？」
「結婚？」

「失礼、僕の名前はアンディ。彼女とは幼馴染なんです」
「フグさん。どうも俺はナギと言います」

「いえ、アンディ……」
「フグさん。結婚って？」

「……ええと、修道院に花嫁修業に行っていた彼女が前よりずっとずつと綺麗になって帰って来たんです。……ボクはお金も宝も欲しくありません。彼女が妻になってくれるのなら……」

ええと、久々に論理的に考えてみよう。

まず、ここはサラボナで間違いない。情報によると、この街の大富豪ルドマンと言う人が、天空の盾と思われる防具を持っている。そして、この家以外は普通の民家。つまりここがルドマンと言う人の邸宅。しかし、入ってみれば、そこは面接会場と化しているし、目の前の金髪ロン毛のフグさんは、妻にしたいと言っている……ルド

マンって女なのか。

そうだよな、……大富豪になるぐらいだから、4〜50代の年増なのだろう。そして、「そろそろ一緒に墓に入る人を決めたいな」、でも私ブサイクだしな」とか考えて、「莫大な資産をあげるから夫になりなさい」とか言い出したのだろう。

……盾は諦めるか。もしくは盗みに入るか？
スパーンッ！

「失礼いたしました。小さい女の子がこれで叩いてくださいとの事で」

ハク嬢ちゃんか？ 来てるなら声掛けてくれれば良いのに。まあとにかく、神のツツコミハリセンが入ったと言う事は違うってことか……論理的に考えても間違えるとはな……。

いや、でもポートセルミにある船はルドマンって人の物だって言ってたな……この先は船も必要になるんじゃない……盾と船、両方貰えないかな……

「お待ちせいたしました。では中にお入りください」

メイドさんの声で、順番に中に入っていく。集団面接かよ……個人でもやけど。

さて、どんな試練が待っているのか。

10 大富豪と家宝の盾の噂（後書き）

感想は随時受付中です。

フリスタ「ども。フリスタです。今回のゲストは、恐らく次回で二度と出て来なくなるアンディさん」
アンディ「……どうもアンディです」

フリスタ「お？ アンディさん。コレちょっと読んでみて下さい。多分ピツタシだと思うんですよ!!」

アンディ「は、はぁ……。アンディです。彼女と結婚が出来ません。アンディです。溶岩で火傷を負ったとです。アンディです。彼女が僕を冷たい目で見てきます。アンディです。この際ルドマンさんに告白してみようかと思うとです。アンディです。アンディです……アンディです……」

フリスタ「はい。別に意味は無いんですけどね」

アンディ「ちょ、ちょっと待って下さい作者さん。僕って……溶岩で火傷するんですか？」

フリスタ「……では次回！ DQN！ 第11話！」

アンディ「【酒と泪と男と女】……って、いやちょっと!？」

フリスタ「ではでは次回も！」

フローラ「アンディの心臓にミナデインです!!」

アンディ「何でー!!!？」

11 好きな人と2つのリング（前書き）

総合評価800pt突破！！ ありがとうございまーす！！

前回のあとがきでフローラが何故アンディにミナデインを撃ったのか？ その疑問も晴れる11話。

君は誰とキスをする？ 私？ それともあの娘？ そつだ悩め悩め！！

11 好きな人と2つのリング

ルドマンの屋敷で行われた謎の説明会。

それは、ルドマンの一人娘であるフローラとの結婚相手を決めるためのものだった。ルドマンの下に集まったのは、ルドマンの船や資産目当ての商人。フローラと家宝の盾を手に入れようとする強欲な男。フローラの幼馴染だと言うアンディ。そして……何もかもが理解しきれない男、冒険者のナギだった。

「さて、本日集まってもらったのは我が娘、フローラの結婚相手を決めるため。しかし、ただの男に、かわいいフローラをくれてやるうとは思わんだ。そこで条件を聞いて欲しい」

「条件？」 「何だ？」 「……」

「古い言い伝えによると、この大陸のどこかに2つの不思議な指輪があるらしいのだ。一つは炎のリング。もう一つは水のリング。身につけた者に幸福をもたらすという。もしもこの2つのリングを手に入れ、結婚指輪に出来たのなら、喜んで結婚を認めよう。我が家の婿にはその証として、家宝の盾を譲るつもりだ」

つ、ついて行けん。

まず、認識を改めよう。ルドマンは男で目の前のハゲたオッサンだ。自分の性欲の為に結婚相手を探していたのではなくて、娘のフローラと言う子の結婚相手を探していたようだ。そして、家宝の盾は天

空の盾とは限らないが、このオッサンの娘と結婚しないと盾は手に入らない。

……盾の為に結婚とかないわ。まあ十中八九、天空の盾で間違いないんだろうけど……どうする！？ どうするよ俺！？ 続くー！！

「待って下さい！」

「おお、フローラさんだ」

「アレが私の物に、ククク」

「フローラ……」

ほう、アレがフローラ……あれ？ さっきのデカイ犬ちゃんの飼い主じゃね？

「フローラ！ 部屋で待っているように言っただろう」

「お父様。私は今までお父様の言うとおりにしてきました。でも、夫となる人は自分で決めたいのです。それに、炎のリングは溶岩の流れる危険な洞窟にあると聞きました。どうか、お願いです皆さん！ 私などの為に危ない事をしないでください！」

私の為に争わないで！！ ってか？ 実際に聞くのは初めてだ。まあ行くしかないか。でも先に確認をば……。

「あゝ質問いいですか？」

「ん？ 君は見かけない顔だね……」

「あ、アナタは先ほどの……」

「何だ、知り合いかねフローラ……ふむ確かに頼りになりそうではあるが……何かね？」

「失礼、俺はナギって言います。家宝の盾って【天空の盾】ですか？」

「どうであつたか……名前まではハッキリとは覚えていないのだが……どこかの蔵にしまつてある書物に書かれていた気はするが……今やその書物も残っているかどうか……」

あゝ、不明確な盾の為に俺は結婚するのか……まあ、フローラは美人さんだし？ 不満は無いけど、フローラにとっては迷惑なんじゃないだろうか？

「何か他に質問は？ ……では、お開きとさせていただきます」

「やれやれ、大変な課題を出されたな」

「盾もフローラさんも私の物ですよ。ククク」

「急がないと……待っててくれよ、フローラ」

俺はとりあえず、ルドマンの屋敷を出た。

「あ、御主人様。どうでしたか？」

「んゝ、何か結婚しなきゃいけないみたいだ」

「そ、そんな！ 駄目ですよ！！」

「そ、そうだ！ 強制される結婚に愛なんて無いだろう！」

何だか知らんが勢いのある否定だな。

「でもな、家宝の盾つてのが、この家の娘さん。フローラって言うんだけど、その子と結婚しないと貰えないんだよ。あ、ちなみにさつき街のはずれで出会った犬の飼い主さんだぞ」

「ぐっ！！……金持で氣立てが良くて美人……！！」

「どうにかならんのか……！！」

何を悔しがってるんだ？

「ふふふ、では行きましょうか」

「どこに行くのか知ってるのか？」

「炎のリングはここから南西の方角にある【死の火山】と呼ばれる山にあるという言い伝えがあります」

「あれ？ 俺、もう炎のリングとか、結婚の条件とか言ってたっけ？」

「御主人様。デビルイヤーは？」

「地獄耳。……え？ 何？ お前の耳ってデビルイヤーなの！？」

さつき「どうでしたか？」って聞いてきたのも何だったんだ。

ガチャッ

「あ、良かった。まだいらしたんですね」

「ああ、フローラか。何か用？」

「ナギさんにお願ひがあるのです」

「お願いって？」

「ナギさん。アンディには絶対に負けないでください」

「アンディ？ ああフグか。幼馴染って言ってたけど？」

「またそんな事を言っていたのですね。実はアンディには困っているんです。行く先々で待ち伏せしたり、買物物をしようとすると勝手にお金払ったり、突然高そうな物をプレゼントして来たり……」

「……ストーリーカーかよ。純愛かと思ってたよ……」

「そ、そうなんです！ 言っではいけない事なのかもしれませんが、気持ち悪くて……最近になって、番犬としてリリアンを飼い始めてからは、リリアンが助けてくれるのですが、それでも怖くて……」

「ワンッ！」

リリアンってそういう意味で飼ってたのね。

「まあ大丈夫だと思うけど、行ってくるよ」

「はい、行ってらっしゃい。くれぐれも危ない事だけは……」

「むっ 既に新婚さんのような空気だしてる……！」

「身代金目当てで攫うか！？ やるのか私は！？」

「ふふふ、面白くなってきましたね。では参りましょうか」

【死の火山……から出てきたとこ】

「いや、ユキのマヒヤドのおかげで涼しく進めたな」

「溶岩原人とか言う魔物も溶ける事の出来ないほどに凍てついていたな」

「御主人様のヒヤドも同じぐらいの威力でしたよ？　まだまだ修行不足です」

「そうね……って、イヤイヤイヤイヤ！　また中略！？　ほら！　アンディとか言う人が溶岩で火傷してたとか！　それを助けたユキさんがストーキングされ始めたとか！　でもそれをマヒヤドで氷漬けにして放置してきたとか！　色々と描写が……！！（ポンッ）　な、ナギさん」

「マリア……ドンマイ！」

「……はいっ！」

「遂に諦めましたね」

「壊せない壁もあるものだ」

「がう」

「んあなあ」

「なんと、もう見つけてきたというのか！　これが炎のリングか……ではこの指輪は私が預かっておこう。さて、残りは水のリングだが……水のリングと言う以上、水に囲まれた場所にあるかもしれないな。よし、町の外に私の船を停めておくから自由に使うと良いだろう」

「あれ？　フローラさんは？」

「ああ、すまないね。フローラは余程嬉しい事があつたらしく、教会に感謝の祈りを捧げに行っているのだよ。何でもこれで安心して眠れるとか」

ああ、フグの件か。まあ被害が無くなって良かったな。

町の外から船に乗り進んでいると、水門にあたった。

これ以上進めないぞ。水門の鍵はでか過ぎる上に複雑で、ユキの開錠の魔法でも開かないようだ。俺達は船を下りて、水門の付近を散策した。

「ね、アツチに温泉があるらしいよ？」

立て札を見つけたマリアが声を上げる。マキバオーとムツクルは馬車の中で少しクシャミをしている。どうやら硫黄的な成分が鼻にくるらしい。

【山奥の村】

「ナギさん、温泉行きませんか？」

「こ、混浴だぞ！ 心の準備は出来ているぞ！」

「あのお二人さん。混浴でも水着は着用ですよ？」

「行って来い行って来い。俺はみんな風呂に入るのとか苦手なんだ」

俺は一人、山奥の村をぶらつき情報を集めることにした。水門の力ギの開け方を知っているのは村の一番奥に家を構える主人の娘さんだけらしい。

「この奥か……お墓？」

途中お墓を見つける。そこには跪き、祈る様にしている金髪の女性がいた。

「すみません。もしかしてなんですけど。あの奥の家に住んでいらつしやる娘さんでしょうか？」

「え？ はい、そうです……が」

振り向く女性を前に俺に電撃が走った。後姿だけでは測りきれなかったその女性の美しさ。そして、何よりも……面影が残る……そう、この人は……。

「び、ビアンカ？」

「そ、それじゃあ……ナギ？ ナギなの！？」

「ビアンカ！」

「痛っ！ ちょっとナギそんなに強く抱きしめないで、痛いわ」

「ああ、ごめん。でもアルパカにいなかったからもう会えないかと思っ……」

「うん……お母さんが死んじゃってね。このお墓お母さんのなの」

「そう……」

「パパスおじ様は？ 一緒じゃないの？」

「父さんは、グランバニアって国にいるらしいんだ。話せば長いんだけどさ……」

「そう、立ち話も何だし、ウチに来ない？」

「ん？ お客さんかな？」

「お父さん。ナギよ！ 子供の頃よく遊んだナギよ！」

「本当かい？ ああ、確かにナギだ。良い男になったな。間違えてしまったよ。ゴホッゴホゴホッ」

「だ、大丈夫ですか！？」

「お父さん、横になって」

「ああ、大丈夫だよ、すまないね。ナギもゆっくりして行ってくれ」

俺はビアンカとダンカンさんにこれまでの事を話した。

「そうか、苦労したんだね……」

「でも本当に久しぶり。今日はゆっくりして行つてね」

「うん。でもそんなにゆっくりもしてられないんだ。水のリングつて言つのを探さないとならないんだ」

「水のリング……確か北にある滝の洞窟にあるって聞いた事があるわ。……でも、どうして水のリングを？」

「う、うん。それがさ……結婚しなきゃならないみたいなんだ」

「結婚！？ ナギ結婚するの！？」

「うーん。さつき話した伝説の勇者って、伝説の武器防具を身につけてないと魔界に行けないらしくて。その伝説の防具と思わしきものを手に入れるために水のリングが必要で、盾と一緒に花嫁も付いてくるらしくて……」

その日は泊めてもらい。俺はビアンカと10数年間を埋めるように夜遅くまで話をした。そして、夜が明けた。

「朝食の準備がもうすぐ出来るから。ナギは仕度出来たら来て、父さんのは持ってくるわ」

「ああ、分かったよ」

「ふあー、おはようございまーす」

ビアンカは部屋を後にする。

居間の方から朝食の良い香りと食器の音が流れてくる。

「なあ、ナギ。これはビアンカにも言っていない事なんだが」

「なんですか？」

「ビアンカは、本当は私の実の娘じゃないんだよ」

……何故今？ 何故に俺に話す？

「アルカパで宿屋を始める前に、あの子を拾ったんだ。それから実の子以上に可愛がった。かみさんが亡くなってからもビアンカは私の面倒を見てくれている。不憫でね……。ナギ、ビアンカのことを頼むよ」

いや、頼むって……

「私はこんな身体だからこの先どうなるかも分からないしね」

「ナギ、ご飯が冷めちゃうわよ？」

「あ、ああ」

「この事はビアンカには内緒だよ？」

「ねえ、ナギ。昨日の話なんだけど。私にも手伝わせて？ 滝の洞窟に行くには水門を開けないといけないし、私も行くわ」
「う、うん助かるよありがとう」

「あ、御主人様。どこにいたんですか？」

「宿屋にも馬車にも船にもいないから心配してたんですよ？」

「ムツクルも寂しがってたぞ？」

「ああ、悪い悪い。紹介しよう。幼馴染のビアンカだ。このビアンカが水門のカギを開けられるんだ」

「よ、よろしく。……ちょっといいかしらナギ」

「何？」

「何よあの可愛い子達は！ どの子と結婚するの！？」

「結婚相手はルドマンさんの娘さんだよ。ここにはいない」

「それじゃあ遊びで！？」

「何言ってるんだよ。俺なんかと結婚したいと思う奴なんていないだ

ろっよ」

「……本気で言ってるの？」

「あゝ割り込んですみません。ビアンカさん、御主人様は誰からのアタックにも奥手……と言うよりも、冗談だと思っておりまして」
「そう……そう言えばナギは昔から人の話聞かなかったわね」

「更に強敵現る！！……もう駄目だゝ！！」

「幼馴染でこれほど美人だと……くっ！！」

「あなた達だつてかなり美人じゃない？」

「私には胸が……」

「私には女らしさと言うか……」

「何の話してるんだゝ？ 行くぞゝ！！」

「「もう少し待って（下さい）！！」」

「な、何だよ？ 女つてすぐに仲良くなれるんだな……」

「ふふふ、恋する女性はいつだって最強ですよ？」

何の話だ何の。

「がうゝー！！」

「本当にムツクルなの！？ 大きくなつたわねゝ。あらリボンもちやんと着けててくれたのね。きやつ、くすぐったいわ。あはははは」

【滝の洞窟……から出てきたとこ】

ビアンカは洞窟内で自分が拾われた子供だと言う事は知っていると
言った。

アルカパで元々ムツクルを虐めていた子供。彼らがビアンカに「捨て子捨て子」と新しい遊び対象として囃したたのだそうだ。しかし、親分ゴーストも一緒に倒したビアンカ。黙って見過ごすわけもなく、鞭でシバいたらしい。

そんなビアンカを見ると、俺は昨日の電撃に撃たれた感覚とは違った。何か胸を締め付けられる気持ちになった。

「いやゝもうビショビショゝ」

「ユキ、タオルを取ってくれないか？」

「全て滝で水浸しですよ」

そう言っている割にはユキだけは乾いたままのメイド服だ。

ユキを除いてみんなずぶ濡れだ。服は濡れて肌に吸着するようにボデイラインを描いている。

「や、やだ。ナギさんだったら……で、でもナギさんなら良いですよ？ 見て？」

「むっ！ 私も見えていいぞナギ！」

「ナギ……濡れちゃったね？ ふふゝ」

「っ！ し、仕方ない。乾かすか……<メラ>」

……あ、しまった。焦って魔力を込めすぎた。
用意した囲炉から多いにはみ出して船を焼いて行く。

「ちよっ！！ 船が！！」

「総員、海に飛びこめ！！」

俺達は海でプカプカと浮かびながら、

“仕方なく”燃えて沈んでいくメリー号（仮）を見ていた。

『僕はもう少し普通に君たちと旅をしたかったよ』

「船から声が!？」

「メリー!! ごめんな〜!! マキバオーはウンコ垂れるし! ムツクルはマーキングするし!! 滝で水浸しだしよ〜!!」

「ナギがとどめ刺したんでしょうが!! それにメリーって!？ 船に勝手に名前つけたの!？」

「で、でもどうするんです？ 借り物の船でしたよね？」

「なるほど、クラーケンが船を……まさかクラーケンがいるとはな……。それでも生きて無事に帰ってくるとは。君ほどの男はいないだろうナギ君」

クラーケンの所為にしました。しゃーない。

「では水のリングも預かるう。フローラとの結婚も認めよう！ フローラも異論はないだろう？」

「はい。ナギさんなら私は心から喜びます……ですがそちらの女性は何？」

「え？ アタシ？」

「幼馴染のビアンカです」

「さあてと！ 用も済んだし私はこの辺で……じゃあ幸せになるのよナギ？」

「待って下さい！ もしや、ビアンカさんはナギさんをお好きなの

では？ それにナギさんもビアンカさんの事を……その事を気付かず、私と結婚してナギさんが後悔する事になつては……」

「まあ落ち着きなさいフローラ。では、こうしたらどうだろう？ ナギ君、宿を用意しよう。今夜一晩考えてフローラかビアンカさんが選んでもらうのだ。いずれにせよ。君は炎のリングと水のリング。二つを手に入れた男だ。私は君を気に入ってるのだよ。誰と結婚するにせよ。結婚式は私に任せると良い」

「ルドマンさん……」

【夜】

結局、結婚は避けられないってことか。

しかし、ビアンカが俺の事を？ マジで？

ドッキリだろう？ カメラどこだよ？

「あゝ眠れない……」

「少し、散歩してきたらどうですか？」

「おわっ！ いたのか……」

「ええ。先ほどマリアさんとピエールさんがフローラさんを拉致して結婚式を中止させようとしてましたので、気絶させておきました。今夜は馬車で眠ってもらっています。明日は朝から忙しいですからね。」

「そうか……少し出てくる」

夜とは言え、外を出歩けば声をかけられる。いつの間にかフローラとビアンカの婿として有名人になっているようだ。

「俺ならフローラさんだね。お金も素敵な奥さんも手に入って問題なしじゃないか」

「アンタはそんなんだから結婚できないのさ。ナギさんは相手の気持ちも考えてるだろうから大丈夫だろうけどね」

相手の気持ちか……。

「いや、ビアンカちゃんって可愛いよね。ウチで雇いたいぐらいだよ。で？ 旦那は決めたのかい？ まだ？ あ、そうかい……まあ一世一代の大勝負みたいなものだからね」

大勝負か……。

やがて、見えてきたのはルドマンさんの別邸だった。窓から覗くのは金色の髪の女性。ビアンカだった。

「ナギ。……ふふふ、大変なことになっちゃったわね。でも悩む事ないわよ？ フローラさんと結婚するんでしょ？ 私の事なら心配しないで？ 今までだって一人でやって来たんだもの」

「ビアンカ……」

そして、答えは出ないまま。俺は宿屋に戻った。
もう逃げ出しちゃおうか……？

フローラを選ばないと盾が手に入らない。
ビアンカを選ばないとビアンカの未来は……。

どっちも嫌いじゃないし。っていうか好きだし。

みんながどう思ってるか知らないけど。ビアンカだって、フローラ
だって、マリアだって、ピエールだって、ユキだって……全員好き
だよ。でも結婚ってなんだよ？ ……選ぶってなんだよ？ 選ばれ
なかった人はどうなるんだよ？ みんなと笑って行くのは無理なの
か？ 出来ないのか？

「でも、御主人様もそうやって生まれてきたんです」

「ユキ……」

「御主人様もパパス様が奥様と結婚して、御主人様が産まれたから
ここにいます」

「……」

「答えは……出なかったようですね」

「……俺は、どこに行っても、どんな場所でも、どんな時でも、何
となくで生きてるんだと思う。これからもそれは変わらないと思う。
そんな俺ってやっぱり迷惑かな？」

「……確かに迷惑かも知れませんが、でも、私はその迷惑を嬉しく
思います。楽しく感じます。御主人様がいたから、御主人様がいる
から幸せになれる人は数多くいると思いますよ？ だから迷惑なん
てかけちゃえば良いんです。本当に迷惑だと思えば嫌な顔しますよ。
そっという顔してる人はいましたか？」

「いなかった。でも見てないだけかもしれない」

「それで良いんじゃないですか？ 神様じゃないんですから」
「……そうかな？」

「そうですよ」
「……そっか」

「ええ」
「……うん」

沈んだ空気の宿屋の一室は、いつしか賑やかになって行った。

そして、運命の夜が明ける。

それは結婚式の当日だ。

そして、俺の気持ちは何も定まらずに揺れ動いていた。

11 好きな人と2つのリング（後書き）

感想は随時受付中ですわ

フリスタ「毎度〱作者のフリスタです〱。今回のゲストは〱」

フローラ「フローラです」

ビアンカ「ビアンカよ」

フリスタ「この3人でお送りします。フローラさんはナギに一目惚れで？」

フローラ「ええ、ライデインを受けた気分でした」

ビアンカ「私も同じ様にドキツとしたわ。久しぶりの再会でいきなり抱きついてくるんですもの。あんなに力強くなってるなんてね……」

フリスタ「それで、結婚するのは？」

ビアンカ&フローラ「私よ」「私です」

フリスタ「……さあ雲行きが怪しくなってますね……」

フローラ「ビアンカさんは諦めて帰ろうとしましたよね？」

ビアンカ「あら〱幼馴染に勝てると思ってるの？ 選ばれるのは私よ？」

フリスタ「ネタばれしましょうか？」

フローラ「誰もが分かる内容じゃないですか」

ビアンカ「そうね。まあそれだけで済むなら良いんだけど」

フリスタ「次回、DQN！ 第12話」

フローラ「【Happy Wedding】次回も！」
ピアンカ「あなたのハートにメラゾーマ？」

12 王国の名の下に（前書き）

総合評価1000pt達成〜！！ パララパッパッパ〜♪

本当にありがとうございます。沢山の御声援・ご感想いつもありがとうございます心の支えにしております！

しかし、これで良いのか？

大変長らくお待たせいたしております。
地震が怖くて執筆するのも怯んでました。

では DON！ 第12話 結婚のお話です。どうぞ

12 王国の名の下に

結婚式当日。

早朝にルドマンの屋敷を訪ねたナギ。
何故訪ねたかと言えば……。

「さて、よく眠れたかなナギ君」

「それなりには……」

「では、花嫁に迎えるのは
ビアンカさんか。ウチのフローラか。選んでくれたまえ」

ビアンカとフローラはルドマンの両脇に立ち並び、緊張の表情を浮かべている。

「いや、その事でルドマンさん……」

「なんとこの私が好きと申すか！？
そ、それはいかん！もう一度考えなさい！！」

「んなわけあるかボケえ！！」

バンツ！！

勢いよく開かれる扉、そこには1人のメイドがいた。

「お待たせしました！」

「だ、誰だね君は!？」

「ゆ、ユキさん? それにピエールさんにマリアさんも……」

「にへへへへ」

「ふふふふ……」

意味深とも言えるニヤニヤした表情でマリアとピエールも入ってきた。

ピアンカはその二人を見て困惑している。ナギもこの時、全てを知らないため不思議そうに見ていた。

「ど、どうしたの?」

「何かあったのか?」

ユキはワザとらしい軽い咳払いをして書状を広げてみせた。

「この婚約の儀。グランバニア王国の名の下にピアンカ様、フローラ様、マリア様、ピエール様4名を……グランバニア王国王位継承権第一位、ナギ様の花嫁として迎え入れます」

「……え……ええええ!!?」「……」

ナギ・フローラ・ピアンカ・ルドマンの4名は驚き騒いだ。ナギは書状をよく読み見て、自分の元々の育ちを知った。

「じゃ、じゃあ父さんは軍人とかじゃなくて……グランバニアって国の王様だったのか! ってゆーか俺が王子!？」

「左様でございます。いかがでしょうかルドマン様」

「あ、いや……確かにこの書状の烙印はグランバニアの物……」

「ナギさん……王子様だったんですね」

「な、ナギ……パパス叔父様も……？」

そして、ナギはふと冷静になり、花嫁予定の4名を見渡してこう言った。

「ユキ」

「はい、何でしょうか？」

そしてナギの視線はメイドの女性に向けられる。

「ユキは結婚しないの？」

「え……ええ……っ!!? わ、私ですか!?! いや、私はただのメイドですし!! 御主人様のお嫁さんなんておこがましいですし! 図々しいですし!!」

ガシッ

「え? マリアさん?」

ガシッ

「ぴ、ピエールさん？」

わけも分らず両腕を掴まれるメイド。

「もし、嫌なら断つてくれ。なんか、そういう流れだからさ……みんな俺と結婚してくれないか？」

「なんと！ やはりこの私も好きと申すか！？そ、それはいかん！もう一度考えなさい！！ 実はもう一度言つと私もその気になるかも知れんぞ！？」

「んなわけあるかボケえ！！ 二度目やんかオツサン！！ 三度目なんかあらへんからなあ！！ さつさと舞台袖に掃けんかアホお！！」

何故に関西弁なのか？

それは分からないが、KYルドマンは奥さんに連れて行かれた。

「……もう一度かな？ 俺と結婚してくれないか？」

少し照れるようにナギはもう一度告白をする。

ピアンカは答える。

「久しぶりに出会って結婚するって言われてさ……勝手すぎるわよ。……でも、あなたの傍に居させてくれる？ きつといい奥さんになるわ」

フローラは答える。

「恥ずかしながら一目惚れでしたし、アンディのストーカーの件も助けてくれました。足手まといにならないようになります。幸せにしてください」

マリアは答える。

「私、一番じゃなくても良いんです。でも見ていて欲しいんです。一緒にいたいんです。私、やっぱりナギさんが大好きです」

ピエールが答える。

「最初はその眼に惹かれた。圧倒的な強さに。だが、女としての感情までも芽生えてしまった。私もナギを愛おしいと思う。結婚して欲しい」

グイッ
グイッ

「わ、私もですか!？」

いつも冷静なユキが両腕を抱えられたまま真っ赤になって答える。

「わ、私は、その……出来ればあ……専属メイドのままの方が……」

「正直に言わないと駄目よ?」

「そうですね。きっと後悔します」

ピアンカとフローラもユキを諭すように口添えする。

「ううう……け、結婚……してください……」

誰も知らない人間がその場を見たとしたら、そのメイドはさぞかし悔しそうに見えたのかもしれない。涙を溜め、下唇を少し噛むようにし、両腕を抑えられている。しかし、その場にいる者が見れば幸せを噛みしめていたように見えた。

Side ナギ

あれから1週間が経過していた。

足りない指輪はルドマンさんの鼻屑にしている宝石商から買い足した。

ちなみに炎のリングはフローラに、水のリングをビアンカにあげる予定だ。何となく逆かなーとも思ったが、炎のリング取りに行った時はビアンカに会ってないし、会えるとも思わなかったからな。まあ喜んでくれてるし良いよな。

花嫁のヴェールを事前に発注していたが、まさか5人になるとは思わなかったため、それも追加で発注した。ただいま山奥の村で鋭意制作中だ。寝ずの番で職人さんが丹精込めて作ってくれている。

さて、俺はというと今 ラインハットにルーラで来たところだ。アイツも呼ばないとな。通されたのは応接室的なところ。目の前には未婚の親友ヘンリー君20歳（仮）がいる。

「そうか、結婚かあ、モテるからなお前。ユキか？ ピエールか？
マリアとか言ったらただじゃおかねーぞ」

「いや全員」

「そつかあ意外だなー全員かあそつか……え！？ 全員！？」

対面にいたはずのヘンリーが俺の目の前に飛び跳ねてきた。
机の上に乗るな国王補佐。しかも何故に正座だ？

「あ、て言うか、幼馴染だったビアンカって子と、結婚式上げる街
の大商人のところのお嬢さんで、フローラって子も」

「5人！？ いや、重婚は認められないだろう？ 嘘だろ？」

「それがな、俺ってグランバニアの王位継承権持つてるんだってさ、
父さんが先代の国王だったらしい」

「ちょちょちょっ！！」

『ちょっと待てよ！』と、声に現しきれない感じで、ヘンリーは俺
の隣に座り込んだ。

「え、待って、ちょっと兄さんそれは急展開過ぎますやん」

後輩芸人かお前は。歳で言ったらお前の方が1〜2コ上だろうし。

「まあ明日結婚式だから良かったら来てくれよ。これ招待状」

「ああ、行くわ。ええ……マジかあ……」

「ヘンリーは？ 何かお見合いとか政略結婚とか無いの？」

「あるにはあるけどな、中々なあ」

「そつか。まあ来てくれな。じゃな」

あの分じゃヘンリーの結婚はまだ先の事になりそうだな。

【教会】

「汝、健やかなる時も病める時も……」

一人ひとりに同じ言葉をかけて行く神父。

みんな一様に「はい、誓います」と答えて行く。

そして、誓いの口付けが終わり、教会を後にして祝福の声援を後ろに俺達はルドマンさんの別邸で着替えていた。

「ねえナギ。さっきの式の事なんだけど……」

「あ、私も聞きたいと思ってたんですけど……」

全員が同じ意見らしい。
それは……。

「「「「口付けの順番に意味はあるの（あるんですか）？」」「」」」」

「いや、俺も初めてのことだったし緊張して誰からしたかも、順番も覚えてないんだけど……」

そう、記憶が正しければ左から順にとか、右からとかじゃなく、真ん中にいた人にして、何故か右端に行つて、左の方にフラフラと行つて……。でも誰がどの位置にいたとか全然覚えてなくて……。

「じゃ、じゃあ誰が一番最初に初夜を共にするかってわけじゃないのね」

「初夜つて……」

「だ、誰が最初ですか？」

「わ、私か!？」

「私ですか？」

「私は別に……」こによこによ……」

……重婚とは大変です。

え？　ここから先？

見せられないよ！

俺達はグランバニアを目指しサラボナを出た。

結局ルドマンさんの家宝の盾は天空の盾だった。娘さんと共に頂きます。

大事にします。

船ももらいました。名前は『サウザンドサニー号』

名前は何となくだ。別に小型船が出たり大砲が撃てるわけじゃない。

ヘンリー？

結婚式が終わると共に引き出物の紅白まんじゅうを食べていたよ。

甘いはずなのにしょっぱいとか言ってたっけか。

S i d e o u t

ここは地図で行くと南に位置する砂漠地帯。
どこまで行けども砂漠。

照りつける太陽。熱を反射する灼熱の砂地。
そんな砂漠に馬車がやってきていた。

「あうあゝ……熱いゝ」

「ええ、本当に……」

「ユキさんは本当にその格好で熱くないんですかあ……？」

「メイドですから。はい、御主人様かき氷です」

「ん？ ああ助かる」

馬車の手綱を握る男はタオルを頭に乗せ、

直射日光を浴びないようにしているが、効果のほどは見えづらい。

効果がハッキリ分かったら、ゴーグルぐらいだろうか？

砂埃が目に入らず、そこだけは快適そうだ。

最初は魔法で涼しく行こうと考えたのだが、この暑さで魔力を込めるのに集中できず、最初は馬車が氷漬けになり動かすことすらできなかった。なので少しずつ薄らと氷の膜を張って進んでいる。

「だが、ユキの氷系魔法が無ければ干からびるところだろう」

「んあゝ……」

「がう……」

手綱を握る男以外は全員馬車の中だ。

氷が溶け消える頃にはサウナの様にもなるが、またすぐに馬車の周りは薄らと氷漬けになる。

その旅をしている者達が向かうのは、先ほどから遠くの方で揺れ動く様に視界に映る城だった。オアシスを囲むようにそびえ立つ城は、旅の者からすれば蜃気楼の様にも見えていた。

「今日中には着きますかね？」

「んゝ大丈夫だと思いますよゝそろそろ着きたいところですしねゝ」

パタパタと手で服の中に風を送りながら外の灼熱の風景を鬱屈として眺め見る。

「お風呂に入りたいですねゝ」

「ええ、もう汗と砂埃で気持ち悪いですしね」

「でもこの暑さでも敵が出てくるんだから、モンスターって元気よねゝ」

「んあゝ……」

「がう……」

「まあ、土地柄なのかしらね。ウチの子達は辛そうだし」

「あ、敵だ。閉めるぞゝ」

「ゝゝゝゝゝはいゝゝゝゝゝ」

男の号令で馬車の入り口が閉ざされる。
馬車の前には魔物の群れがいた。

男は適当に剣を放り投げ、どういう原理なのか不明だが、爆発させる。

魔物の群れは跡形も無く消えるが、砂塵が舞い、男がそれをモロに受けている。

「ぺっぺっ！ あゝ、口の中がじりじりする……」

男はかき氷を口に運ぼうとするが、それすらも砂でコーティングされてしまっている。

「くそつたれ……」

かき氷は熱で溶けて行く。

氷など無くなり、全てが液体化するのを見て、カップの中の砂水は砂漠に捨てられた。

ぱしゃっ

パララパッパッパッ

「ん？ お前らか……」

「よう兄貴、レベルアップを報告しに来たぜ」

「アニキのレベルは……何だけ？」

「ほら、アレだ……まあ分かるだろ？」

「お前らも暑さにやられてるのか……」

馬車に飛び移って来たのは3匹の青くてデロデロしたスライムだった。

いつもなら尖がり頭をしているのだが、姿はバブルスライム状態だ。

「俺達スライムだからよ、暑さには弱いんだ」

「おっと仕事を忘れちゃいけないな。兄貴のレベルは22になっただぜ」

「覚えた魔法は……使ってくれ兄貴!! 兄貴の魔法ならきつと……!!」

男は急かされて魔導書を取りだす。

新しく浮かび上がっている呪文を 男は読みあげた。

「<ヒヤダイン!!>」

「「「超気持ちいい〜〜〜〜!!」」」

幸せそうに水色のバブルスライム3匹は吹雪に飛ばされて行った。

ジャッ!

「御主人様もう砂埃は落ち着きましたか? って砂漠は!？」

「うわっ! 雪国!？」

「純〜〜!! 蛭〜〜!!」

「え!?! いきなりどうしたの MARIA さん!？」

「この暑さでやられているんだろう。この吹雪ですぐに熱も冷めるだろうさ」

その日、砂漠に吹雪が巻き起こる怪奇現象が起こったことは歴史に刻まれることとなる。その吹雪は3日間にも及び吹き荒れた。

「……寒い」

「がうがう」

「んあー！」

「ああ……ムツクルは暖かいな……ぐう……」

「「「「寝ちや駄目（です）！！」「」「」」」

12 王国の名の下に（後書き）

感想は随時受付中です。

フリ「お久しぶりです。作者のフリスタでございます。ゲストは」

ユキ「メイドのユキでございます」

フリ「2回目の登場ですね。狙ってます？ レギュラーの座、的なものとか」

ユキ「いえいえ、滅相もございません」

フリ「そうですか？ いやでも、結婚しましたね」

ユキ「え、ええ……わ、私って必要でしたか？」

フリ「必要かどうかってより、相思相愛で結婚したいのになんておかしいでしょ？」

ユキ「ですが、私はメイドで……」

フリ「いや、変態だったユキさんも恋する乙女になって良かったですよ」

ユキ「あ、いえ、その点につきましては、夜の時は御主人様に……その……」

フリ「……スパンスパンされてると？」

ユキ「……（コクリ）」

フリ「……わお」

ユキ「で、では次回…… DQN！ 第13話、【SEEDが割れ

る時】 御主人様？ マキバオーが……」

フリ「では次回も」

ユキ「あなたのハートにライデイン？」

この番組はフリスタの提供でおくりしました。

13 砂漠の国で静かに大騒ぎ？（前書き）

久しぶりのDQN！

忘れてないかな？ ドラゴン・クエスト・ナギ！ だよ

いつも通り、前回の次回予告とは全く内容が違います。すみません。

今回は……迷った。

どこまで書くべきなのかw

という訳で、書かなかった部分に関しては想像してくださいw

13 砂漠の国で静かに大騒ぎ？

砂漠のオアシスに寄り添うように建造されている城【テルパドール】
ここには勇者を祀っている墓があるとの伝承がある。

当然、普通の旅人などは『勇者』と言うモノに興味を持つモノは少なく、墓に入るには女王が認めないとならないという軽い儀礼的な事もある上に、熱砂の砂漠地帯だ。旅人がこの城に寄る事も珍しい。

「儀礼とは何ですか？」と聞かれれば、女王の特異な力を説明する事になる。

別段、攻撃されたり、能力を奪われたりというモノではない。
女王には不思議な力を【見分けられる力】があつたのだ。

その能力で、勇者の墓に通して良いかの判断をするのだと言う。

そして、数日前から城主である女王アイシスは不思議な何かを感じ取っていた。

……しかし、感じ取るまでも無く、3日前からの異常気象を目の当たりにして、

今となつては、いつもは1枚で足りる毛布を、3枚重ねで包まれている。外は今日も吹雪だ。この国以外を知らない人からすれば、見た事のない銀世界。これが雪というものか。と、その寒さの前に『雪、ウゼエ。毛布足りねー』と感動すら感じる時間は無いに等しい。
ある意味、災害なのだから仕方ないのかもしれない。

さて、一般人で言うところの昼食が食べ終わり「さあて、仕事すんべ」と言う頃。武器屋や防具屋、宿屋までもが開店休業状態。開店しても客がいない吹雪の中。一組の旅の者達がこの城に訪れた。

Side ナギ

さて、吹雪を起こしたのは俺じゃないよ！

と、嘘の報告を馬車の嫁さん達に説明してから3日が経った。
昨日まではもう大変だった。

保守派と過激派に分かれての

【仁義なき雪合戦 - 砂漠に降りし雪の華-】や、

血で血を洗う抗争の後に協力する事の喜びを覚えた

【働け！ 負けるな！ 雪ダルマZ！！ - 働いたから負け-】や、

仕事を失って気付いた『今がどん底なら這い上がるだけ！』という事。

【まあモチツケ、お、餅が焼けたぞ？ inカマクラ - 明日はおしるこだ-】等を繰り広げた俺達は、テルパドルへようやく着いた。
1日で着く予定が、3日も掛るとはな……

「目の前に城があつたのに一体何故3日もかかったんだろう……？」

その答えは皆の心に深く刻み付けられている。

「楽しかったです」

「良い運動になったな」

「過激派組は卑怯よね、雪玉に石を込めたりしてさ……」

「雪ダルマZのロケットパンチもビックリしましたね……」

ちなみに過激派構成員は【俺・マリア・ピエール・ムツクル】だった。

俺？ まさか、石なんて入れてませんよ。

俺が込めたのは愛だけさ……ヒュルリ。『吹雪で』寒いな。

「では私はパトリシアを繋いできますので、先に行ってくださいませ」

「あいよゝ頼んだユキ」

ユキは、ムツクルとマキバオーを乗せた馬車を引くパトリシアの手綱を握り、城の裏手にあるらしいオアシスの方へと向かった。

俺達は情報を集め始めたのさ。

聞くところによると、どうやらこの城の地下には水を引き入れた女王お手製のちよつとした花畑が広がっているらしいのだが、2日前からの急激な寒さにより、人がいられる環境ではないらしく、地下への階段には【入れないよ！】という看板が立てかけられている。

「砂漠のお城の中のお花畑……見たかったですね……」

「吹雪なんて起きたからいけないんだな」

「異常気象じゃしょうがないわよ」

ソウネ。シヨウガナイヨネ。

奥の部屋に行くと、恐らく謁見の間であろう場所に辿り着く。目の前には、玉座に座りながらも、毛布に包まる少女が一人。

ガタガタと震えながらも、ハッキリとモノを言う当たり、臆がしっかりしているのだろう。

でも ぶつちゃけ、んなこと関係ない。

「……えっと、もう一度言うぞ？ 頼むからお嬢ちゃん、このテルパドールの一番偉い人に会わせてくれないか？」

「だーかーらー！ 妾がそうだと言うておろう！！
テルパドールの女王アイシスは妾じゃ！！ お主から変わった気を感じるから勇者を祀ってある場所へ案内すると言っておるじゃろうが！！」

毛布に包まって『動くのも嫌！』と言わんばかりの姿を前に
『何と言う矛盾！』と、感じざるを得ない。見た目は……褐色娘で、
若かりし頃のビアンカより少し大きいぐらいか？

「困ったな……どうする？」

「ん、アイシスちゃん。ごめんね。私達、伝説の勇者様を探してるのと、グランバニアに行かなくちゃいけないくて、伝説の勇者の情報がここにあるって聞いて来たんだけど……お母さんとか呼んでくれないかな？」

「話を聞かんかー!!」

俺達の目の前にいるのは、この砂漠のオアシスの国の自称女王のアイシスちゃん。俺達は、この国に勇者の墓があるって聞いて来たんだけど……さつきからてんで話が進まない。

「お待たせしました。パトリシアはオアシスの水飲み場に繋いでありますので、まあ凍ってたんですけどねえ。一応毛布をかけて、暖も取っていますから大丈夫ですが……どうかしましたか？」

「あゝこの子がな」

ユキが合流すると少女に向かって礼をした。

「これはこれは、お久しぶりでございます。アイシス様。どうかなさいましたか？」

……。

「では、案内お願いできますか？ 俺達勇者の墓が見たくて……」

「今更空気を読んでも遅いわー!!」

「マリアが子供だって言うからこんな事になったんだぞ……」

「そ、そうですけど、ピアンカさんだってフローラさんだって……」

「し、仕方ないでしょう？ だってホラ……」

「見た眼からしても、10歳いってるかどうかすら怪しいですしね

……」

「聞こえておるぞ小娘共!!」

「」「」「スミマセンでした!!」「」「」

「でもさーアイシスちゃんよ。寒くて動けねーんだろ？」

「む？ ……うむ、この様な寒さは初めてなのじゃ」

俺は何気なく毛布を握り締めている手に触れる。

「あ、あつたかいのじゃ……」

「おー冷たい冷たい……俺のメラで城全体を……」

「御主人様。温まるどころか焼失するかと存じますが」

ユキはにこやかに俺を止める。

ダメか……。

っ!!!!!!!!!!

「わひゃッ!!! ちべた~~~~~いつ!!!!!!」

突然。俺の背中から冷たいモノが絡みついてくる。

「あ、あわわわわわ!! 何してるんですか!!」

「おおおおおオットットだぞ!!! 私達の夫だぞ!？」

「な、ナギ!! 不倫!? わ、別れないわよ!!!？」

「な、ナギさん!？」

コレが不倫なら全員と結婚してるのは何なんだ!？
つと、状況としてはだな……。

「ぬううううゝ生き返るうゝゝ ヌクい……ヌクヌクじゃのゝゝゝ
ゝ」

「冷たい！ 冷たい!!！」

アイシスが俺の肌にペタペタと手や肌を擦り合わせてくる。
服の隙間から突っ込み入れてくるその手の冷たさ！ 鬼のごとし!!
ぬおおおおおおお冷たいゝゝゝ!!!!

「確かナギと言ったかの？ お主とその娘二人からは不思議な力
を感じるのじゃゝゝ さあ！ 妾についてくるがよい!! ナギ発
進!! 前じゃ!!！ そこを右に出よ！ 進め!!！」

「あらあら、大変ですね」

「落ち着いてる場合!？」

「くっ 追うぞ!!」

「あ、外に出るの!？」

「もうあんなところに!!！」

俺は肩車の様に乗っかっているアイシスの言うとおりに疾走する。
……何故走るかって？ 冷たいから振り落とそうとしているんだ！
手でどけようとしてもかわされるんだ。何て俊敏な……！

「早い！ 早いぞ!!！ もっと早く走るのじゃ! <ピオリム!
ピオリム! ピオリムゝゝゝ!!! > きゃっほーいゝ」

「冷たい……!!」

バンツ!!

「到着なのじゃ!」

「ぜーぜー……逆に温まってしまったぞ」

「又くい又くい」

「しかし、ここは?」

大きな広間。

少し先には短い階段があり、石碑と羽が付いた帽子の様なモノがある。

バンツ!!

「いた!」

「ナギから離れてもらおうか!」

「アイシスちゃんお願い!」

「離れて頂けませんか!?」

「うるさい小娘たちじゃの。よっと、ナギ。近こう寄れ」

ある程度温まったのであろうアイシスは俺の肩から降り、階段を上がった。

「ただの石碑に見えるけど、これが勇者の墓？」

「ではない。実のところ勇者の墓なんぞ無いのじゃ。ここには勇者のみが装備できる【天空のかぶと】これを祀っているだけなのじゃ」

「天空のかぶと……これが」

「さあ、装備してみよ」

多分無理だぞ？ 天空の剣も鞘から抜けなかったし
そう思いつつ、俺は兜を頭に被った。
グギッ！

「く、首が……滅茶苦茶重いなこの兜……ぬおっ！ 更に重く！？」

「むう？ なんじゃ、勇者かと思っただのじゃがな……」

「やっぱり無理ですよね。アイシス様。御主人様は天空の剣と盾を所持しておりますが、装備は出来なかったのです」

ユキが補足説明をしてくれる。

「ほう天空の武器・防具を持っているのか……それで不思議な感じがしたのかのう？ いや、それだけではないな……そう言えば、グランバニアに行くと言っておらんかったか？」

「はい。グランバニアでパパス様がお待ちなので」

「ほう？ パパス王がのう……グランバニアのナギ？ ほほう、なるほどのう？」

重い兜をおろすと、アイシスが意味深な笑顔で頬に手を当て、俺を見つめていた。何？ 惚れたのか？ 俺にはもう嫁が5人もいるぜ？

「変な事を考えるでない。しかし そうか、お主がグランバニアのナギか……」

心が読めるのか？ しかし何だ？ 俺って有名人？

「グランバニアに行くのなら、ここより東の大陸じゃ。険しき山を越えねばならぬぞ……小娘共にはキツイのではないか？ 【特にその二人以外は】その身体ではのう？」

「わ、私？ 体力には自信はありますよ！ 奴隷でしたから！」

「私も女ではあるが武人の端くれだ。険しき山など苦にはならん」

自信満々に答えるマリアとピエール。

話聞いてなかったでしょ？ 君達二人は大丈夫らしいぞ？

更にマリアに関しては確かに奴隷だったけど期間も短かったし岩も運べなかったはずだが……？

しかし、ビアンカだってマリアに負けないぐらいの体力はあるし、ユキはある意味チートメイドだし……。不安があるとすればフローラ位なもんだけど、それでも一般人以上の体力はあるし……。何故にホワイイ？ まあ気分とか悪くなるようなら馬車の方で休んで

もらっても良いだろうな。

「お主もやりおるのう？ 溜まっとなるようなら今夜、妾の布団を温めに来て良いぞ？ 一発ぐらいなら手伝ってやろう」

「なっ！？」

「ナギさんは私達と宿に泊まるんです！！」

「そうよ！ 発展途上どころか」

「成長の止まった幼女なんか相手にしません！」

ビキッ！

「……殺すぞ小娘共」

「「「言い過ぎました！！」「」「」」

天空のかぶとは貰えないらしい。

勇者を連れてくれば、くれるそうだ。

さっさと出て来いよ勇者。どこで何してんだよ。

父さんも俺も親子二代で探して、何十年行方不明だ勇者！

……まさか、ニートで引き籠もり！？

次の日。俺たちは宿屋に泊まったのだが、暑苦しくて朝起きると、窓の外は灼熱の砂漠に変わっていた。

「ご主人様。申し訳ありませんが、パトリシアを連れて来て頂いて

もよろしいですか？」

「ん？ いいよ。水飲み場だっけ？」

俺は何気なく水飲み場へとパトリシアがいる馬車へと向かった。

S i d e o u t

S i d e 女性陣

「さて、ご主人様は手はず通りに馬車を受け取りに行きました」

女性陣は丸い水晶を囲むように集まっている。

水晶に映るのは水飲み場付近の映像だ。馬車を迎えに行くにはこの道しかなく、女性陣はナギの登場を待った。

「昨日 話していた商人は？」

「ここですね。『依頼どおり』苦しむように蹲っています」

「ご主人様は買うのか？ それとも買わないのか……」

そして、水晶の端にナギが現れた。

「来た来た」

「どうなんでしょう?」

『ん? おっちゃん大丈夫か? 苦しそうだけど……』

「スルーされたら、ってドキドキしましたね」

「そうだな。だが基本的にナギは優しいからな」

『うう…… スミマセン。水を…… 申し訳ありませんが、オアシスマで手を貸していただけないでしょうか?』

「ほう、中々の演技だな」

「ってあれ? オジサンを端に寄せて、ナギさんオアシスに行っちゃったよ?」

「…… あ、帰ってきましたね。馬車も置いてきた?」

「いや、水を先に持ってきたみたいね」

「日陰に寄せて、水を…… 適切な処置ですね」

『ゆっくり飲めよ。一気に飲むなよ。ゆっくりゆっくり……』

『…… ああ、ありがとうございます旅の方。まさか昨日までの吹雪が一変するとは思ってもよらず、何とか厚着していた服を脱ぐまでは出来たのですが…… いやはや、お恥ずかしい』

『ああ吹雪ね……。昨日まですげー寒かったからな』

『ふう、だいぶ落ち着きました。本当にありがとうございます。実は私、旅の商いをしておりまして、助けていただいたお礼にお安く

しておきますが、いかがでしょう？」

『商売上手だな。何を売ってるんだ？』

『お兄さんはイケメンですね。引く手数多の女性がいらつしやることでしょう。こちらなんて如何ですか？ 夜のお供に【ファイトー発】。倫間違いなし。女性もメロメロですよ？』

『ふーん』

『正規の薬品でして、副作用や問題なども御座いません』

『へーほほおー』

『こ、こちらを通常600ゴールドのところ300ゴールドにて…』

『あ、あれ！？ 興味なさそうだよ！？』

『ふむ……どういうことだろうな？』

『男性の方なら飛びつく商品だって聞いたんだけど……』

『アレが無くてモナギさんのことは大好きですけど……』

『うん……アレでどうなるのか楽しみっていうか……ねえ？』

女性陣は困惑しながらも若干顔を赤らめて想像している。一方のナギはそのファイトー発の小瓶と、その説明書きを見ているだけで生返事のような。

『なるほどね。折角だけど　いいや、間に合ってるよ』

『そうですか？　……助けて頂いて何のお返しも出来ずに申し訳ないのですが』

『いやいや。困ったときはお互い様だろ？　それに、良い情報を貰った』

「「「「「良い情報？」「「「「「

気になる発言を残し、ナギは馬車を連れて宿屋の方に向かってきた。その発言は何だったのか？　確認する術は無く。少し悶々とした面持ちで女性陣はテルパドールを出る支度をした。

S i d e o u t

【フアイト一発】

効能：　攻撃力倍増　肉体疲労　虚弱体質　風邪気味　滋養強壮
食欲不振　栄養補給　精力倍増　印の付いた項目には特に効きます！

用法容量：大人1日3本まで。　1本でも効果は抜群です。

魔法が使えるけど『バイキルト』が使えない。魔法自体が使えないあなた！　『バイキルトと同じ効果』のフアイト一発で長い夜をお

楽しみください。 裏技……魔法が使える方は『バイキルト』と『スカラ』で……

その夜。

次の大陸へ、と意気込んでいた筈の旅の一行は、何故かテルパドールにもう一日宿泊した。

その宿屋の一室では、音声結界と衝撃結界が張られており、音がまったく漏れなかったという。何か重要な話をしていたのか？ はたまた、かなり大きな音が出ていたのか？ 大声を出していたのかは不明だが、揺れも騒がしさもなく、静かに使っているならば宿屋としても文句は無い。

ただ……テルパドールの女王アイシスもその部屋に入ったとか、入っていないだとか……何も答えは出ないが、朝その部屋から出てきた者達は、砂漠の乾燥地帯にいたはずなのだが、かなりツヤツヤしていたようだ。

アイシスもその日はツヤツヤしていたそうな。

……もう一度言うが、何があったかは不明である。

13 砂漠の国で静かに大騒ぎ？（後書き）

感想は随時受付中です

フリスタ「あゝ。今回のサブタイトルも悩んだな」

カランコロンカラン♪

アイシス「おおここじゃここじゃ。ゲストのアイシスじゃ」

フリスタ「あ、お待ちしておりました。では舞台裏DQN！始めまゝす」

アイシス「早速なんじゃがの。今回のサブタイトル何じゃが……【絶倫バイキルト】がしつくり来ると思ったんじゃが？」

フリスタ「あゝそうなんですよね。でもホラ、舞台裏だから書けますけど、本編のサブタイではやり過ぎかなって思いまして、それに何気なく調べてみたら、ソレで出版物も出ているようでした。避けました」

アイシス「まあ満足した故に妾はいいがの……」

フリスタ「はい、ツヤツヤでございます」

アイシス「それから、これまた妾にはどーでもよいのじゃが。種の話はどーしたのじゃ？ マキバオーがどーのこーのと、前回の次回

予告に書いておったが？」

フリスタ「メダル王の城で少し書こうと思ったんですけど、『あ、ここにアイツ出現しないのか』と気付いて、更にそこまで行けなくて。アイシスさんばかり書いてましたね」

アイシス「良い心がけじゃが、読み手が『またかよ。予定通りに進められねー駄作者だな』と思うのでないか？」

フリスタ「……次回！！ DQN！！」

アイシス「むお！ いきなりか！！ 第14話 『小さなメダルと王様と』……また思い通りに進まなそうなタイトルじゃのう？」

フリスタ「では次回もー！！」

アイシス「お主も話を聞かんな！？ お主のハートにライデインじや？」

14 シリアス全開！？ 全力全壊！？（前書き）

久しぶりの更新。待ってた人いますかね？

今回はグランバニアに到着するまでを描きますが、

やっと自分の中でのエンディングを想像出来初めたところです。

それでも思考錯誤して書いてます。ではDON！ 始まります。

14 シリアス全開！？ 全力全壊！？

テルパドールの隣の島国。そこには【メダル王】と噂される小さいメダルを集めるのが趣味な王様がいた。その島には小さい城があるだけで、他には何もない。そう、そこがメダル王の城なのだ。

城の中には宿屋と預り所がある他には武器屋があつたりすることもない。そこに立ち寄ったのは隣の砂漠からやってきた人間と魔物という特殊な組み合わせの旅人だった。

S i d e ナギ

「あ、やっぱここじゃないんだな」

「はい、コチラはメダル王の城がある島です」

メイドのユキはパトリシアの手綱を握りながら答える。

馬車の中には先日結婚した他の嫁さん達とムツクルとマキバオーがいる。

「メダル王って？」

「小さなメダルと言われる……コチラですね。コレを集めるのが生きがいと言う王様がいますのです。集めますと、かなりレアな武器や防具と交換してくれますよ」

そう言うてユキはメダルを見せてくれた。

ああ、壺とか樽とかに入ってたコレね。

「なー。ビアンカ達は持つてる？ このメダル」

「あ、コレね。何故か持つてるわね。お父さんが持たせてくれた物に入ってたわ」

「私もお父様から貰いましたわ。必要になる時が来るとかで」

「私も武者修行中に集めていたな。最近は見かけなかったが、これだろう？」

「カジノコインに何故か紛れててコレは持って帰って下さいって言われて持ってますよ。けっこうありますけど……」

おお、こんなにあるのか……何と交換できるんだろう？

「おっほん！ ワシがメダル王じゃ、ほほうメダルを持って来たと申すか」

「あ、はい。コレ何ですけど……よつと」

ドスンッ！

俺は皆から貰ったメダルを宝箱の空箱に詰め込み持って来ていた。

カパッ

「なっ！ 何と！！ 何枚あるのじゃ！？」

「数え間違えていなければ、823枚です」

「うひょーっ！ たまらん！ コイン風呂の用意をせい！！」

「ハッ！！」

衛兵の付き人はメダルを回収し、奥へと消えて行つた。

「何でも褒美を取らせよう。と言うか好きなモノを持って行くがよい！」

パンパンッ

王様が手を叩くと別の人が奥から可動式のクローゼットを運んでくる。

「おお……お？ コレは何ですか？」

「ほうそれか？ それはのうメタルキングの剣や盾、鎧などとは比べ物にならないほどの一品じゃよ。しかしのう、装備できる者がいないので誰も交換して行かないのじゃよ。値も付けられんしのう、世界で一つだけの防具3点セットじゃ」

へー……。何だろこの感じ？ 何か……。

スチャ……パチッ……ファサッ……

「今日は驚かされてばかりじゃのう……まさか装備できる者が目の前に現れようとは……持つて行くがよい。太陽の冠・王者のマント・光の盾じゃ。ではのう……」

ガシッ

「ソツチのもちよーだい」

「強欲じゃの……」

「と言う訳で、根こそぎ貰ってきました！ 預り所で預かってもらってるけどね」

「このリストのモノを全部？ 凄いわね……」

「御主人様の装備品はどれも素晴らしいですね。インパスで調べてみましたけど、どれも特殊能力や炎や吹雪系の魔法も効き難い素材で出来てますね」

「似合ってますよナギさん」

「ああ、流石は私達の旦那様だな」

S i d e o u t

旅の一行は更に東の大陸へと向かった。

次の大陸に着くまでに1週間ほどが掛ったが、順調な旅と言えた。

大陸に着くと、すぐに宿屋が目に入った。そこは【ネッドの宿屋】。すぐ近くに【チゾット山脈】への洞窟がある。

チゾットを越えればグランバニアは目と鼻の先だと言う。

そして、旅人達は山を登り、チゾットへの洞窟へと進んで行った。

Side ナギ

「ねーねー着てよ」

「い、今は嫌よ！ その、宿屋とかでなら良いけど……」

「じゃあフローラは？」

「そ、その恥ずかしいですし……」

残念だ……。メダル王の城から持ってきた【シルクのビスチエ】を着てくれません。ガッツが足りないのでしょうか？

「これって冷たくて気持ちいいね」

「炎系の魔法等を軽減するみたいだな」

マリアとピエールはさっきルドマンさんから届けられた水の羽衣を着ている。見えそうで見えない。

「それってもしかして……！」

「穿いてないですね。アレを装備すると下着なども濡れてしまますからね。裸で装備するのが普通ですね……」

そうかそうか！ 良いね！ 良いよー！

「って言うかさ……大丈夫？　ピアンカとフローラ、それにユキも顔色悪いけど……」

「だ、大丈夫よ。ほら昨日寝付けなかったから……」

「怖かったですよね。あはは……包丁を研ぐ音がして、身体は金縛りなんですから……」

「もう少しでチゾットですから。着いたら休みましょう。かなりの高地ですから、酸素も薄いので、疲労しやすいでしょう……」

「ねえピエール。私達は平気よね？」

「ああ……ピアンカとフローラが体調を崩すのは理解できるが、まさかユキまでとはな……」

そうなんだよな。ユキが体調崩す何て考えもしなかったよ……。

「おっ、出口っぽいな」

【チゾット】

山頂近くに暮らす人たちの小さな村だ。洞窟内等は手強い魔物も多いため、それなりに強力な武具も揃っているようだ。宿屋も大きいので、休憩などには大変助かると言える。

「な、ナギ……」

「ナギさん……」

「御主人様。申し訳ありま……」

ドサッ

「え？ ……ビアンカ？ フローラ？ ユキ？」

え？ 何？ ドッキリ？

「び、ビアンカ！？ フローラ！？ ユキ！？ 何で！？ お、起きてくれよ！」

「落ちて着けナギ！ マリア！ 人を呼んで来い！ マキバオー！ ムツクル！ 背中を貸してくれ！」

「わ、分かったわ！」

「がうがう！」

「んあ！」

ピエールの声がやけに遠くに聞こえる。

「ビアンカ！ フローラ！ ユキ！ <ベホイミ！> ……何で！？ <ベホイミ！> くっ！ <ベホイミ！ ベホイミ！>」

パシーンッ！！

「落ち着けと言っている！ 宿屋に運んでからだ！ 手伝え！」

「あ、ああ……う、うん」

先に運ばれて行くビアンカとフローラを見て、ハツとなりユキを抱えて宿屋に飛び込んだ。

その日、ビアンカ達は目覚めなかった。でも脈とか、呼吸はしているから見守るしか無くて、俺は眠れずにずっと3人の傍にいた。

「ビアンカ……フローラ……ユキ……大丈夫だよな？ ……」

「な、ナギさん。代わりますから休んで下さい。ナギさんも洞窟で魔物と戦い続けて疲れてるんですから……」

「そうだぞ。そこにいても何も変わらない。何かあればすぐに知らせる。だから休めナギ」

「……うん。ごめん」

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに入るが眠ることは無かった。もしも、もしも目が覚めなかったら？

ここでお別れだとしたら？

それを考えるだけで、夜以上の闇が俺の心を蝕んでいった。

——そして、朝。

コンコン、ガチャ

「入るぞ、ナギ。目が覚めたぞ」

「そう……良かった……良かった……っ！ ごめん、すぐ行くからもう少しだけ待ってくれ！」

「ふふ、ああ……二度寝していると伝えておこう」

俺は顔を洗い、目から流れ出るモノを流して行く。

「ごめんね。心配かけちゃったね」

「もう大丈夫ですから」

「申し訳ありません。メイド失格ですね。汚名返上の機会を頂きました
思います」

「別に心配してねーよ。さあ行くぞ。グランバニアはもう橋の上から見えるんだからな……何だよ？」

「ありがとね。ナギ」

「ありがとございます。ナギさん」

「べ、別にアンタの為に倒れたんじゃないんだからね」

「おいユキ。何で棒読みでツンデレやったんだ？」

「空気を和ませようかと思ひまして。汚名返上になりましたか？」

名誉返上してるな。

「いいな。私も倒れれば心配されたのかな？」

「そんな事を考えてると怒られるぞ？」

S i d e o u t

険しい山々に囲まれた軍事国家【グランバニア王国】
自然の山々は敵国を寄せ付けず、寄って来られたとしても、一騎当
千のグランバニアの兵士はその槍を、その剣を正義の名の下に振り
かざし勝利を飾る。

と言うのは割と過去の話。パパス王の代からはそう言ったことも無くなり、平和な国へとなっていた。それでも最強の軍事国家であることには何ら変わりはない。

さて、パパス王の息子のナギが救出され、旅を始めたと言う手紙がパパスの下に届いたのは半年ほど前の事。

パパスは手紙を何度も読み返し遂に玉座から立ち上がった。

「剣を……」

「ハッ！」

名も無い刀鍛冶が打った名も無い剣。しかし、その剣は一度も折れることはなく、錆びることもなく、この剣を持つ男は最強だと、何度も何度も知らしめて来た。

「どうぞー！」

「うむ……」

ブンッ！

王が剣を一振りする。その刃風はかまいたちを起こし、玉座の間の御旗を薙倒す。

「ぐむっ……ゴフッ……ゴホッゴホッ……」

「国王陛下！」

「陛下！！！」

「騒ぐな……。……ゲマめ」

王は過去を思い出す。10年以上も前になるラインハットの古代遺跡での一件だ。愛する息子を盾にされ、殴られ、斬り刻まれ続け、傷口に魔物の血が入ってしまった。その血は、パパスの体内に侵食し、少しずつ、しかし、確実に生命力を奪って行った。誰も浸食を止めることはできず、パパスは諦めた。いや、覚悟を決めたのだ。

バンツ！

「報告します！」

勢いよく入って来る兵士は敬礼をして続けた。

「長旅中のメイド長が戻ってまいりました！ 男子が1名、メイド長を含む女性が5名！ キラーパンサーと白く大きなスライムが1体ずつ！ 馬車が1台です！ 魔物に戦闘の意思はなさそうです！」

「来たか……。通せ……。そして、誰も良いと言っまで入って来るな」

「ハッ！！」「ハッ！！」「ハッ！！」

「兵士長……。私は勝てると思うか？」

「その様なお身体で戦う事自体が無謀と言えましょう……。それに相手は陛下とマーサ様のご子息。更に遠くのラインハットの大陸より、このグランバニアまで来た速さ……。その成長のほどは計りしれません。……ですが、親は子供に見せる意地があるかと思えます」

「ふっ、そうだな。……槍も2本用意しろ」

「ハッ！」

ヒュンヒュン……ガスッ！ ガスッ！

槍を床に突き立て、パパスは剣の柄に手を置き、仁王立ちして待った。

ここまで険しい道のりを成長し乗り越えてきた息子进行を描き、胸を躍らせていた。

Side ナギ

「おかえりなさいませメイド長。どうぞお通り下さい」

「御苦労さまです」

いつの間にメイド長にまでなってたんだか……。

ユキの後について行く俺達は奥へ奥へ、上へ上へと通され、遂に玉座の間の前にまで来た。

「御主人様……今一度申し上げます。パパス様は長くはありません。恐らく、この扉の向こうで既に待っているかと思われ……」

「うん。いるね……少し、ここで待っててくれないか？ 一人で行きたい」

言葉無くユキ達は頷く。

扉の前でも伝わって来る殺気。いや、殺す気はない。でも伝わって来る『開けた時が開始の合図』と言わんばかりの気溜まり。扉にかける手から汗が噴き出してくる。

そうだ。俺の父さんは、こんなに凄い人だったんだ。俺の父さんはこんなに強いんだ。そう伝わって来る。俺はこんなに凄い人に守られていて、まだ見ぬ勇者と母さんの事を託されたんだ。だから、俺が負けるなんて事はあってはいけないんだ……。それは分かっているのに扉を開ける事が出来ない。

手が、足が、身体が震える。

武者震い？

違う、怖いんだ。

この扉を開ければ父さんと戦う事になる。

「ナギ」

「な、何？」

突然のピアノカの声にビクつとした。完全にビビってるな俺。

「終わったらさ、私達と結婚したことをパパス叔父様に報告しないといけないこと……忘れないでよ？」

……ははは、そうだな。

震えも止まった。

「ありがとう。行ってくる」

ギィィィィィ……バタンツ！

ずっと先に大きな椅子がある。玉座だ。

しかし、そこに座ることも無く、剣の柄に手を置き立つ父の姿がある。

「良い顔になったな」

「そうかな？ そっちは少し痩せた？」

「どうだろうな？ お前は遅しくなったな」

「へへ……その分、差は縮まってるってことだね」

交わされる言葉は少ない。

一国の玉座の間で交わして良い口調では無い。ただ、俺達にはそれが一番良かった。だって、これから始まるんだから。

「……俺との約束覚えてる？」

「剣の稽古だったな？」

「うん」

気が更に締まって行く。部屋を覆っていた気は、父さんへと集約されて行く。

「……来い」

「……うん!!」

ガキイイインッ!!!!

そして、俺と父さんの真剣勝負の稽古が始まったんだ。

S i d e o u t

14 シリアス全開！？ 全力全壊！？（後書き）

感想は随時受付中です。

フリ「いやゝ1か月も更新してなかったよ。今日のゲストは誰かな？」

カランコロンカラン」

ナギ「あっ！ いやがったな！ 遅いんだよ更新が！」

フリ「はい、と言う訳で今回のゲストは主人公のナギです。では舞台裏DQN！始まりまゝす」

ナギ「どうも。父さんと戦う事になりました」

フリ「明らかに稽古じゃないよねw」

ナギ「真剣勝負だからな。勝って結婚したことを報告するんだ」

フリ「負けてもしなさいな。あ、それから倒れたね奥さん達」

ナギ「ああ、何で倒れたんだか……マジで泣きそうになったぞ」

フリ「泣いてましたけど。何故倒れたかは秘密です。良い事ですから」

ナギ「倒れて良い事って何だよ！？」

フリ「はいはい。では次回DQN！ 第15話」

ナギ「『名前を決めて下さい』……何だってんだよ？」

フリ「では次回も」

ナギ「お前のハートにギガデイン！」

15 試練の洞窟（前書き）

おめでた？

おめでとー！

と言う訳で、今回は試練の洞窟を攻略します。

久しぶりのDQN！で少し感覚が鈍ってます。申し訳ない！

15 試練の洞窟

響き渡る剣戟。二つの影は重なり、離れ、再びぶつかり合い、衝撃波を生み出す。何度も繰り返しているその行為は、真剣勝負にか見えなかった。

ガキンッ！！

「得意の魔法は使わないのか？」

「剣の稽古で……しよっ！」

そう、これは10年以上も前に交わされた親子の約束だった。行方不明になり成長した子供は凄まじい速さで親の元へと戻って来た。子供の成長に親は喜び、そして、親として負ける訳にもいかないと意地になっている面もある。

しかし、タイムリミットも近かった。親は病に侵され、ここまで動ける身体ではなかったのだ。

突き立てられた槍を取り、殺す気合いで威嚇し投擲する。一瞬の動作停止が隙だった。その隙を逃す訳もなく、パパスは剣を全力で振るった。

「くっ！ 『ブレイク！！』」

父さんの攻撃はどれも重い一撃だった。そして、何よりも速かった。これだ。俺が子供の頃に見た高速の剣戟はこれなんだ。気付いた時には2匹、3匹と俺の倍は魔物を殺していた。目で追う事も出来ないモノだつてあつた。父さんだけの技だつたに違いない。誰にも真似なんて出来ない二回行動とも言える連撃。『ハヤブサの剣』の様に軽い剣でもないあの剣で良くあそこまで動けるモノだ。でも……あの頃ほどの早さが無い。気迫が無い。いや、この場に来るまではかなりの殺気を感じていられた。それが極端に落ちて行っている。俺が成長したからなのか。それともやつぱり……。

そして、父さんは突き立てられていた最後の槍に手を掛けた。凄まじい殺気が先に俺の動きを封じていた。弱まっているとはいえ殺気の使い方が巧い。緩急をつけて、殺気の重さを更に重く感じさせる。投げられた槍は真っ直ぐに飛んでくる。俺はそれを剣で弾くが、父さんは正面から既に斬り掛って来ていた。

「くっ！ 『ブレイク！』」

ガキイイインツ！！！！……ドスツ！！

俺は合体剣を総分離させ、ソードブレイカーの要領で父さんの剣を挟みこんで折った。そして、第2の剣『オーガニクス』を父さんの首筋で寸止めた。

「折れたか……私の負けだな。強くなつたなナギ」

「俺は……今、剣を咄嗟に分離させた……2本以上使った俺の負けだよ父さん」

「それを言うなら私は槍を使った。私の負けだ」

「やっぱり父さんは凄いや……その、ただいま」

「ああ……やっと会えたな、ナギ……ごふっ！　ゴホッゴホッ！！」

「っ！　と、父さ……！！」

ボタンッ！！

「パパス様！！」

「国王陛下！！」

俺は呆然とした。父親のその姿に。聞いてはいた。長くはないとでも、どこかで大丈夫だって。何の根拠もない気持ちでいたんだ。俺の目の前で血反吐を吐いて膝を付く姿なんて、想像もしてなかったし、今もこの姿に嘘を探してたんだ……。

父さんは玉座に座ると、少し落ち着いたのか、生気の薄い顔で微笑んだ。

「さて、久しぶりだな……話は全て聞いた。まさかこんなに可愛らしいお嫁さん達だったとはな。初めましてお嬢様方、私はナギの父親のパパスだ。こんな姿で申し訳ない」

「……初めまして！……」

「申し訳ありませんパパス様。私も……その……」

「ユキか。ナギが選んだんだろう。支えてやってくれ。それにビアンカ。久しぶりだな……大きくなった」
「お久しぶりです伯父……さま」

ドサッ

「び、ビアンカ!？」

「またか! マリア!」

「うん!

ユキさんにフローラさんも顔色悪いですよ。無理しないでください!」

チゾット山脈での一件を思い出す。また原因不明で倒れるのか。しかし、その原因は数十分後に分かる事になる。

「——おめでた?」

「はい。赤ちゃんが出来てますね。ビアンカさん。フローラさん。そして、メイド長のユキさんにまで……」

城のメイドさんがそう俺に説明する。

……赤さんが。そりゃあべホイミで治らないわけだ……。

「はっはっはっはっ。まさか新しい命も一緒にやって来ていたとはな」

「父さん……。3人とも何で言ってくれなかったんだよ」

「わ、私にも言ってくれないなんて酷くない!？」

「同じ女として少し悲しいぞ……」

「そりゃあ、言ったら無理させないようにしてくれるでしょうけど」
「出来るだけ言わない方が良いと思ったんです。心配掛けたくないですし」

「お腹隠すのも大変だったんですよ……ふふふ」

ユキの幻覚魔法でわざわざお腹の大きさを隠していたようだ。しかし、3人もいっぺんにか……。可愛い子達だと良いな……。

「ナギ。少し話がある」

「え、あ、うん」

「ナギ。子供を授かって幸せな気分のところをすまないが、私はそう長くないだろう」

「い、いきなり何言い出すんだよ父さん！」

「まあ聞け。私はお前に王位を譲りたいと思う。子供も産まれると言うなら跡継ぎも問題ないしな。そこでだ。全ての者が納得するわけではないのだ。この城の北東に『試練の洞窟』と言うものがある。そこに『王家の証』というモノがあるので取って来て欲しいのだ」
「何でそんな事をしなくちゃ……」

「通過儀礼。世の中とは面倒臭いものなのだ」

「……俺には、国王なんて出来ないよ」

「私だって最初はそう思ったさ。大丈夫だ。みんなが支えてくれる。お前一人の国ではない。守るべきモノがあって初めて国なのだ。そ

れは国民であり、家族でもある」

元二トに国王なんてやらせたら大変な事になるぞ。でも父さんの目はマジだ。

「……分かったよ。とりあえず、その『試練の洞窟』って言うのに行つて来る」

「ああ」

S i d e o u t

S i d e ? ? ?

数年前に長旅から帰つて来たと思えば、かつての強靱な身体を失い、魔物の血に侵された病の身体。パパス王を救うにはやはり、あの魔物の助けが必要なのだ。息子のナギ様が生きていたことは喜ばしい、そして国王になる事自体は反対ではない。しかし、時機ではないのだ。パパス王の国に存命して貰わなくてはならないのだ。

「分かつているな？」

「へっ、俺あ金さえ貰えれば何でもやるさ。

俺の必殺技を喰らった奴は一溜まりもねえさ」

これも国のため。グランバニア全体のためなのだ。まずはナギ様にはまだ力不足だと分かつて頂いた後、あの魔物の力を借りてパパ

ス王の病を……。魔物の力を借りる事が間違っている事は分かっている。今回だけだ。私はパパス王を、この国を救うためなら悪魔にでも魂を売ろう。

Side out

Side ナギ

「じゃ、行つて来るぞ」

「気をつけてね」

「マリアさんも、ピエールさんも」

「頑張つて下さいね御主人様」

そう言つて、俺達は北東を目指す。ビアンカ達はこれ以上の無理はさせられない。馬車は置いて来た。俺、ピエール（マキバオーのセツト）、ムツクル、マリアだけだったからだ。マリアはマリアでムツクルに乗つてゐる……。そんなマリアはムツクルの背を撫でながら質問してくる。

「王家の証でしたっけ？ それを持ちかえると王様なんですか？」

「んーそうらしい。王位継承の通過儀礼なんだと」

森を超え、橋を超えて辿り着いたのは洞窟だった。そして、第一

の難関らしき入り口だった。

「ドアが4つ……どの部屋にも鳥の彫像が対になってあるな」
「んあ」

「床のスイッチで向きが変わるみたいですね」
「がう」

「全部揃えればいいんだろう」

ダララララララ……ジャン！ 正解！！ ピーピー！！ ドンッ！ ドンッ！ ……なんて頭の中で花火やら何やらでお祭り騒ぎを起こしてみるが、ここはまだ入り口だ。まだ慌てる様な時間じゃない。

ゴゴゴゴゴゴ……ッ！

「むっ、何か音がしたな。行ってみよう」

部屋を出て入口の方に向かうが、入口が消えていた。代わりに現れていたのは地下への階段だ。

「入口が消えるとは……」
「んあ……」
「……帰れますよね？」
「きよふくん……」

ああ、まだ見ぬ子どもたちよ。君達の父親である俺は顔も見ることなくここに骨を埋める事になるかも知れん。どうか健やかに育ってほしい。

「ナギさん！ 祈るのやめて下さいよー！」

更に進むと石造りではない地面の道があった。奥には頑丈そうな扉が一枚。念の為に反対側を歩いてみる。そこには岩が一つ。

「これも試練の一つでしょうか？」

「多分そうだろうな。……普通の扉にしては頑丈すぎる作りだ。しかしこの鍵は簡単な作りながら見た事がある。ナギ、どう思う？」

「ふむ……岩で扉を壊す？」

「恐らく不正解だ……この扉の造りは以前に似たようなモノを見た」

「どこでさ？」

「あ、もしかして……大きさは違うけど、ビアンカさんがいた村の水門の？ 水に浸かってて分かり辛かったけど」

「そうだ。つまり……この奥は水の可能性が高い」

ガチャッ

「あ、開いた」

「ナギ！？」

「ナギさん！？」

ザッパアアアアアアンツ！！

俺達は流されて地下に落ちた。

「く、なんて難解な罠なんだ！！ 恐ろしい……」

「ナギさん……で、でもこれでさっきの扉は大丈夫ですよ」

「ああ……いや、そうでもなさそうだぞ？」

そこには再び閉まっている頑丈そうな扉があった。

「閉まってる……」

「閉まってますね」

「閉まってるな」

「……仕方ない」

ガシッ！

「そう言いつつ、もう一度何も考え無しに開けようとしているのは何でだ」

「え！？ 水も補充されてる訳が無いだろ！？」

「そうですよね……」

「よく考えても見ろ、入口の扉が消えるぐらいワケない洞窟なんだ

ぞ？ 水が補充されていても不思議ではないだろう？」

……わけが分からないよ。今この洞窟の謎はエントロピーを凌駕した！

「とか言いつつオープン！」

ガチャ！！

「あっコラー！！」

「また！？」

ザッパアアアアアアンツ！！

「これで分かったな。あの岩がキーポイントだ！」

「ナギ、少し黙っててくれないか？」

「ヘンリーさん曰く、グリーンガムのムチって凄く痛いらしいですよ？」

「んあゝ……」

「グルルルル……」

早く帰って温かいご飯が食べたい……。

そんなこんなでやって来ました一番奥らしき部屋。

「これが王家の証ですか……」

「あの鳥の彫像もシンボルマークだと言う訳か」

「ねえねえジェリーマンがいるよジェリーマン。わあ『モシヤス』
してマリアそっくりに〜」 お、こっちはピエールそっくりに〜」

「じゃあ帰りましょうか」

「ああ、長居は無用だ。ピアノ力達が待っているだろうからな」

イジメがある。ジェリーマン、少し揉ませて。……ほほうジェリ
ー感触の胸……これは……むう……中々……って……ズバシユッ
……！ 気持ち悪いわ……！ バーカ……！ アーホ……！ お前の母ちゃ
んでーべそ……！ 一足先に帰ってやる……！

「ってうおあつ……!？」

「おおと〜ここは通さないぜ。アンタは王に相応しくない。更に
言うならカワイイ彼女まで連れてイケメン……契約内容は違うが、
ム力つくからここで死んでもらおうか」

……え、何？ このパンツ一丁で覆面被った変態さん。

「ナギさんが王に相応しくないですって……!？」

「反対派の者がいたか！ そうはさせんぞ……!」

あ、いや、突っ込みどころはそこじゃなくて……。

「ふははは……！ 貴様を倒して大金持ちだあ！ くらえっ！ 『大銀
河超紅蓮螺巖電撃科学暗黒斧・稲妻電撃プラズマザンバーリリカル

遠心重力スーパーサンダークラシアン吸引力の変わらないただ一つの……」

「長いわぁーッ！！！」
タスマ
投影開始！！
トレース・オン
からの……壊れた幻想！！」
ブローケン・ファン

俺はメタルキングの剣を投影し投げて大爆発させた。汚ない花火だぜ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……ッ！！！！

「なっ！？ 崩れるぞ！？」

「んああああ！？」

「は、早く脱出しないと！！」

「がうがう！！」

「な、ナギさん！？ 急がないと！！」

良い事を思いついた。今思えば入り口は消えてしまっている。しかし、今の様な爆発を上に向けて放てば……と言うか、一直線に収束させた魔法でもブチかませば出られるだろ。管理局の白い悪魔の人もそうしていたよな確か。

「少し下がってろよ……投影開始！！ ブレイク！！ セブンソー
ド……」

合体剣を投影し、総分離させる。いつもは分散させて投げて爆発させるが、今回は頭上目掛けて一直線に投げて行く。爆発で決っていく天井。4本目で恐らく地下1階ぐらゐまで突破出来たであろう。残り2本のバタフライエッジを投げ、それが爆発すると一番遠くの

天井は崩れた。

「相変わらず凄いな……」

「空が見えました!!」

「よっしゃ！ 行けぜ！『ルーラー!!』」

ふいふ帰って来れた。

「2週間ぶりとなるか……王家の証は持ち帰れたか？」

「2週間ぶり？ 俺達行って帰って来ただけだよな？」

「あ、ああそのはずだが……」

「お義父様。どうい^とう事でしょうか？」

「それは私の方から説明いたしましょう。かつて、パパス王のが王に成るべく向かわれた頃は魔物も出ず問題の無い試練の洞窟でしたが、数年前より魔物が多く出るようになり、難儀しておりました。その中に時間を操る魔物がいたかと思われま^す。ナギ様達は1日のつもりでも、こちらでは2週間ほど経ってしまっているのです」

「へえ……あつ！ ユキは！？ ビアンカは！？ フローラは！？」

「ナギ様達は、まだお戻りになりませんか！？ これはナギ様！！早くこちらへ!!」

「ちょうど良かったなナギ」

「へ？　へ？　何？　どういつ事？」

「「「オギヤー！　オギヤー！　オギヤー……！！」」」

その日、俺は3人の子供の父親になった。

S i d e o u t

「右大臣……魔物が出るとは聞いておらぬぞ？」

「パパス王のお耳に入れる程の事ではありませんでしたので」

「……そうか。時間軸を操る魔物か……左大臣……オジロン」

「は、兄上。『左大臣』とは、まだ呼ばれ慣れませんか。はっはっはっ」

「念のため、その魔物について調べておいてくれないか」

「は、かしこまりました。ナギ君の子供、兄上はお爺様になるんですね」

「む？ ……うむ」

「御健勝で在らせられませ。では」

パパス王は息子の無事を喜んだ。自分に孫が出来た事も喜ばしかった。自分が死ぬ前に体験出来た事に心から喜びの声を密かに上げた。しかし、良からぬ何かも感じていた。

ピアンカの子供は母親譲りの金色の髪をした男の子。名前を『レックス』

フローラの子供は深い藍よりも青い髪をした女の子。名前を『タバサ』

ユキの子供は黒髪で一番大人しそうな女の子。名前を『アルルウ』

そして、子供たちが生まれ。その次の日は、パパス王の息子のナギが生きてこの国に帰って来た事。そして、そのナギが同時に子供を3人も授かったことを祝う事で、国中は大騒ぎとなっていた。

新国王についてはナギは断った。パパスが死んだら考えるという答えを出したのだ。そこには元二トだから……という考えからではなく、父親にずっと生きていて欲しいという考えからであった。

15 試練の洞窟（後書き）

感想は随時受付中。

フリスタ「久しぶりだな。この打ち合わせの店」

カランコロンカラン♪

????「遅ーいつ！！何日！？ 何週間！？ 何ヶ月待たせるのよ！？」

フリスタ「と言う訳で、今回のゲストは」

マリア「マリアよ。久しぶり！」

フリスタ「最近どうですか？」

マリア「どうもこうも無いわよ。私とピエールだけ妊娠しないんだもん。それに『ムツクル』なんて名前つけるから『アルルウ』なんて名前まで付いちゃってさ。可愛いわよ？ 可愛いんだけどさ、何て言うか私にもそういうの欲しいじゃない？」

フリスタ「まあ、元々は正花嫁じゃ無いわけですし。これでも飲んで」

マリア「うるひゃいわね。聞いてりゆの？ つまりにえ。わらしが言いらいのほ」

フリスタ「そうですね〜アルルウ可愛いですものね〜」

と言う訳で！

ユキの子供はアルルウにしました！ 『うたわれるもの』のアルルウです。最高だね！ 「おとーさん」とか言われた日にあー！！ たまらんねー！！

それと、オジロン王は左大臣として存在し、元々大臣だった男は右大臣として存在します。どうせすぐ死ぬんだろーな右大臣w

では、次回も〜

マリア 「あなたのハートにライディン？ にへへへ〜……くう〜
zzz……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7473p/>

DQN！

2011年7月23日00時34分発行